
流れ着いて!ミッドチルダ!

d.c.2隊長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ着いて！ミッドチルダ！

【Nコード】

N6350W

【作者名】

d・c・2隊長

【あらすじ】

それは夢で見た世界。

それは夢で出会った少女。

2人は時空を、次元を飛び越えて再び出会う。

それは、一つのif〜もしも〜の物語。

流れ着いて！ミッドチルダ！

始まります！

／注意）これは作者の前作”流れ着いて！藍蘭島！”のifの続編となります。

前作を読んで頂いた後に見て下さることを推奨致します。

更にキャラ崩壊やオリジナル展開、個人的解釈等が多々含まれる可能性があるので、苦手な方はバックボタン連打をお願いします。

プロローグ（前書き）

二作目入ります！

更新は藍蘭島に比べれば遅くなるとは思いますが、何卒御容赦をm（
——）m

プロローグ

ここはどこにあるか分からない、明治文化をそのまま残した島……
藍蘭島。

その島の住人の男達は12年前の百年に一度級の大波に飲まれ、一人残らずいなくなってしまった。

このままでは子孫が残せなくなり、滅ぶしか道はない。

しかし男達がいなくなった日から12年後の現在、島に2人の男が流れ着いた。

片方は行人^{いくと}という14の少年。

もう片方は右京^{うきょう}という20の青年だった。

彼らはこの島の住人達と少しずつ仲良くなり、いつしか数人の娘達から好意を寄せられていった。

多少のハプニングやシリアスな場面、危険な時もあった。

時には全力で戦ったりもした。

そんな激動(?)の4ヶ月が過ぎたとある日。

主人公である右京の日常はガラリと変わる事となる。

ここはちかげの屋敷にある倉庫……右京曰わくガラクタ部屋。

倉庫の中には壊れた電化製品や18禁を示す本、コスプレの衣装や部屋に入りきらない大量の本などがあつた。

右京はこの倉庫の整理をちかげと”一緒に”することになっていたのだが…………。

「ちかげのやろう…………まさか地下迷宮を使って逃げるとは…………」

ちかげはこの屋敷の特徴とも言える地下迷宮を使い、片付けから逃げ出したのだ。

流石の右京でも下手に迷宮に入れば出られない可能性もある為、仕方なく一人で片付けていた。

二、三時間は経つただろうか、倉庫は最初に見た時とは比べ物にならないほど整理されていた。

「よし、こんなもんだろ…………ちかげは後で説教をするとして…………ん？」

部屋から出ようとした右京の目に一つの青い光が止まる。

近づいて確認した所、それは少し大きめの青いビー玉のような球体だった。

青……よりも”蒼”というべき色合いに右京はしばらく目を奪われてしまう。

「……綺麗なビー玉……いや、宝石か？」

右京は無意識に”蒼”に向かって手を伸ばす。

そしてその指先が”蒼”に触れた時……それは起こった。

「うおっ！？」

「やっと……やっと見つけた……」

突如”蒼”が浮き上がり、倉庫の中に突風が巻き起こった。

同時に右京の脳内に直接、機械的な女性の声が響く。

「なんだ！？誰だ！？」

突然の有り得ない出来事に右京は混乱する。

そんなことはお構いなしに突風は強くなり、右京から視界を奪う。

「ようやく巡り会えた。幾千の時を超えてようやく……私の……」

「お前は……誰だ！？」

「私の……」マスター”となる男性^{ヒト}に」

「お前は……」

瞬間、右京の足元に魔法陣が広がる。

それはこの世界では理解出来ない文字。

この世界では有り得ない陣。

「共に……マイマスター」

魔法陣が強く発光し、倉庫内が光で埋め尽くされる。

目も開けられない程強く、けれども暖かな光の中で右京は確かに聞いた。

（私の名前は……レイ……）

やがて光は収束し、倉庫内はいつもの薄暗さを取り戻す。

しかしそこにはあの”蒼”と……。

右京の姿はなかった。

「ん？」

「どうかした？なのは」

「……ううん、何でもないよフェイトちゃん。ただ……」

何だか懐かしい感じがしたんだ。

プロローグ（後書き）

原作はうる覚えだし時系列分らないしでグダグダになりそうです
が……

頑張ります（＊。。（ノ

それは不屈の魂（前書き）

第二話となります。

オリジナル展開があるというより、オリジナル展開しかないような？

しかも短い……せめて4ページ以上は書けるように頑張りたいです。

それは不屈の魂

その世界の名前は”ミッドチルダ”。

地球とは異なる”次元”に存在する世界である。

このミッドチルダにはある組織が存在する。

その名は”時空管理局”。

無数に存在する世界を管理し、平和を守る組織である。

その時空管理局には若くしてエースと呼ばれる三人の女性がいた。

”八神はやて”、”フェイト・Ｔ・ハラオウン”…そして”高町なのは”。

まだ二十歳に満たない彼女達は類い希な魔力と実力を持ち、小学三年からの付き合いでもあった。

そんな親友である彼女達は、はやてをトップに一つの部隊を作った。

機動六課…正式名称”古代遺失物管理部機動六課”。

ロストロギアと呼ばれる、古代のオーバーテクノロジー、或いは間違った進化を続けて滅びてしまった世界の道具を管理する部隊である。

因みに、ロストロギアには危険な物が多く、ヘタをすれば世界を滅

ばしてしまうものも存在する為、時空管理局はこのロストログアの管理もしている。

様々な願いや思惑から生まれた機動六課には4人と一匹のフォワード陣……未来のエースがいた。

今はまだ小さな存在の彼女達は、なのはの指導によって少しずつ……しかし確実に力を付けていく。

そして訓練漬けの日々の中で、一つの事件が舞い込んだ。

それは、ミッドチルダ某所の山岳部を走る列車の中にあるロストログア、“レリック”を回収し、列車の中の“ガジェットドローン”と呼ばれる機動兵器を全て殲滅せよ、というもの。

この命を受けたはやてはフォワード陣となのは、フェイトに出撃するようにつた。

これがフォワード陣の最初の出撃となる。

山岳部へと向かうヘリの中でなのはは少しそわそわとしていた。

それは緊張というより、早く着きたいという焦りからきているように見えた。

「あの……高町隊長？どうしたんですか？」

「……ちょっとね、予感がするんだ」

青い髪を少女の問い掛けになのは顔を山岳部の方を向きながら答

える。

「予感…ですか？」

「うん、予感…とても大切な何かに出会える…そんな予感」

真剣で、それでいて嬉しそうな瞳。

へりの中にいる全員がその瞳に見入っていたその時、機動六課から通信が入る。

「（なのはさん！こちらロングアーチ！列車の中にアンノウンを確認しました！！）」

「アンノウン！？」

「なんで急に…！？」

フォワード陣は突然の通信内容に驚きを隠せない。

それはへりの操縦をしているヴァイス・グランセニック、なのはの傍らに浮いている身長30cm程の小人、リインフォース？（ツヴァイ）も同じだった。

「な、なのはさん！どうしましょう！？」

「大丈夫だよリイン」

目を回して慌てるリインフォースの頭を撫でるのは。

大丈夫とはつきり言い切ったのはをフワード陣は不思議そうに見る。

「そのアンノウンはきつと大丈夫。だから私達は私達でレリックの回収とガジェットの殲滅をしよう？いいね？」

【は、はい！！】

なのは達が山岳部に着くまで後三分弱。

〈No side out〉

倉庫の中を覆い尽くした光が収まったことを確認した俺は、目を塞いでいた腕を下げて目を開く。

そこは先ほどまでいた倉庫ではなく……列車の車両の中……だと思われる場所にいた。

「……夢……じゃないな。どこだよここは……」

溜め息を付いて左手で額を押さえると何やら固い感触があった。

左手を額から離すとその手には……蒼い宝石が輝いていた。

「持ってきちまったのか？いや、それにしても……さっき聞こえた

声は…お前なのか？」

宝石に向かって問い掛けてみるが返事はない。

当然か、と自嘲気味に笑った後にとりあえず外に出ようと扉の方に視線を向ける。

そこには……カプセルのような形をした子供より少し小さい機械が浮いていた。

……最近の科学はここまで発達していたのか。

「つとあ！？」

そんなことを考えていると突然機械が目のような黄色い部分からビームのようなものを放ってきた。

咄嗟に座席へと跳んで避けたが、俺の後ろにあった扉が粉々に砕けてしまっていた。

夢ではなく現実のこの状況であんなものを食らってしまえば、只では済まないだろう。

最悪……死ぬ。

「死ぬつもりはないがな……！！」

座席から飛び出し、機械へと走る。

距離は五メートルもない……あつという間に機械の前に付き、俺は

右腕を振りかぶる。

「オラァー!!」

全力で左足を踏み込み、右腕を機械の黄色い部分へと突き出す。

瞬間、ドゴツ！という鈍い音が響き、右腕に鈍痛が走る。

「チツ……堅いな」

殴った機械は後ろの扉を突き破って吹っ飛んだが、それだけだ。

生身の拳では傷一つ付けられないくらいに堅い……実際、機械は一車両先で悠然と浮いている。

「クソツ……倒せないなら逃げるしか……」

いや、列車が走っている以上、逃げられないだろう。

何か、武器でもあれば……そう考えて両手を握り締めた時、頭の中で声が聞こえた。

（私の名前を呼んでください）

それは倉庫で聞いた声。

（あなたは私が求めた男性^{マスター}）

それは機械的な女性の声。

（あなたが私を求めてくださるならば……）

その声は俺の胸の中の”何か”を呼び覚まし。

（私は全力を持って……）

俺と声を繋ぐ”言葉”を呼び起こし。

（あなたに答えます）

俺の”魂”を揺さぶった。

左手に握られた”蒼”を機械に向けて突き出す。

右手は左腕の肘を掴み、しっかりと足を床に付け、目を閉じる。

機械から攻撃が来るかも知れない。

しかし、不安は微塵もなかった。

「我、時空を越えし者なり」

それは俺自身を指す言葉。

「選りし者の元、その力を放ち、応えよ」

それは”蒼”を指す言葉。

「過去は糧に、記憶は胸に」

機械からビームが放たれる。

しかしビームは俺の周りにある瑠璃色の壁に弾かれた。

「そして不屈の魂は……」

目を開き、感覚として認識していた瑠璃色の壁を視認する。

それは俺が倉庫で見た魔法陣と同じ色をしていた。

「「我等の”心”に。この手に魔法を^{チカラ}！！」」

重なる言葉に”蒼”との絆を感じ、左手を天高く掲げて”彼女”の名を呼ぶ。

「レイジングソウル！！セエエツトアアアップ！！」

「スタンバイレディ。セットアップ」

刹那、車両の天井を突き破るほどの瑠璃色の柱が立ち上る。

その中で俺の服装が変わっていく。

黒い太股ほどの長さの袖のない上着。

腹が完全に見える、上着と同じく袖のない白いアンダーシャツ。

黒い太めのベルトを巻いた白い長ズボン。

両手には肘まで隠れる手甲が付けられ、両足も膝が隠れる脚甲が付

けられた。

いつも首の後ろで纏められた髪はポニーテールになっているようだ。

そして瑠璃色の柱は消え失せ、俺は自分の目の前に浮いているものに目を向ける。

それは一本の棍。

一切の装飾がないその白銀の姿に目を奪われながらも俺は棍を手取る。

その際に右の手甲の甲の部分に輝く蒼い宝石がキラリと光った。

俺は棍を前に突き出し、機械へと突っ込む。

機械はまたビームを撃ってきたが、避ける必要性を感じない。

だから俺は……

「ハアッ!!」

棍を右から左へ振り抜き、ビームを弾いた。

そのまま速度を下げることなく進んで棍を左手に持って機械の前にさつきと同じく右手を振りかぶり、左足を踏み込んだ姿勢で止まり

……

「次は……いてえぞ？オラァ!!」

再び機械の黄色い部分に右手を突き出した。

先ほどのような鈍痛はなく、変わりに何かを貫いたような感覚。

俺の右手は見事に機械を貫いていた。

俺はすぐに右手を引き抜いて離れるが、距離が近い。

「やべっ」

呟いた瞬間、機械が爆発した。

俺の視界は再び、光に包まれたのだった。

それは不屈の魂（後書き）

右京のバリアジャケットの説明が分かりづらい方が沢山いると思います。

イメージとしてはコードギアスR2のC・C・の衣装を男用にしたい感じです。

デバイスの名前は紅様から提供されたレイジングソウルを使用していきます。

ただ、設定は自分好みに弄るのでそのまま使うというワケではないです……すみません。

設定の提供は本当に嬉しかったですv（*^^*）／

設定の提供をしてくださった紅様、胡蝶ノ夢様、本当にありがとうございます（*。。（）ノ

それは夢で出会った少女（前書き）

若干修正しました。

やっぱり原作見ないとオリジナル展開になりますよねー……嫌われないといいんですが。

他の作者様のなのはs t r i k e r sを見ながら勉強します。

今回は右京が魔法を……？

それでは第二話をどうぞ！

それは夢で出会った少女

〔No side〕

右京がガジェットの爆発に巻き込まれた時と同時刻。

なのは達を乗せたヘリは目的の列車を目視し、なのはは別の場所から文字通り”飛んできた”フェイトと共に空を飛ぶガジェットを破壊すべく、ヘリから飛び出そうとした時に通信がきた。

「（こちらロングアーチ、アンノウンから巨大な魔力反応！！推定S+！！あ、いえ……Dランクほどです）」

なのは達も見た瑠璃色の柱。

それは一時、リミッターを外したなのはと同等の魔力量を示したがすぐに低下し、フォワード陣よりも低い数値を示した。

なのは達隊長陣は自らにリミッターをかけている。

部隊には保有ランクが定められており、なのは達の本来の魔力量ではそのランクをオーバーしてしまう。

そのため、自らにリミッターをかけて魔力量を制限し、枠内に収まるようにしたのだ。

一瞬とはいえ、隊長陣と同等の魔力量を示したアンノウンにフォワード陣は啞然としている。

そんなフォワード陣を見たのはは苦笑しながらも今は消えてしまった瑠璃色の柱があつた場所を見る。

（あの魔力……違う……あの暖かさ……あれに私は触れたことがある）

遠き過去、まだ自分が僅か6つと7つ、9つの時に出会った男性を思い出す。

片手の指で数えきれるほどの少ない出会い。

合計しても10分に満たない僅かな会話。

そんな少ない時間にも関わらず、1日たりとも忘れることがなかった男性^{キト}。

（あなたがくれた言葉で私はフェイトちゃんと友達になりました）

今の親友とまだ敵対していた時に求めた答え。

その答えをくれた男性の顔は10年経った今でも鮮明に思い出せる。

何気なく、なのはは自分の髪を束ねている布に左手で触れる。

それは10年間ずっと大事に使いつけている大切な宝物。

男性に憧れた少女はもういない。

そこには愛おしそうな表情で布に触れる一人の女性がいた。

（やっと……やっと逢えるのかな？）

まだその姿を確認していない故に、その考えは希望的観測の域を出ない。

しかし、なのはには確かな確信があった。

幽霊のように現れ、幽霊のように消えた彼の姿が……。

なのはには列車の中に幻視できていた。

「あなたは……」そこ」にいますか？右京さん」

「なのはさん？何か言いました？」

「……なんでもないよスバル。さぁみんな！！初めての任務、しっかりやろう！！」

【はい！！】

なのははフォワード陣の返事に笑顔を返し、へりを飛び降りた。

空にはガジェットが大量に飛び回っていたが、なのはは見向きもせず瑠璃色の柱があった虚空を見ていた。

（早くアンノウンが右京さんかどうか確かめたい……だから）

「すぐに終わらせるよレイジングハート！！セーットアップ！！」

「ok master stand by ready」

桃色の魔力を纏い、なのはは白をメインカラーに青いラインが入ったバリアジャケットを身に纏う。

桃色の魔力が霧散したその場所に存在するのは”不屈のエースオブエース”。

手に持つ杖（相棒）は不屈の心。

なのははフェイトと合流し、空のガジェットを殲滅していく。

教え子達の道を開くために。

一刻も早くアンノウンを彼と確認するために。

（No side out）

「……ん？痛くない？」

爆発相手に無駄だと思いつつもほぼ反射的に顔を隠すように×字にしていた両手を下げる。

するとそこには瑠璃色の丸い盾が存在した。

「プロテクション………防御魔法を展開しました。お怪我はありませんか？マイマスター」

「ああ、助かった。ありがとなレイジングソウル」

レイジングソウルの張ってくれたプロテクションとやらのおかげで
外傷は見当たらない。

……つか気になったことが幾つかある。

幸いにも近くにあの機械は見当たらないし、今のうちに聞いておく
とするか。

「レイジングソウル、幾つか聞きたいことがある」

「なんででしょうか？」

「お前はなんだ？」

「古代ベルカ式インテリジェントデバイス、”レイジングソウル”
が私の名称です」

古代ベルカ式？インテリジェントデバイス？

いきなり聞き慣れない単語が出てきたな。

「デバイスとはなんだ？」

「魔導師が魔法を使う際、より円滑に使えるようにサポートする道
具です」

魔導師に魔法ときたか……さっきのプロテクションとやらも魔法な
のだろうな。

アニメや漫画などの魔法使いが持つ杖のようなものだろうか。

「インテリジェントデバイスと言ったが、他に種類があるのか？」

「ストレージ、アームド、ブースト、ユニゾンデバイスがあります」
レイジングソウル曰わく、ストレージは最低限の会話しか出来ない
が空き容量が非常に多いデバイス。

アームドは武器の形状をしたデバイスで魔法を使わなくともある程
度戦えるデバイス。

ブーストは持ち主以外の魔導師、あるいは持ち主自身を強化などの
サポートをする手助けするデバイス。

ユニゾンはマスターとユニゾン（融合）することができる特殊なデ
バイスとの説明を受けた。

インテリジェントデバイスは高度なAIを持ち、戦闘から日常まで
幅広く活躍できるので頑張ります……という説明だか売り込みだか
分からない説明を受けた。

「……まあいいか。魔法と言ったが、俺にも魔法が使えるのか？」

「先ほどのプロテクションは私に登録されている魔法をマイマスタ
ーの魔力で使用したものです。マイマスターは魔力量は少ないので
大きな魔法は使えません」

ふむ……魔力量が少ないなら仕方ない。

なんの訓練も受けていない魔法使い初心者俺なら仕方ないが。

「先ほどのプロテクションも多様は出来ません。ですが、マイマスターはそれを補う身体能力がありますから、最低限最小限の強化魔法を使うだけでも充分他の魔導師と渡り合えると思います」

「そうかい」

盾すら数回しか使えないとはな……相当魔力量が少ないようだ。

大分話していたのか、さっきの機械と同じ機械が複数、向こうの車両の中に見えた。

どうやらこちらに向かっていているようだ。

「レイジングソウル、さっきの機械がきたから潰すぞ。…が、その前に2つ聞かせる」

「为什么呢？」

俺は棍を両手で持って少し前屈みになって構える。

答えを聞いたら、すぐに走り出せるように。

「この服装はなんだ？」

「マイマスターを守る防護服……バリアジャケットです」

「このデザインはなんだ？」

「私がマイマスターに似合うようにデザインしました……よくお似合いです」

「ありがとよっ!!」

聞きたいことも聞いたので、機械が俺のいる車両に入った瞬間に棍で一突きする。

棍は見事に機械を貫通し、機械からはバチバチと電気が漏れ出す。

先ほどのように爆発されてはかなわないので棍を引き抜き、後続の機械に向かって蹴り飛ばした。

飛ばされた機械は後続の機械にぶつかり、同時に爆発した。

「片付いたか？」

「そのようです。ですが他の車両の中に同じ反応を多数確認しました。更に車両内にマイマスターの他に魔力反応を4つ、上空に2つ確認、いずれも魔力量はマイマスターよりも上です」

「それは俺以外にも魔法使い……魔導師がいるってことだな……後、機械も。機械の数は？」

「上空に60…52…46…数がどんどん減っています。車両内には30…28…25…こちらもどんどん減っています」

上空にもいたのか……車両内に比べて減りが早いのは、レイジングソウルの言う2つの魔力…魔導師が強いからだろうな。

他にも機械と戦ってくれている奴らがいるのか……嬉しい限りだ。

なら、俺も車両内の機械の数を減らす手伝いをしようと他の車両へ

と走る。

目についた機械は片っ端から棍で貫き、殴って壊す。

「魔法を使わない魔導師ってどうよ？」

「いいんじゃないでしょうか？マイマスターが魔法を使わなくても戦えるのは事実ですから」

「そうかい！！」

レイジングソウルの返しに笑みを浮かべながらも機械は破壊する。

今ので9機目……他も破壊されていることを考えれば、大分少なくなっているハズだ。

「エリオ君！！」

次の車両へ移ろうとした時、上から少女の声が聞こえた。

なんでこんな所に？と思いながら車両の窓を開け、そこから逆上がりのように上へと上がる。

「ふえ！？」

「……レイジングソウル。お前の言った魔導師の一人はこの子か？」

「はい、間違いありません」

そこにいたのはマントを着て帽子を被った全体的に桃色の少女……髪までピンクとはな。

少女が驚いてこちらを見ているが気にせず、少女の隣に行って目の前にあつた大穴を見下ろす。

そこには赤い髪の少年がデカイ丸い機械のアームで持ち上げられている姿があつた。

反射的に助ける為に穴から降りようとした瞬間。

「なっ!？」

「エリオ君!!」

機械が少年を外へと投げ捨てた。

下には高い崖と森があるのみ……もしも激突なんてしたら、助かる見込みは薄い。

「クソッ!!」

俺は反射的に少年に向かって飛び降り、その小さな体を抱き締める。

が、なぜか桃色の少女まで落ちてきた。

「バカ!!」

「ごめんなさい!でも、エリオ君が!」

「んなことどうでもいい!!」

落ちてきた少女に右手を伸ばしてその小さな体を抱き締める。

まだ下には距離があるが、それも数十秒でなくなるだろう。

「レイジングソウル！！何かないか！？」

「飛行魔法が登録されていますが、マイマスターの魔力量では……」

「ちっ……仕方ないか」

ならばせめて、この2人だけでも助ける努力をしよう。

〈キャラロside〉

私とエリオ君を抱き締めていたお兄さんが私達の下になるように体を入れ替えた。

さっきの会話の通りなら、このお兄さんは空を飛ぶ手段がない。

けれど、私なら……そう思って私達を追うように飛んでいるフリードを見る。

また失敗するかも知れない……制御出来ないかも知れない。

そう考えると怖くて……震えてしまう。

「怖いのか？」

お兄さんの声に反応して上を向く……落ちているから下かな？

そこには優しい笑みを浮かべたお兄さんの顔があった。

「大丈夫だ、お前達は死なないさ。俺が体を張って守ってやるよ」

ああ、このお兄さんは名前も知らない私達の為に、自分の体をクッションにするつもりなんだ。

……それはダメ、絶対にさせない。

こんなことを考えるのはおかしいかもしれない。

それでも、思ってしまったんだ。

「……そんなことはさせません！！私が……私とフリードが……エリオ君とあなたを助けます！！」

この抱き締められた時から感じる安心感を手放したくないと。

だから私は……

「フリード……今まで窮屈な思いをさせてゴメンね。でも……もう逃げないから！！」

自分で恐れていた自分の力を信じる。

絶対に成功させる……勇気は、この人から貰ったから！

「竜魂……召喚！！」

〈キャラ side out〉

「おお……」

少女の両手のグローブについている宝石が光り、桃色の光に包まれた。

そして光が晴れた時、俺は……ドラゴンというべきか？そんな感じの生物の背中にいた。

召喚とか言ってたから、この少女が出したのだろうか。

「……すげえじゃねえか嬢ちゃん」

「え……えへへ」

誉めながら少女の頭を撫でると嬉しそうな声が聞こえた。

それにしても、この少女と少年には見覚えがあるな……。

だが初対面のハズだし……まあいいさ。

「嬢ちゃん、列車に戻るぞ。あの機械……必ず破壊する」

「はい！フリード……！」

「グオオオオオオ……！」

ドラゴンはフリードというらしいな。

フリードは少女の声に反応し、列車に向かって飛ぶ。

思ったよりも落ちていなかったのか……それともフリードが速いのか、あつという間に先ほどの機械を視認出来る高度に達した。

「ん……え？あの……」

丁度少年も起きたようだ。

俺は抱えていた少年を下ろし、少年の頭に手を置く。

「話は後だ……あの機械を破壊する。手伝ってくれないか？」

「……はい！」

「いい返事だ少年！レイジングソウル！！なんかないか！？デカい一撃を叩き込みたい！」

「あります。私のセカンドフォームなら、マイマスターの魔力量でも、カートリッジの使用で超至近距離の斬撃魔法が使えます」

セカンドフォーム？カートリッジ？また訳分からん単語が出てきたな。

まあいい……言ってみれば分かることだ。

「ならレイジングソウル。セカンドフォーム！！」

「スラッシュスタイル」

両手の手甲の肘部分から一発ずつ薬莢が飛び出し、俺の手から棍と手甲が消え失せる。

代わりに俺の手に現れたのは……俺の身長ほどもある両刃の斧だった。

しかしこの斧、片方の刃が妙に長く、下向きに反りがある……まるで刀のように。

「まあいい……準備はいいな少年少女」

「「はい!!」」

「いい返事だ!!レイジングソウル!カートリッジ!!」

「ロードカートリッジ」

少年が俺の隣で槍を構え、少女が俺達の後ろで両手を×字にクロスする。

斧の両刃の中心から二発の薬莢が排出され、斧の長い刃に瑠璃色の光が灯り、その刃をさらに巨大化させた。

「ツインブースト、スラッシュアンドストライク!!」

少女の声と共に、少年の槍と俺の斧に桃色の光が灯り、その刃を更に長く、強くする。

これなら確実にいける。

「レイジングソウル。斬撃魔法の名前は？」

「まだ決まっていません。登録されているのは魔法の構成のみですから」

なるほど、後で考えるとしようか。

俺は斧をしっかりと両手で握り締め、デカくなった刃を空に向けて担ぐように構える。

「一閃必中！！」

「一撃ひっさあつ！！」

少年が機械に向かって真っ直ぐ跳び、俺は空に向かって飛び上がる。

少年の槍は機械に突き刺さり、切り裂くように引き抜いた。

その直後に俺の斧が機械を真っ二つに……ではなく、なぜか米字のように八分割にして爆散させた。

「……説明しろ、レイジングソウル」

「今の魔法は接触時に魔力刃を急速に広げ、表面に切れ込みを入れてそのまま切り裂く魔法です。少しでもめり込めばバラバラです。マイマスターの前に立ちはだかるモノにはお似合いです。腐腐腐……」

……エグいということはわかった。

魔法もレイジングソウルも。

笑い方もなんか怪しいしな。

「ありがとうございます。助かりました！」

すっかり光を失った斧を見ていると後ろの少年がお礼を言ってきた。更に少女もドラゴンから降りてきて……ドラゴンがちっさくなった。召喚というより、解放というように考えた俺はおかしくないと信じたい。

「お兄さん、さっきはありがとうございます！私はキャロ・ル・ルシエ二等陸士です！」

「同じく、エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

敬礼をしながら自己紹介してくれた少年少女……キャロとエリオ。

……やはり、ここは俺のいた世界とは別の世界のようなのだ。

そのことを再認識しつつ、俺も敬礼しながら自己紹介をした。

「フタツキ　ウキヨウ
喜喜　右京だ。宜しくな、エリオ、キャロ」

自己紹介をした後、俺達は談笑しながら、2人を迎えに来ると言う
へりを待っていた。

俺が違う世界から飛ばされてきたと説明すると、キャロが元いた次元から別の次元へと飛ばされた者……次元漂流者”だと教えてくれた。

藍蘭島といい今回といい……よく漂流するな……いや、流れ着く……か？

更には機動六課なる部隊やロストロギア、時空管理局、この世界の
名前が”ミッドチルダ”であるなどの話を受けた。

……機密とか大丈夫なんだろうな。

今回この場所にいたのもロストロギアの回収とさっきの機械……ガジ
エットの殲滅という任務だからだそうだ。

その任務も同僚の方で終わったらしい。

初任務で緊張したとは2人の話……因みに、俺達はバリアジャケット
とは解除しており、2人は制服姿だ。

ていつか時空管理局とやらはこんな子供に戦わせてどういふつもり
だ？

年齢はまだ10だというし……ゆきのより年下だぞ。

そんな不満を抱きながら待っていた時、空から飛来する一つの影。

その影を見た2人は立ち上がり、影に向かって手を振った。

「なのはさーん!!」

「ここですよー!!」

なのは。

いや、人違いだ……俺があの子を見たのはこの世界じゃない。

そう、ただ、名前が一緒なだけだ。

「2人ともお疲れ様。その人……が……」

飛んできた影は車両へと降り立ち、俺と目が合う。

聞き覚えのある声と……見覚えのある顔。

影……女性はバリアジャケットと思わしき白い服を消し、制服の姿になる。

栗色の髪、赤い宝石のついたペンダントのような装飾品。

そして……髪をサイドポニーに纏めている白い布。

嗚呼、そうか。

あの時、公園で泣いていた少女はこんなにも立派に成長したのか。

「…久しぶりだな。なのは……綺麗になった」

「あ……」

なのはがその瞳に涙を溜める。

それは、彼女を”夢で出会った少女”だと確信させた。

「右京さん!!」

感極まったように、なのはが俺に抱きついてきた。

涙を流し、顔を胸にこすりつけ、離さないとばかりに両手をしっかりと腰に回す姿は……とても幼く見えた。

再び出会った右京となのは。

互いが互いを忘れることはなく。

違う世界、違う時間を過ごした2人。

さあ、物語は幕を開けた。

始まるのは、不屈の心と魂が織り成す物語。

それは夢で出会った少女（後書き）

というわけで再会しました右京となのは。

更に魔法も使いました。

とは言ってもカートリッジの魔力と右京の魔力が9：1の割合ですが。

超至近距離斬撃魔法の名前募集します。

非殺傷だと、どんな痛みになるのだろうか……。

その拳は唐突に（前書き）

はい、第四話目になります。

今回は短い？

オリジナル展開は思った以上にページ数が進みませんねorz

文も支離滅裂になっていないか心配です。

そしてある意味で急展開

更にあるキャラが崩壊しているかも。

それではどうぞ！

その拳は唐突に

「右京さん……右京さん……っ！」

抱きついてきたなのはの頭を撫でる。

今のなのはの姿は明らかに、最後に夢で見た姿からかなりの時間が経っていることを示している。

それでも俺を覚えていてくれたことは素直に嬉しく……あの夢が一方通行ではないことが分かった。

「あの……右京さん」

「ん？どうした？エリオ」

なのはの頭を撫でながらそんなことを考えているとエリオに呼ばれた。

その声に反応して首だけ後ろを振り返ってみると……エリオとキャラの2人はなぜかポカンとしており、フリードはキャラの足元で首を傾げていた。

「右京さんは……なのはさんとお知り合いなんですか？」

「……そうだな……」

知り合い……と言えば知り合いになるのだろうか。

しかし、俺がなのはと出会ったのは”夢の中”という曖昧なものだ。
会話した時間も短いし、夢を見た回数もたった四回……四回目に至
っては、俺は姿すら現していない。

知り合いというには、何かが違う気がした……のだが。

「うん、右京さんは私のお友達だよ」

俺が答えるべき答えはなのはが出した。

本人が言っているなら、俺が迷う必要はないだろう。

「お友達つっても顔見知り程度だな」

「にやはは……」

俺の言葉に、なのはは苦笑する。

もう涙は止まっているようだ……離れてはいないが。

「しかし、なのはが魔導師だったとはな……知らなかった」

「私だって右京さんが魔導師だったなんて知らなかったよ」

「魔導師歴20分程度だな」

「ええっ!？」

何やら子供2人が驚いている……何かおかしい所でもあっただろう

か？

なぜかなのはもびっくりしているし。

「あんなにスゴい魔法を使ってたのに……」

「魔導師歴20分……ということは……」

「右京さん……今日魔導師になったの？」

「ああ」

直後、三人から驚愕の声を上げられた。

流石にうるさかったので一喝したらすぐに収まったが。

ここはヘリコプターの中。

あの一喝の後、すぐに三人の迎えのヘリがやってきたのだが、なぜか俺まで乗り込むハメになってしまった。

この世界の地理は皆無なのでありがたいと言えはありがたいのだが……まさか三人掛かりで押し込められるとはな。

因みに座っている場所だが……俺の右隣になのは、左隣にキヤロ、

その隣にエリオ。

俺の正面に金髪の女性、キャラの正面にオレンジ、エリオの正面に青い髪の少女だ。

そして、俺と金髪の女性の間に浮いてるのが……30cmほどの小人（ ）である。

「お兄さんがアンノウンですね？私はリインフォース空曹長です！リインと呼んで下さい」

「ああ、宜しくなリイン」

うん、小さいことと浮いてることを除けば、普通の女の子だ。

もはやクセとなっていていいかのように、俺の右手はリインの頭を撫でる。

リインは嬉しそうな笑顔を見せ、なぜか俺の右肩に座った。

「…まあいいか。そっちの三人にはまだ自己紹介をしていなかったな。俺は喜喜 右京……なのはの知り合いで次元漂流者だ。そちらの言うアンノウンってのは俺のことだろうな」

キャラとエリオのした敬礼をしながら、簡単な自己紹介をする。

するとオレンジの少女は少し不信感を露わにし、金髪の女性は少し困惑しているようだ。

因みに青い髪の少女は……

「私はスバル・ナカジマ二等陸士です！！スバルって呼んで下さい
！！」

うん、元気がいいな。

ナカジマ……中島？キャロやエリオと違って日本人っぽい名前なんだな。

「ティアナ・ランスター二等陸士です……質問してもいいですか？」

「ああ、別にいいぞ」

「あなたのデバイスはどこで手に入れましたか？」

「倉庫の整理をし終わった時に偶然見つけた」

そういえば、なんであんなところにあつたのやら。

もしかして、流れ着いたのか？……まさかな。

「あなたはガジェットを幾つ破壊しましたか？」

「なんでそんなこと聞くんだか……カプセルみたいなのを9、エリオとキャロと一緒に丸い奴を1……だな」

「「はい」」

【嘘……】

俺の答えにエリオとキヤロは笑って頷き、他は啞然としている。

なんだ？俺がガジェットを破壊するとおかしいのか？

「う、右京さんってDランクだよね？どうやってガジェットを倒したの？」

「拳で殴って棍で貫いて足で踏み潰した」

【……………】

なのはの言葉に、ありのまましたことを話したら全員が黙ってしまった。

あれか、魔力少ない奴は倒せたらおかしいのか。

「ほ、本当ですか？」

「マイマスターを疑うのは許しません。そんなに疑うなら、私の中に保存されている映像を見せますが」

「あ、はい、じゃあ後で見せてもら……………え？今の誰！？」

オレンジの少女……………もうティアナでいいか。

ティアナがしつこく聞いてきたら、俺の前にレイジングソウルがどこことなく怒気を孕んだ声で言葉を発していた。

まあ、機械的な声なのであまり感情が入っていないように聞こえるが。

因みにレイジングソウルは現在待機状態……蒼い宝石のついたペンダントになり、俺の首に掛かっている。

「今のは俺の相棒さ」

「レイジングソウルと申します。マイマスターに危害を加える輩はバラバラにします」

【……………】

また黙ってしまった。

エリオとキャロに至っては震えている……あの斬撃魔法を思い出したんだろうな……食らったガジェットは文字通り、バラバラになったし。

「相棒が過激なことを言って申し訳ないな」

「あ、いえ……私はフェイト・T・ハラオウンです」

「フェイトと呼んでも？」

「かまいません」

そう言って笑顔を見せるフェイト。

ふむ……フェイト、ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、リイン。

初対面のハズなんだがな……どうしてこうも”見たことがある”と

思ってしまうのか。

「でも、なのはの知り合いに右京なんて名前の人がいたっけ？」

「にやはは……十年も会ってないし、話してもなかったね」

十年か……俺の中では1、2ヶ月前に会ってるんだがな。

もちろん、夢の中で。

「え？右京さんって幾つ？」

「二十歳だが」

【ええ！？】

「てめえらどういう意味で驚いてんだコラ」

特になのはの驚き方が酷いな。

まあ、なのはからしたら十年間全く姿が変わっていないことになるから仕方ないのか？

「俺は違う世界にいたんだ。時間の流れが違っても不思議じゃないさ」

「でも、右京さんはなのはと同じ世界にいたんだよね？」

「さあな」

「ワケが分からないよ……」

フェイトががつくりとうなだれる。

夢で会いました、なんて言ったところで信じられないだろうしな。

「ところで、俺はどうなるんだ？不振人物として拘束されるのか？」

「えっと……それは……」

フェイトが気まずそうに目を逸らす。

この反応は肯定と捉えていいだろう。

隣にいるのはとキャラ、エリオも悲しげな表情をしている。

まあ仕方ないだろうな……話によれば、俺は突然現れたアンノウン（正体不明）らしいし、そんな奴が武装して低い魔力ランクにも関わらずにガジェットを破壊してるんだから。

ガジェットを破壊したから、犯人とは言わないだろうが、それでも怪しいことには変わらない。

最悪、レイジングソウルを取り上げられるかも知れないな。

（その時は……ひと暴れだな）

「（お供します、マイマスター）」

（ん？レイジングソウル？）

「（はい。今行っているのは念話という魔法です）」

念話……俗に言うテレパシーという奴だろう。

脳内で会話をする魔法で、人に聞かれない話をするのに便利だそうだ。

（まあいいさ……もしも、お前が取り上げられる場合には……全力で逃げるぞ）

「（了解です、マイマスター）」

少し重くなった空気のままヘリが着陸した場所は……どこかの屋上だった。

全員がヘリから降りるとそこには、4人と一匹がいた。

群青色の狼に金髪の白衣を着た女性、赤みの強いオレンジの髪の少女にキャラより少し濃い桃色の髪の女性。

そして、俺と同じ茶髪の女性。

「みんなおかえりー。初任務お疲れ様」

「ただいまーはやてちゃん」

「ただいまはやて」

なのは、フェイトがはやてと呼ばれた女性に近付き、キャ口達4人と一匹は直立不動になった。

どうやら高い地位の人物のようだ……関西訛りがあって、なかなかフランクそうな雰囲気だが。

その後ろにいる三人と一匹の内の二人……オレンジの少女と桃色の女性は射抜くような視線で俺を見ている。

仕方ないかと思いつながら、なんとなく狼を見てみた。

「……………」

「……………」

狼は明らかに俺を見ていた。

瞬間、俺の体に言葉に出来ない感覚が走った。

俺はこの感覚を知っている。

そう思った時、俺と狼は互いに向かって一歩進んだ。

「右京さん？」

「ザフィーラ？どうしたの？」

後ろでキャラが、向こうで金髪の女性が何か言っているが聞こえない。

俺と狼はもう一歩進み、更にもう一歩、更に…と少しずつ距離を縮める。

ある程度近付いたところで一度立ち止まる……すると、狼の体が光り、なんとガタイのいい男性になった。

だが、そんなことはどうでもいい。

後ろや向こうで何やら騒いでいるがどうでもいい。

今はただ……

「喜喜 右京」

「ザフィーラ」

「「いざ、尋常に……」「」

コイツと拳を交えたい！！

「「勝負……！」」

くなのはsideく

今、なぜか右京さんとザフィーラが戦っている。

デバイスも魔法も何も使わない肉弾戦だけ……。

「うわ……デバイスも強化魔法もなしでザフィーラと互角やなんて……何者やあの人」

はやてちゃんもヴォルケンリッターのみんなもビックリしてるみたい。

フェイトちゃんもフォワードのみんなも……もちろん私も。

「オラァー!!」

「ぐっ……ハアッ!!」

「おぐっ……まだまだあ!!」

殴って、蹴って、時に防いでを繰り返しているけど、二人はなぜか避けることをしない。

でも、なぜか2人とも楽しそうだ……ザフィーラって、あんな笑い方するんだね。

「……なあ、なのはちゃん」

「なに？はやてちゃん」

「私な、アンノウンの人が連れてこられたら、一旦拘束して、事情を聞いて、本部の方に送ろうって考えてたんや」

はやてちゃんは私に話しかけているけど、視線はずっと右京さん達の方を向いたまま。

それにはやてちゃんの考えは正しいと思うけど……どうして過去形なのかな。

「ランクDでデバイス、魔法なしであの戦闘力……それにリインからの通信で、ライトニングの2人とリインに懐かれているらしいから悪い人やないやろうし……何より、なのはちゃんの知り合いやろ？」

「うん、そうだよ」

私が右京さんと再会した時にはもうライトニングの2人と楽しそうにお話ししてたし。

リインにもすぐに懐かれたし、不信感を持ってたティアナも、ヘリの中で不信感はなくなっただけだし。

「ランクDなら部隊の保有制限に引っかかることもないし、お偉いさんの許可もすぐに取りれるやろ。入隊試験は今やってる殴り合い、階級は……三等陸士にしとけば、後はクロノ君がなんとかしてくれる。ていうかさせる」

あ、あはは……クロノ君ご愁傷様。

はやてちゃん、目がなんだか、昔テレビで見た獲物を狙うライオンみたいな目してるよ。

でも、それはつまり、右京さんを機動六課に引き入れるってことだよね。

もし右京さんが入ってくれたら……スターズに来てくれないかな。

そしたら……長く一緒にいられるのに。

くなのはside out

「ふんっ!!」

「ダラァ!!」

互いの右ハイキックが交差する。

パン!と乾いた音が鳴り響き、お互いに一旦距離を取る。

楽しい。

避けることをしない殴り合い。体中痛いけど、ザフィーラも俺も倒れない。

楽しい。

藍蘭島で大牙と戦った時と同じくらいに気分が高揚する。

たのしい。

ああ、認めるし、わかりきってたことだ。

タノシイ。

俺は戦闘狂でバトルマニアで戦狂いでケンカ好きで……戦うことが大好きだ。

「ザフィーラアアア！！」

「右きよおおお！！！」

お互いに同時に突っ込み、すぐ近くで止まって俺はしっかりと左足を踏み込んで右腕を振りかぶり……ザフィーラは右足を踏み込んで左腕を振りかぶる。

「俺の……勝ちだあああ！！！」

突き出した拳は互いの左と右頬に突き刺さり、俺達の体はそこで一度止まった。

誰も、一言も喋らない静かな屋上で最初に言葉を発したのは……

「……すごい……」

はやてと呼ばれた女性だった。

その言葉と同時に、俺とザフィーラは崩れ落ち……

「やるじゃねえか……」

「貴様もな……」

「右京さん!？」

満足そうなザフィーラの顔と俺を呼ぶなのはの声を最後に、俺の意識は闇へと沈んだ。

その拳は唐突に（後書き）

はい、ザフィーラが大牙ポジションです。

ザフィーラ大好きなんです。

時間は主人公のプロフィールの予定です。

斬撃魔法も載せるつもりですが、名前がまだ決まっていなかったり。

考えてくださった名前がどれもこれも捨てがたい……！！

魔法名はまだまだ募集中です。

プロフィール（前書き）

タイトル通り、プロフィールです。

読みづらく、理解し辛い可能性があります。

右京とレイジングソウルのプロフィールですので、興味が御座いましたらどうぞ

プロフィール

どうも皆様おはようございます、こんにちは、こんばんは。

作者のd・c・2隊長と申します。

「流れ着いて！藍蘭島！に引き続き、主人公をしてる右京だ」

今回もプロフィールは即興で考えております。

「またか……前回もそれで人外にされたんだったな」

大丈夫、君の身体能力が人外でも今では”右京だから”、”兄貴だから”で説明が出来るほどに読者の皆様に定着した。

「あんま嬉しくねえ……」

それでは右京のプロフィールをどうぞ。

名前：フタツキウキョウ喜喜右京

年齢：20

身長：187cm

体重：71kg

魔力ランク：D

使用デバイス：レイジングソウル

容姿：腰程の長さの茶髪を首の後ろで纏め、普段は黒い半袖のTシャツと青いGパンというシンプルな服装をしている。

備考：今作の主人公。

ちかげの屋敷の倉庫を整理し終えた時に偶然、待機状態のレイジングソウルを発見、触れたことでレイジングソウルが起動し、ミッドチルダへと飛ばされた。

飛ばされた時期は、原作のファーストアラートと同時期。性格は気さくな兄貴気質で口調は少々荒い。

小さいことは気にしないが間違ったことをした相手を見ると叱り、自分が良いと思う方向へ教育しようとする。

身体能力は異常の一言で瞬歩ができたり、手刀で木を切り裂いたり、ライフルの弾を見切ったりできる。

極端に頭はいいという訳ではないが悪い訳でもなく、知恵は回る。なのは、フェイト、はやて、リイン、フォワード陣のことを”夢”で知っているが、なのは以外は第四話現在では気付いていない。

だいたいこんな感じかな。

「相変わらず人外か……まあいいか」

続きまして、レイジングソウルのプロフィール。

「私ですね」

「それじゃ……どうぞ」

名前：レイジングソウル

術式：古代ベルカ式

形式：インテリジェントデバイス

AI：女性

性格：右京至上主義

BJ：黒い袖無しの太股まである黒いジャケットと腹部が完全に出ている白いアンダーシャツ、黒い太いベルトで固定された白いGパンと膝まで隠れる脚甲がある、全体的に動きやすいバリアジャケット（デザインはレイジングソウル本人が考案）。

簡単に言うなら、コードギアスR2のC・Cの衣装を男性用にし

たもの。

形状

ファーストフォルム” ノーマルスタイル”

両手に肘まで隠れる手甲と一切の装飾がない白銀の棍の状態であり、セツトアップ時はこの状態になる。

コアは右手甲の甲部分になり、カートリッジは両手甲の肘部分に六発ずつあり、補充は一発ずつ入れていくタイプ。

セカンドフォルム” スラッシュスタイル”

190cmほどの方刃が長く、下向きに刀のように反りがある不思議な形状をした両刃の斧になる。

コアは反りがある方の刃の根元にあり、カートリッジは両刃の間に六発発存在し、石突きの部分から一発ずつ入れていくタイプ。

サードフォルム”？”

フルドライブ”？”

オーバードライブ”？”

備考：倉庫の中になぜかあったデバイスで、右京が触れたことで起動し、右京をミッドチルダへと飛ばした。

起動時に”男性”と発言したこともあり、右京のことをマイマスターと呼びながらも男性として見ている。

右京至上主義の為か、度々危ない発言をして周りを沈黙させる。
尚、名前がなのは持つレイジングハートとよく似ているが、別に
関わりはない。

尚、変形させると見た目が丸ごと変わるため、カートリッジの排出
場所や補充の場所も変わる。

魔法

プロテクション

ポピュラーな防御魔法。

しかし、右京の魔力では広くするほど薄く、強度もなくなる為、狭
くして少しでも強度を上げている。

更に魔力量が少ない為、十回ほどしか使えない。

はっかいっせん
八花一閃

セカンドフォーム時に使用出来る斬撃魔法。

カートリッジを使用して魔力刃を形成、刃を巨大化させて斬り込む
魔法。

接触時にほんの少しでも刃が通れば、魔力刃が急速に広がり、内側
から米時に切れ込みを入れてそのまま刃を通し、八分割にするとい
う、正しく必殺技。

少しでもめり込んだらスパツといく魔法です。

「マイマスターの前に立ちはだかるモノは全てバラバラになればいいのです」

「避けられるかめり込まない程の防御魔法を使われたらただ刃をでかくするだけの魔法だな」

今回のプロフィールはここまで。

「新魔法やフォルムが解禁されれば、新設定という形で書くかもしれません」

「その時はまた、名前を募集するかもな……カッコいいのを頼むぜ？」

尚、今回の魔法名はスモーク様のものを採用させて頂きました。

「他の人も捨てがたかったんだが……悪いが、今回は見送らせてもらった」

沢山名前を考えてくださってありがとうございます。

「これからも流れ着いて！ミッドチルダ！をよろしくな！」

プロフィール（後書き）

前作のように右京に対する質問や、番外編の案などは常に募集しております。

他の作者様のように、人気投票なんかしてみたり……携帯なので
きませんがorz

その魂は星と雷と夜天と共に（前書き）

うあー短い……もっと詰め込んでよかったかもしれません。

無理やりな感じがする文がありますが、あまり突っ込まないで頂けると助かります（汗）

では、第六話をどうぞ

その魂は星と雷と夜天と共に

（No side）

気絶した右京とザフィーラを医務室に寝かせた後、隊長陣三名とリインフォース、ヴォルケンリッター三名、フォワード陣四名プラス1は機動六課の会議室に集まっていた。

その室内は暗く、一つのスクリーンがあり、そこには右京がセットアップした瞬間からザフィーラと殴り合った瞬間までの映像が流れていた。

「レイジングソウルさん、ガジェットを破壊するシーンだけ繰り返して流してくれへん？」

「ええ、構いませんよ。何度でもマイマスターの勇姿を見せつけてあげます」

その映像を流しているのは、言わずもがなレイジングソウルである。最初は渋ったレイジングソウルだが、ティアナに見せる約束をしていたことを思い出して今に至る。

本人は一刻も早く、右京の寝顔をその身に記録したいと思っているのだが、それと同じくらいに自分の主の勇姿を見せつけたいと思っているため、ノリノリで見せていた。

スクリーンには右京がガジェットを殴って破壊したシーン、棍で貫いたシーン、踏み砕いたシーン、斧で八分割したシーンが繰り返し

流されている。

そのスクリーンを見ている10人プラス1は皆、思い思いの表情をしていた。

はやてと赤みの強いオレンジ髪の少女：ヴィータは真面目な表情で。なのはは真面目な表情だが、右京を目で追う姿は恋する乙女そのものだった。

フェイトと濃い桃色の髪の女性：シグナムはワクワクというか、好戦的な目で見ている。

リインとフォワード陣はそのムチャクチャとも言える戦い方に啞然としながらも憧れの眼差しを向けていた。

そして画面が再び、右京が魔法を使う瞬間になった時だった。

『一閃必中!!』

『【一撃ひっさあつ!!】』

暗い室内、しかも隊長陣までいるにも関わらず、ティアナを除くフォワード陣とリインは右手を上げて叫んでいた。

因みに、なのはもこっそりと右手を上げていたりする。

「うつせーぞお前ら!」

【ごめんなさい!!!】

当然、ヴィータからお叱りを受けた4人であった。

スクリーンは上げられ、レイジングソウルは右京の元へと送られた。明るくなった会議室で隊長陣は席に座り、フォワード陣は立った状態であった。

「さて、このアンノウン……次元漂流者の喜喜　右京さんやけど……」

はやてはそう言って室内にいる全員の顔を見回す。

全員の表情を見たはやては真面目な表情を崩さずに言葉を続ける。

「本来なら事情を聞いて本部へと護送し、本来いた世界を探して帰すのが筋なんやけど……魔力ランクはD、人柄はライトニングの2人と高町隊長から問題なしと聞いたし、戦闘力も私を含めた隊長達は満場一致で最低でも陸戦AAと判断……私は、右京さんさえ良ければ、六課に迎えたいと思ってる」

はやての言葉に、驚いた者は一人もいなかった。

繰り返し見たガジェットとの戦闘と、屋上でみたザフィーラとの殴り合いで戦闘力が魔力ランクと不釣り合いな程に高いことは明白。

本来なら、真面目なシグナムやヴィータ、ティアナは異論を唱えそうなところだが、むしろ来て欲しいとすら考えていた。

そんな隊長陣の心境はこんな感じである。

（部隊保有ランクに引っかけからず、しかも即戦力……なんとか入ってくれへんかな）

（やっと会えたんだし、六課に入ってくれるといいな……一緒に訓練したり、ご飯食べたり……）

（エリオとキヤロも懐いてるみたいだし、右京さんのこともっと知りたいな。何よりも、なのはが喜ぶと思うし）

（ザフィーラといきなり殴り合うなんて面白い奴だったな……なのはの奴もフォワードの奴らも喜ぶだろうし、入れても大丈夫だろうしな）

（血が騒ぐ……早く奴と戦いたい！！）

誰がどれかは推して知るべし。

因みに、フォワード陣の心境はこの人がいたら心強いという考えでいたが、一人だけ、なのはと同じくらいに六課に入って欲しいと考えていた人物がいた。

キヤロである。

（あの安心感……あの大きな背中……なんでだろう。私はあの人を

……もつと知りたい)

一度感じた安心感。

それは自身の持つ恐怖を吹き飛ばし、勇気を与えてくれた。

その感覚を手放したくないと思ったキャラもまた、右京に六課に入
って欲しいと思っていた。

「……反対はないみたいやな。右京さんが目覚めたら、勧誘してみ
るわ」

誰からも反対意見が出なかったことに満足したように、はやては一
度頷いた。

丁度その時、レイジングソウルから連絡が入った。

右京が目覚めた……と。

〈No side out〉

「……ここはどこだ？」

目が覚めたときに見たのは、見覚えのない天井だった。

上半身を起こし、周囲を確認する。

薬品の入った棚、デスク、隣のベッドにはザフィーラが狼の状態で

眠っている。

どうやら俺はベッドで眠っていたらしく、ここは医務室のような場所らしい。

「お目覚めですか？マイマスター」

「たった今な。どれくらい眠ってた？」

「二時間程です」

二時間……それだけ気絶していたのか。

ザフィーラ……大牙と同じくらい強かったな。

「だが、次は勝つ」

右手で固く握り拳を作ってザフィーラに向ける。

眠っているザフィーラから返事はない。

だが、その背中「勝つのは俺だ」と言っている気がした。

俺が右手を下ろすと同時に、医務室の扉が開いた。

そこに立っていたのは……

「右京さん、大丈夫……みたいやな」

「体起こして大丈夫？どこか痛いところはない？」

「なのは……」

はやて、なのは、フェイトの三人だった。

「機動六課に入れ……ねえ」

「アカン？」

「ダメっつーか、そう簡単に入れるもんなのか？俺は一応、不審人物だろう？更に俺は次元漂流者だぞ？」

キヤロから次元漂流者はその元いた世界を探し出して送り返すのが主流だと聞いている。

俺がいた世界は地球……なのは達の出身世界と同じだから、事情を話せばすぐに帰れると思っていたんだが。

と、そこまで考えておかしいと思った。

なのは達と同じ世界出身なら、なのはと俺との時間のズレはどう説明する？

藍蘭島と日本では時間の流れが違った……いくら藍蘭島でもそこまで非常識ではないだろう……現に、そこで聞いた歴史と俺の知る歴

史は一致した。

所詮は夢の話だった？しかしなのは俺と会ったことを覚えているし、渡した布を持っていた。

色々思いつく可能性の中で、俺は一つの仮定をする。

それは、俺のいた地球となのは達の地球は別物ではないか？というもの。

つまり、なのは達の地球には藍蘭島がない可能性があり、あったとしてもそこは俺の知る藍蘭島ではない可能性がある。

全ては可能性の話だが……なぜか確信が持てた。

俺となのは達の地球は”違う”。

ならば、元いた世界に送り返すことが出来ず、俺は保護され続けることになる。

ここで機動六課に入らなければ、事情はもう話してあるし、本部とやらへ送られることになるだろう。

その時こそ、本当にレイジングソウルが取り上げられる可能性がある。

全てはあくまでも可能性だが……あまりいい結果を見いだせない。

「……………仮に入るとしたら、俺の扱いはどうなる？」

「私らの知り合いに信用出来る地位の高い人がおる。その人に右京さんの隊員証を作ってもらってミッドチルダでの一時的な戸籍も用意してもらう。右京さんはその人の紹介で苦手な魔法戦の実力を上げにこの機動六課に来た新人隊員……っていう筋書きや」

コイツ、俺を引き入れる気満々だな。

しかもさっきから次元漂流者の件に触れないってことは……可能性に気付いているのか、ただ忘れていただけか……。

「……………条件がある」

「可能な限り応えるつもりや」

「機動六課にいる間の俺の食住の確保と、機動六課にいるのは”俺のいた世界が見つかるまで”だ」

ニヤリ。

はやてはそんな擬音が聞こえそうな笑みを浮かべた。

コイツ……やはり可能性に気付いていたようだ……思った以上に頭が回るみたいだな。

なのはとフェイトは首を傾げているが。

「その他は？」

「対応はあくまでも形だけだ……なるべく従うようにはするが、許容出来ない命令などがきた場合は……俺の全力を持って拒否させて

もらっぞ」

俺は、エリオやキャロのような子供を危険な場所に出す時空管理局にいい感情は持っていない。

その時空管理局から来る命令には従うつもりは一切ない。

全く聞かないのはマズいので、普通のヤツなら聞く努力はするがな。

「……うん、わかった。他には？」

「ないな。しばらくの間、宜しく頼む」

「こちらこそ。ようこそ、機動六課へ」

こうして俺はしばらくの間、機動六課に世話になることになった……
…隊員として。

くなのはside」

「ねえはやてちゃん、右京の配置はどうするの？」

右京さんのいた医務室から出た私達は、通路を歩きながら右京さんの機動六課での配置を決めようとしていた。

私としては、スターズに入って欲しいんだけどなあ。

「右京さんの部屋も決めないとダメだよな……」

「え？ 私達の部屋じゃダメなの？」

「それは流石に……」

むう……同じ部屋に住んで少しでも長く一緒にいようと思ったのに。

でも確かに年頃の男女が同じ部屋ってのは問題あるかな？

別に右京さんがいいなら問題が起きても……エヘヘ。

「なのはちゃんが何を想像しとるか手に取るように分かるけど……まあそれはええわ。なのはちゃんには悪いけど、右京さんはライトニングに入って貰うつもりやで」

「ええ　　っ！！」

それじゃあ一緒にいる時間が短くなっちゃう。

これははやてちゃんの嫌がらせなのかな？

まずは理由を聞いて、納得出来なかったら……。

「なんや悪寒を感じる……理由はライトニングの2人……特にキャロが懐いてること、フェイトちゃんがあまり一緒に訓練出来ひんことや。遊撃も考えたけど、今の右京さんには任せられへん」

理由は納得できたけど……どうして遊撃は任せられないのかな。

別に問題ないように見えるけど。

「右京さんは多分、魔法戦は全くと言っていいほど慣れてない……というか出来ないと思う。だから、フォワード陣と一緒に訓練して魔導師としての実力を上げてもらわなあかん」

そういえば魔法を使ったのはプロテクション一回とあの斬撃魔法の計二回だけだっけ。

本人も魔導師歴20分って言ってたし……。

「そうだね。私がしっかり教えてあげないとダメだよね……!」

「な、なのは……抑えて抑えて」

「フェイトちゃん!これは私に課せられた使命なの!今から右京さんを含めた訓練を考えないと!」

こうしてはいられない。

早く部屋に戻って訓練メニューを組み直さないと……!

「行っちゃった……報告書書かないとダメなのに」

「なのは隊長は本当に右京さんが好きやねんなあ……」

その後、報告書のことを思い出した私は徹夜で訓練メニューと報告書の両方をこなした。

くなのは side out く

その魂は星と雷と夜天と共に（後書き）

という訳で入隊が確定しました。

信用出来るお偉いさんはもちろんクロノ……哀れな。

ヒロインはなのはを押しているように見えますが、キーパーソンなだけで実はヒロインになるかは確定していなかったり……八割くらいヒロインしてますが。

不屈の心と魂が織りなす物語ですし

入隊する前の過ごし方―一日目―前編（前書き）

タイトル無駄に長くなってしまいました。

頑張れ自分頑張れ自分と己を奮い立たせております。

ギャグもシリアスもバトルも程良くいれたい今日この頃。

それでは第七話をどうぞ

入隊する前の過ごし方―一日目―前編

機動六課に世話になること……期間限定で隊員になることになった翌日。

医務室で目覚めた俺が体を起こして最初に見たのは……フェイトとは違う金髪の女性だった。

「あら、おはようございます」

「ああ、おはようさん。昨日屋上にいた人だよな？」

「はい。シャルと言います」

「喜喜 右京だ。宜しくなシャル」

シャルとの挨拶をした俺はベッドから降りて体を解すために屈伸をする。

隣のベッドには既にザフィーラの姿はない……もう復活したらしいな。

「はやてちゃんが、右京さんが起きたら部隊長室に来るように言っていましたけど……場所、知らないですよね？」

「全く分からないな。地図でも貰えるとありがたいんだが……ところで、今何時か知らないか？」

「見取り図は昨日、はやてより受け取っておりますので私がナビい

たします。現在AM5:21です」

俺の問いに答えたのはシャルルではなく、俺が寝ていたベッドの枕元にいたレイジングソウルだった。

5時21分か……藍蘭島での生活が染み付いてるようだな。

「ならレイジングソウル。洗面所かその類の場所までのナビを頼む。それからシャルルに頼みがあるんだが……」

「了解しました、マイマスター」

「なんででしょう？」

俺は枕元のレイジングソウルを手にとって首に掛ける。

束ねている髪をレイジングソウルの紐の外へと出し、少し図々しいかもな……と苦笑気味にシャルルに頼んだ。

「タオルと歯ブラシと歯磨き粉……予備があつたら譲ってくれないか？」

レイジングソウルのナビの下、歯磨きセットとタオルをシャルルから譲ってもらった俺は洗面所にたどり着いた。

そこには既に先客がいた……ティアナである。

「あ……おはようございます右京さん」

「おはようさん。早いなティアナ」

「右京さんこそ」

俺はティアナの隣に並び、歯磨きを始める。

すると、ティアナも同じように歯磨きを始めた。

しゃしゃこという音だけが洗面所に響き、少しして2人して口の中を洗い流し、顔を洗う。

「そつえば右京さん、隊舎の中を出歩いて大丈夫なんですか？」

「さあな……六課にはしばらく世話になる予定だが、今はどうか知らん。はやてには部隊長室に来るように言われているが」

と言つても俺が直接聞いた訳ではなく、シャルルから聞いたんだが。

それに、一体何の呼び出しなんだか……まさか、今更やっぱ六課に入れるのは無理でした……なんて言わないだろうな。

「ということは右京さん、六課に入るんですか？」

「なんでそんなに嬉しそうなんだか…入る予定だよ、予定」

あくまでも予定の口約束。

俺自身は守るつもりだが、軍隊に入るといふのは口で言うほど簡単ではないだろう。

「ま、なのはの友達だから心配はしてないがな。それじゃ、はやてのそこに行くてくるわ」

「私が案内しましょうか？」

「レイジングソウルがナビしてくれるから大丈夫だよ」

俺はティアナに背を向け、右手を上げて小さく振りながら洗面所から出た。

レイジングソウルナビのおかげではやてのいる……と思われる部隊長室の前にたどり着いた。

現在AM5:38……はやては起きているのやら。

「はやて、右京だ。起きてるか？」

扉の向こうに向かってノックをしてから声をかける。

程なくして「入ってええよー」という声が聞こえたが……どうやって入るんだ？

ノブは見当たらないし、近付いて開くならノックの時点で開くだろうし……。

と、考えていたらいきなり扉が横にスライドした。

「ごめんな右京さん。ロックしてたん忘れてたわ」

部屋の中に苦笑しながら右手で謝罪のポーズをするはやてがいた。

俺は苦笑しながら「構わない」と言って部屋の中へと入り、はやての前まで行く。

デスクを挟んだ形で向かい合うとはやては苦笑を浮かべたまま、口を開いた。

「昨日言った右京さんのミッドでの戸籍や、隊員として来る為の紹介文…隊員の証たる隊員証やねんけどな。作ること自体は問題ないんやけど……最短でも2日は掛かってしまうんや。その間の右京さんの行動のことで少し話があつてな」

なるほど、別に隊員になることは問題ないのか。

約束を反故にされたらどうしてくれようかと内心考えていたが、無駄になってよかったな。

「その間は監禁でもするのか？」

「そんなことせえへんよ。ここに来る新人隊員が一足早くに見学に来るって六課の人間にはもうメールで伝えてある。だから、隊舎の

中を歩き回ってくれてもかまへんし、なんならミッドを観光してくれてもええよ」

ただし監視付きでと言っではやては笑った。

メールなんて一体いつ送ったのやら。

監視付きとはいえ、町に出てもいい上に隊舎内を歩き回っても問題ないとは……信頼されていると捉えておくか。

「さつき会ったティアナは俺がその新人隊員だと知らなかったみたいだが……」

「送ったのはほんの数分前やから、見てなかったんとちゃうかな？ あ、そうや……もうすぐフォワード陣の訓練が始まる時間やし、見学に行ってみたらどうやる？」

訓練か……確かに訓練の内容は気になるし、新人隊員として入ったら俺もすることになるだろうから見ておきたいな。

ならば善は急げだ。

「ああ、そうさせてもらう。外に出たい時にはレイジングソウルに連絡してもらえばいいか？」

「そうやな、うん、それでええよ」

「それじゃ、失礼する」

なんとなく、右手で敬礼するとはやても笑いながら敬礼を返してく

れた。

俺も小さく笑い、部屋から退室し、適当に通路を歩く。

「あ、右京さん」

「ん？フェイトか」

その途中でフェイトとバッタリあった。

んー、やっぱり見たことがあるんだよなあ……。

「えっと……何か付いてる？」

「ああ、悪い、そういう訳じゃないんだ」

どうやらジロジロと見すぎたらしく、フェイトがキョトンとして自分の体を見下ろしたり、顔を触ったりし始めた。

俺は一言謝り、聞きたいことを聞くことにした。

「なあフェイト。悪いがティアナ達が訓練する場所まで連れて行ってくれないか？」

「私がナビしますが？」

「訓練時の集合場所でも地図に書かれてるのか？」

「いえ、そこまでは……」

レイジングソウルがはやてから受け取ったのはあくまでも地図。

どこかの部屋に向かうなら問題ないが、集合場所なんて書いてないし、俺が行っていいという確証はない……いや、歩き回ってもいいとは言われてるが。

「あはは……うん、いいよ、案内してあげる。こっちだよ」

俺とレイジングソウルのやり取りに小さく笑みを零したフェイトは俺の前に立って歩き始めた。

……その方向が俺が歩いてきた道だったのは少しショックだったがな……知らない内に離れていたようだ。

「右京さんとなのはって、いつ出会ったの？」

フェイトの案内でティアナ達の集合場所に向かっている最中、フェイトがそんなことを聞いてきた。

いつ……と聞かれると俺は1、2ヶ月前としか答えられないんだがな……さて、どう答えたものか。

……よし、逆に聞いてみるか……質問に質問を返すのは好きじゃないが。

「フェイトはいつ出会ったんだ？」

「え？私は……九才の時だよ」

九才ってーと……俺が3、4回目に見た時か。

なのはにどうすれば話を聞いて貰えるか？という質問を受けた時と布を渡した時、確かなのはは小学三年生……九才くらいだったはずだ。

「ちよつと離れ離れになった時期もあったけど……それからはなのはとはやてとずっと一緒に……大切な親友です」

少し照れくさいのか頬を淡く染めたフェイトの笑顔は、可愛らしさと美しさを兼ね備えた笑顔だ。

離れ離れになったという言葉と今の笑顔で思い出したことがある。

俺はフェイトを一方的に知っている……なのはに布を渡した時に見た金髪の少女。

あれがフェイトだったのだろう。

「……そうか」

「はい……あ、私も言ったんだから、右京さんも教えてほしいかなのはにいつ出会ったの？」

どうやら誤魔化されたことに気付いたようで、フェイトはムスツとして下から俺を見上げてきた。

天然で無防備なのか、狙ってやってるのか……前者だな、確実に。

さて、どう言っべきか……と考えるとロビーのような広々とした場所に辿り着き、出入り口の外にはティアナ達となのはの姿が見えた。

「さあな……なのはに聞けば分かるんじゃないか？案内ありがとな」

「右京さん教えてよー……もう」

俺は誤魔化しながらフェイトに礼を言っ出入り口の外へと向かった。

後ろから苦笑気味のフェイトの声が聞こえたので、思わず笑ってしまった。

「というわけで、今日は右京さんとみんなで模擬戦をしてもらいます」

【はい】

「ちょっと待て」

なのは達に合流し、訓練を見学したいと言った。

”見学”をしたいと言ったハズなんだが……。

「どうしたの？右京さん」

「どうしたのじゃねえ。なんで”見学”つつたのに”体験”になつてんだよ」

「ダメ？」

「ダメってワケじゃないんだが、説明はしてくれ」

そしてなのはがした説明はこうだ。

俺は既に機動六課に配属……入隊することは決まっている。

今は一足早く見学に来た新人隊員扱いだが、はやてから訓練を受けさせてもいいと言われている。

レイジングソウルにガジェットを破壊する場面は見せてもらったが、やはり自分の目で見たい。

俺の戦闘力を見たところ、陸戦ランクAAは固いので、フォワード陣と多対1の模擬戦を行っても大丈夫。

後々やるんだから今のうちにやっちゃおう。

ということらしいが……納得できん。

だがフォワード陣はやる気満々でセットアップしているし、場所もいつも模擬戦をする訓練フィールドに來ているらしいし、やるしか

ない空気だ。

「しかし、訓練フィールドという割に、何もないな……」

「ふっふっふ……甘いよ右京さん。シャーリーお願い！」

「はい！」

シャーリーと呼ばれたメガネをかけた茶髪の女性がPCのキーボードを叩くような行動をする。

すると、何もなかったハズの訓練フィールドがたちまち廃墟のような場所になった。

ホログラムか？とも考えたが、どうやら違うようだ……ビルとか瓦礫とか触れるし。

ミッドチルダの科学力はスゴいな。

「驚いた？これが、六課自慢のバーチャルフィールドだよ」

なのはが俺の隣まで歩いてきて自慢気に言った。

「ああ、驚いた。こりゃあ楽しい模擬戦ができそうだ」

あんなに嫌がっていたのに、模擬戦が楽しみとは俺も現金な奴だと思っ。

リアルで触れる廃墟……隠れたり、瓦礫を使ったりとより実戦に近い模擬戦が出来るに違いない。

更に、今から始まるのは俺にとっては未知の戦い。

ただか魔導師歴1日の俺が、フォワード陣に一体どれだけ食らいつけるか……いや…。

食らいつくしてやるさ。

「フォワードのみんなは準備万端みたいだし、右京さんも準備してね？」

「ああ」

離れていったなのは言葉に短く返し、俺は胸の蒼を右手で握る。

模擬戦……つまり、ケンカってことだよな。

全く、俺はいつからバトルマニアになってしまったのか。

もし理由があるとすればそれは十中八九、大牙との殴り合いなのだが。

「行くぞレイジングソウル！！セットアップ！！」

「スタンバイレディ」

俺の体を瑠璃色の光が包み、服装がバリアジャケットへと変化する。

光が消えた後に自分の姿を確認する……手甲に棍と最初の装備か…
…どうやらこれがファーストフォルムのような。

手に持つ棍をクルクルと回しながら、体の周りに生き物のように動かし、両手でしっかりと握ってフォワード陣に向ける。

俺も相手もやる気は充分、準備も万端。

「それじゃあ、右京さん対フォワード四名の模擬戦……」

勝敗条件は……全滅したら負けでさせたら勝ち。

「スタート!!」

なのはの言葉により、たった今、ケンカ模擬戦が始まった。

入隊する前の過ごし方〜一日目〜前編（後書き）

番外編を書くとしたら

短編集

希望されたもの

何かの作品のパクリ

うーむ、したいことが沢山……。

なんて、今から番外編の話は早いですね。

今回はフォワード陣との模擬戦！！

戦闘描写は書くのも見るのも好きな作者でした。

入隊する前の過ごし方〜一日目〜中編（前書き）

修正しました。

自分が一番楽しみました

テンション上がりすぎて、何を書いたやら……

戦闘描写は難しいですが、楽しいです。

皆様も楽しんで貰えるかは不安ですが…

それでは第八話をどうぞ

入隊する前の過ごし方―一日目―中編

〔No side〕

右京がフォワード陣と模擬戦をしようとしていた同時刻。

部隊長室にて、はやてはとある人物と通信をしていた。

はやての目の前の空間に浮かぶ画面に映っているのは……

「右京さんの件、ありがとうなクロノ君」

『構わないさ』

フェイトの兄であり、機動六課の設立に協力した人物……クロノ・ハラウン提督である。

はやてが右京の戸籍や隊員証、紹介文を頼んで人物である。

「でも正直意外やわ……クロノ君のことやから」そんなこと出来るわけないだろう！」とか言うんやと思うたのに」

ぶっちゃけた話、はやては次元漂流者である右京を六課に入れると言った時は絶対にクロノは反対すると思っていた。

とは言っても、はやては無理やりにもクロノに納得させるつもりでいたし、最初にレイジングソウル提供の戦闘シーンを送っていたので、高い戦闘力や低い魔力を盾にするつもりでもいたのだが。

しかし、実際ははやての想像とは違い、一言の否定もなくクロノは右京が六課に入ることをよしとした。

しかも隊員証や紹介文などははやてが頼む前にクロノが自分で言い出したことなのだ。

『あの動画を見せて貰ったところ、彼の人柄も戦闘力も問題はない。次元漂流者ではあるが、はやての言うとおりなら彼のいた世界はそう簡単には見つからないだろう……それに隊長陣も彼自身も入ることに異議を唱えていないなら何も問題はない。何よりも……』

機動六課に必要なのは彼のような人間だ……と。

クロノはそう言って笑った。

「そっか……うん、わかった。右京さんの件、よろしくなクロノ君」

『任されたよ』

その言葉を最後に、クロノの映っていた画面が消えた。

その瞬間、はやては座っていたイスに深く座り直し、ハア……と息を吐いた。

クロノの言った理由は打算的で、言うほど人柄は見えていないように感じた。

確かに部隊保有ランクにも、お偉い方の目にもさほど余裕がない今、右京のような低ランク良戦力は望ましい。

はやてが右京を引き入れた理由の中には当然、そんな考えも含まれている。

「それでも……それだけやないんよ？」

誰にでもなく、はやては呟く。

なのはの嬉しそうな顔を見た。

エリオのお兄さんと慕う姿を見た。

キャロの右京に褒められて照れる姿を見た。

三人に笑顔を向ける右京の姿を見た。

屋上で戦い、お互いに似たような笑みを浮かべる右京とザフィーラの姿を見た。

そんな姿を見てしまつては引き離せなくなるではないか。

なのはに至つては十年ぶりに会つた好きな人なのだ。

親友の為、部隊の為とはやては呟く。

「……右京さんか……」

はやての前に画面が現れ、何かを映す。

それは、右京がエリオとキャロの2人を褒める場面。

その場面を見て、はやては微笑ましそうに……どこか羨ましそうに
呟くのだった。

「お兄ちゃん”って……こんな感じかな」

〔No side out〕

「でえええい!!」

「はああああ!!」

エリオとスバルの2人が左右から突っ込んでくる。

叫び声を上げる2人を見た俺は棍を縦にして斜めに構え、2人の攻
撃を待つ。

すると2人はいきなり左右に分かれ……間からオレンジの光が5つ
飛んできた。

「魔力弾です」

「見れば分かる」

抑揚のないレイジングソウルの声に答えながら、俺は右方向へと跳
んで魔力弾を避ける。

しかし、着地点にはスバルが右手を振りかぶって待っており、俺が着地するタイミングで右ストレートを繰り出した。

「でえええい！！……つてあれ！？」

しかしスバルの拳は空を切り、俺はスバルの頭上のビルの壁に、横向きに着地した。

何てことはない。ただ、着地する場所を棍で突き、棒高跳びのように跳んだだけだ。

「まず1人！！」

「させません！！」

「おおっと！？」

隙だらけだったスバルを攻撃しようとしたら、エリオが突っ込んできた。

当たるわけにはいかないので、すぐに壁を蹴ってエリオの槍を避けて地面に着地する。

そのまま後ろのスバルとエリオを無視してティアナ達に向かって走る。

さっきの魔力弾はティアナだろうし、キャロの強化は厄介だ、先に潰せば楽になるだろう。

「くっ!!」

ティアナが顔をしかめながら魔力弾を数発放ってきた。

俺は走る速度を緩めることなく、一発を右手で弾き、残りも棍を振って弾いた。

「嘘!？」

「本当だよ!!」

驚愕の表情を浮かべるティアナとキャロ。

まだ少し2人と距離があるが、それも後数秒で縮まるだろう。

「まずは……ティアナから潰させてもらっぞ!!」

「でやあああ!!」

「なに!!?」

ティアナに向かって走っていると突然エリオが右側に現れ、手に持つ槍を振るってきた。

咄嗟に左へ跳ぶことで槍を避けることに成功し、壁を背にしたが……まさか、もう追い付くとはな……どんな足の速さだよ。

「クロスファイア」

「ちっ……」

「シュ トー！」

今度はティアナから魔力弾が飛んできた。

後ろは壁、前にはエリオがいるので俺はその場から高く飛び上がることで避けたのだが……それが間違いだった。

「一撃ひつとおうー！ダイバイイイイン……」

なんとスバルが右手の前に青い光を作り出して振りかぶりながら、青い道の上を走ってきたのだ。

今俺がいるのは空中……完全に死に体だ。

「プロテクション」

「くっ！」

「バスタアアアアアー！」

瞬間、俺は青い光の奔流に飲み込まれた。

くティアナsideく

「よし！入ったー！」

スバルの砲撃魔法は完璧なタイミングで右京さんを捉えた。

確かにあの動画……ガジェットと戦っていた時の右京さんはすごかった。

でも魔法を使ったのは二回……だから、魔法戦は慣れていないと予想した私達の作戦は早期決着。

本当なら、最初のクロスファイアシュート、もしくは囷だったスバルがエリオの一撃で終わらせるつもりだった。

しかしそれは過小評価だった……右京さんの身体能力は予想以上で、エリオの速さがなければ、私かキャラが撃墜されていたかもしれない。

「ありがとうエリオ……エリオ？」

「油断しないでくださいティアナさん……」

「まだなのはさんから、撃墜判定をもらっていません」

エリオとキャラの2人はまだ警戒態勢をとっていた。

確かにキャラの言うとおり、撃墜判定は出ていないけれど……空中にいたし、魔力ランクD程度の防御魔法でスバルの砲撃魔法を防ぎきれると思わない。

そう考えているとスバルがこっちに合流した。

「やったねティア！！気持ちいいくらい完璧に入ったよ」

「わかったからあんまりハシヤがない！」

スバルも合流したし、後は撃墜判定を待つのみ。

右京さんはビルの中に入ってしまったし、こちらから姿は見えない。

それでも……今になって嫌な予感がする。

「ねえスバル……さっきの一撃、本当に入ったの？」

「え？そう言われてみれば……でも手応えはあったから、入ったと思うけど」

手応えがあつたなら、流された、避けられたということはない。

やっぱり気のせいかしら……。

〈ティアナ side out〉

「大丈夫ですか？マイマスター」

「なんとかな……それにしても、あれも魔法か……」

「はい。更に、あの少年の速度も魔法による強化です」

何でもアリだな魔法は……。

今の状況を確認するでしょう。

今いるのはビルの一室の中……スバルの魔法を受けた時にぶち込まれたようだ。

レイジングソウルが咄嗟にプロテクションを張り、両腕をクロスさせて顔をガードしたおかげか、少なくとも動くに支障がないくらいにダメージを抑えられたようだ。

バリアジャケットは所々埃が付いており、ガードした手甲には……なんと傷一つない。

棍も傷一つない………なんという強度だ。

「しかし厄介だな……ティアナの射撃、スバルの一撃、エリオの速さにキャラの強化……」

はつきり言って勝てる可能性は低い。

それは俺自身の対魔導師戦の経験不足と魔法の知識の無さ………そしてあいつらのチームワークの良さだ。

さて、どうしたものか………。

「レイジングソウル、なんかないか？」

「あります」

「あるのかよ」

「あります。マイマスターの脳内に私の情報をインストールし、魔法の知識を得られれば、勝つ可能性は高まります」

ふむ……確かに魔法の知識を得ることは嬉しいな。

ここで勘違いしてはいけないのが、俺が得るのはレイジングソウルそのものの情報とプログラムされている魔法の情報であり、決して戦闘力が変わるワケではない。

だが、知っているのはそれだけで力だ。

とは言っても俺自身が訓練しないと魔力運用やらマルチタスクやらの関係で上手く魔法が使えないのだが……ここまでがレイジングソウルの説明である。

「んじゃ、早速やってくれ」

「それでは、私のコアにキスして下さい」

「よし、わかつ……ってなんでやねん」

思わず関西弁になってしまった。

レイジングソウルが言うには、口の粘膜に接触した方がインストールしやすいんだとか。

はっきりに言ってかなり嘘臭いんだが……まあ仕方ないか。

「わかったよ……頼むぜ？レイジングソウル」

「はい……ドキドキ」

ドキドキと口（？）に出すレイジングソウルに苦笑しながら、右手甲に輝く蒼に口づける。

その瞬間、俺の頭の中に膨大な情報が入り込んできた。

ファーストフォルム、セカンドフォルム、サードフォルム、フルドライブ、オーバードライブ、カートリッジ、魔法、etc…。

頭が割れそうな痛みというのもなく、俺はレイジングソウルから来る情報を全て受け入れていく。

一分か、十分か、一時間か……気付けば、情報のインストールは終わっており、俺はいつの間にか立ち尽くしていた。

「はふう……如何ですか？マイマスター」

「問題ない……レイジングソウル」

「はい」

「俺達は今ようやく、あいつらと同じ土俵に立った」

魔力が低く、多対1、知識もない状態で始まった模擬戦。

だが、知識を得た今ならある程度、魔法の行使ができるだろう。

「だが知識だけで、経験がないことには変わらない」

しかし、行使出来るようになって、俺は自力で魔法を使ったことがない。

そんな奴が魔法を本当に使えるか？無理に決まってるだろ。

「だからサポートしろ。これは模擬戦だ……やるからには勝つ。しかし俺1人では厳しい……だからお前のサポートがいる」

レイジングソウルがいなかったら、さっきのスバルの一撃でやられていた。

俺1人では魔法はおろか、バリアジャケットすら展開出来ない。

「俺とお前は一心同体……俺が危ない時は助けてくれ……さっきみたいにな」

「……イエス、マイマスター。魔法の行使、咄嗟の防御はお任せ下さい。マイマスターのサポート、我が機能の全てを使って全力でやらせていただきます」

「頼もしいねえ……それじゃあ行くぞ？」

「イエス、マイマスター」

くなのはside」

「うわぁ……みんなも容赦ないですね」

「そうだね……」

シャーリーが冷や汗を流しながら呟く。

スバルのデイベインバスターは確かに完璧なタイミングだった。

それでも右京さんは両腕でしっかりガードしていたし、プロテクションも張られていた。

それに、右京さんの姿はビルに突っ込んだ際の土煙で見えない。

倒れているのか、無事なのかが分からなければ撃墜判定は出せない。

そもそも、負けるということが想像出来ない。

本当にあれで終わり？

「そんなことはないよね……右京さん」

私が呟くと同時に、ビルの煙が晴れる。

「嘘……」

「さっすが右京さん」

そこには、少しバリジャケットに傷が付いているけど、しっかりと立っている右京さんがいた。

右京さんはビルから飛び降り、フォワードのみんなの前に姿を現す。

「さあ……模擬戦再開だ」

フィールドに、力強い声が響いた。

「なのはside out」

「行くぞレイジングソウル!!」

「イエス、マイマスター」

俺はフォワード陣に向かって走る。

狙いは当然……ティアナだ。

「スバル！エリオ！もう一度やるわよ!!」

「「おう!!」」

スバルとエリオがさっきと同じく突っ込んでくる。

そして左右に広がり、中央からオレンジの魔力弾が5発ほど飛んできた。

それをさっきと同じく右に避けるとやはり、スバルが殴りかかってきた。

「でやあああ!!」

「さっきとは違うんだよ!!」

「え? キヤアア!!」

「うわあ!?!」

俺は殴りかかってきたスバルの肩に手を置いて逆立ちをし、振り下ろすようにスバルの背中を両膝で蹴り飛ばす。

飛んでいったスバルはエリオを巻き込み、ビルに激突した。

「今度こそ倒れてもらうぞ!! ティアナ!!」

俺はティアナに向かって走るが……なぜか迎撃が来ない。

不自然に思いながらも俺はティアナへと迫り……

「ハアツ!!」

棍を右から横一閃に振るった。

しかし、棍はティアナを捉えることなくすり抜けた。

「なっ!?!」

「幻術です。マイマスター、背後に魔力反応」

「厄介な！」

すぐに背後に振り返る。

そこにはフォワード陣4人が全員存在し、キャロの両手が桃色に光り、エリオの槍の先端も桃色の光を帯びた。

あー、そういえばキャロを途中から見なかったな…とか思っていたらエリオが物凄いスピードで突っ込んできた。

「ハアアアツー!!」

エリオの槍と俺が接触した瞬間、土煙が巻き起こった。

「…………え？」

エリオが驚愕の声を漏らす。

まあ仕方ないのかもしれない。

なぜなら……

「これが……魔法か」

俺が槍の刃の部分を両手で握り締めて止めており、俺に直撃して
なかったのだから。

土煙が晴れると、フォワード達やなのは達からも驚愕の声が聞こえ
た。

まあそんなことはどうでもいい。

「魔法つてすげえな……幻術とかできんのか……」

槍を掴んでいる両手が痛む……あれほどの速度で突っ込んできたん
だ、それを受け止めたら痛んで当然だろう。

「スバルの魔法もエリオの速さもすげえ」

俺の今までの常識が一切通じない未知の魔法。チカラ

「キャラの強化魔法もすげえ」

そんな魔法と模擬戦チカラ ケンカが出来る。

それがこんなにも楽しい。

「楽しいねえ……大牙やザフィーラとの殴り合いとはまた違った楽
しさがある」

「うわっ!？」

掴んでいた槍をエリオごと投げる。

エリオは無事、ティアナ達のところへと着地した。

「こんなに楽しいんだ……燃えるよなあレイジングソウル」

「はい」

やってやるさ……俺の全身全霊で。

暴れてやるさ……俺の全力全開で。

魔法はレイジングソウルがサポートしてくれる。

俺はただ、力の限り暴れるのみ。

「行くぞ」

「はい」

両手の拳をガツンと音を鳴らせてぶつけ、体は正面に、腰を落とし、両手は曲げて引く。

「行くぞ！」

「はい！」

口は笑みを作り、目は4人を見据え、足に力を込める。

「行くぞおー！」

「はい!!」

ああ、これだ……この感じだ。

血が、心が、魂が燃える。

テンションはMAX、やる気は臨界点突破、負けるつもりなんか全くない。

あるのは……勝利への執着のみ!!

「最つつつつ高にハイって奴だあああああ!!!!!!!!」
「」

地が砕けるほどの跳躍。

俺が向かっているのはティアナではなく……エリオだ。

「速い!?!」

エリオは驚いたものの、しっかりと槍を構える。

「セカンド!!」

「スラッシュスタイル!!」

両手の手甲から一発ずつ薬莢が排出され、手甲と棍は斧へと姿を変

える。

俺は速度を一切緩めず、エリオに向かって斧を振り上げる。

「オラァ！！」

「くっ！！」

エリオは槍で防いだが、軽い体重が災いしてか、上空へと吹き飛んだ。

すぐさま追い討ちをしようとしたのだが……

「クロスファイアシュート！！」

「フリード！ブラストフレア！！」

数発のオレンジの魔力弾と火球が飛んできた。

「じゃらくせえ！！」

俺は力の限り、斧を横一閃に振るい、火球をかき消し、魔力弾を弾き飛ばした。

「そんな！？」

「なんつーデタラメな！！」

「レイジングソウル！！カートリッジロード！！」

「ロードカートリッジ」

斧から葉莖が二発排出され、刃が瑠璃色の光に包まれて巨大化する。

俺は斧の刃を横向きにし、居合いのように構える。

「八花……………」

「やばっ！？キャロ！ブースト！！」

「は、はい！！」

「僕も手伝います！！」

空にいたエリオがティアナ達のところに着地し、ティアナとエリオが防御魔法を張る。

スバルがないのが気になるが、今は気にしない。

今は……全力で振るうのみ！！

「一閃！！」

横一閃に斧を振るう。

巨大化した刃は2つの防御魔法に同時に当たり……そして。

「……そんな……………」

それぞれ4つの切れ目が走り、あっさりと裂けた。

斧の魔力刃はそのまま三人へと突き刺さり、戦闘不能へと追い込んだ。

「後はスバ…っ!？」

「でやああああ!!」

突然真横から来た攻撃に驚くも、俺は斧を盾にして防ぐ。

しかし、スバルの力が強かったようで数メートル吹っ飛ばされてしまった。

「決められなかった!?でも!!」

「あめえよ……ファーストフォーム」

「ノーマルスタイル」

斧から薬莖が一発排出され、手甲と棍へと姿を変える。

スバルはまた右手に光を溜めている……あの魔法か。

ならば、俺も見せてやるさ。

「レイジングソウル……”聖拳”行くぞ」

「オーライ、マイマスター」

俺は棍を投げ捨てて両手を曲げて引き、手甲から二発ずつ薬莢が排出される。

すると、両手の手甲が瑠璃色の光に包まれていく。

「「デイバイイイイイン……っ！！」」

お互いに、同時に全速力で互いに向かって走る。

そして同時に右手を振りかぶり……

「フイストオオオオオ！……！」

「バスタアアアアア！……！」

互いの光が放たれた。

瑠璃色と青の光がせめぎ合い、幻想的な光の粒子を撒き散らす。

やがて拮抗していた2つの光は……青が瑠璃色を飲み込む形で終わった。

く No side く

スバルの前には煙が立ち込めていた。

手応えは充分……自分の憧れの人であるのはと自分の魔法……デイバインバスターとよく似た名前の魔法を使ったことには驚いたが。

スバル達の作戦は、ティアナ達が囷となり、一番破壊力のあるスバルが右京の死角から最大の一撃を入れるというものだった。

まさかティアナ達がやられると思わなかったスバルは、予想外の出来事からディバインバスターではなく、普通に拳を振るってしまっただが、結果オーライだろう。

自分達が勝った。

「勝った……」

その喜びを飛び上がることで体で表現しようとしたスバル。

「やつ……っ!？」

「セカンドお……」

しかしスバルは忘れていた。

右京は”両手”に魔力をチャージしたこと……

戦場では一瞬たりとも油断してはならないということを。

「インツツツパクトオオオオ!!!!」

両手を上げて飛び上がっていたスバルに防ぐ術はない。

右京がいるのはスバルの左側の為、リボルバーナックルで防ぐこともままならない。

やがて瑠璃色の光の奔流はスバルの体を飲み込み、意識までも飲み込んだ。

それが意味するのは……

「そこまで！！フォワード陣全員の気絶を確認！！右京さんの勝利とします！！」

不屈の魂の勝利であつた。

〔No side out〕

入隊する前の過ごし方―一日目―中編（後書き）

右京「今回俺が使った魔法を紹介するぞ」

デイベインフィスト

瞬間最大威力はスバルのデイベインバスターに拮抗できるくらい。

スバルと違って手に魔力を纏わせ、両手にチャージすることを除けば、後はスバルのデイベインバスターと同じ。

分類上は砲撃魔法に該当。

しかし、射程も短く、今の魔力ではカートリッジを使ってもB＋くらいの威力しか出ない。

使うとテンション上がる。

右京「やっぱり魔力が低いと威力も低いらしいな……射撃魔法も使えるようになった方が良さそうだ。また、名前を考えてもらうことになるかもしれないが、その時は頼むぜ？」

入隊する前の過ごし方―一日目―後編（前書き）

プロットなしでその場のノリで書くことが俺のジャスティス

右京「行き当たりばったりなだけだろうが……」

今回で一日目が終わります。

右京「長い一日だったな」

という訳で流れ着いて！ミッドチルダ！第十話！

右京「違う！流れ着いて！ミッドチルダ！第九話、どうぞ。後書きにも軽く目を通してみてくれな」

入隊する前の過ごし方―一日目―後編

模擬戦を終えた俺達は、六課の食堂で朝食を取ることになった。

なので、俺達は今、食堂に向かっていた。

「右京さん、魔法戦馴れてなかったんじゃないんですか？」

「馴れてなかったさ。実際、幻術とかモロに引かかったし、プロテクション、八花一閃とディバインフィストくらいしか魔法使っていないし。ああ、そういえば、作戦考えたのはティアナか？」

「ええ、まあ……」

やはり、あの模擬戦の動きは全てティアナの指示だったようだ。

射撃、援護のタイミングに幻術、スバルの一撃とかも全部計算か…。

「すげえじゃねえかティアナ。お前とは戦いたくないわ」

「いえ、そんな……」

クセになってきているらしく、右手はティアナの頭へと伸びて撫でる。

するとティアナは顔を赤らめて俯いてしまった……照れているようだ。

因みに俺達は既にバリアジャケットを解除しており、ティアナ達は

訓練着で俺はいつもの私服だ。

「右京さん」

「ん？どうした？キャロ」

キャロに名前を呼ばれたので声の方に……見下ろす形でキャロを見る。

なぜか左手がキャロに握られており、エリオも隣にいて……2人も真剣な表情だ。

何か、真面目な話なのだろうか。

「その……私達と一緒にご飯を食べませんか？」

「それから……その……」

別に飯くらい構わないんだが。

エリオが何かを言おうとして、キャロと一緒にモジモジとした。

そして、次に出てきた言葉は……

「「その……お兄（さん／ちゃん）って言うてもいいですか！？」」

「「「はあ！？」「」」

なぜかなのはとスバルとティアナの三人がビククリしていた。

ところ変わって食堂。

俺はフォワード達と同じテーブルに座っており、テーブルの上にはこれでもかと山盛りになっているスパゲティやサラダ、様々なパンやコーンポタージュといった料理が並べられていた。

「お兄ちゃん、はいどうぞ」

「ああ、ありがとなキャラ」

キャラから小皿に分けられたスパゲティとサラダを受け取る。

結局俺はキャラとエリオの兄発言を了承した。

初めから駄目なんて言うつもりもなかったし、藍蘭島にいた時も何人かから兄と言われていたしな。

「それにしても……」

チラッとスバルとエリオの2人の前を見る。

そこには山盛りの……スパゲティやらサラダやらパンやらがあった。

因みに座っている場所だが、俺の左隣にキャラ、その隣にエリオが座っており、右側にティアナ、その隣にスバルという感じだ。

「…………あれ、入るのか？」

「気持ちは分かりますが…………まだお代わりしますよ」

「マジで!？」

ティアナが疲れたような表情でそう教えてくれた。

あれでまだお代わりするとか…………スパゲティなんかマジで山だぞ山。

あの体の中のどこに入るんだ…………特にエリオ。

「まあいいか…………いただきます」

「…………いただきます」

「きゅくる」

こうして、俺のミッドチルダでの初めての朝食が始まった。

く No side

「うっ…いいなあ、右京さんとはん…………」

「まあまあ」

右京とフォワード達の座るテーブルに羨ましそうな視線を送ってい

るのは、スターズ分隊の隊長、高町なのは。

そのなのはを宥めているのは、ライトニング分隊の隊長、フェイト・T・ハラオウンである。

その2人と同じテーブルに座っている機動六課部隊長、八神はやてはとリインは、なのはに苦笑している。

「私もお兄さんと一緒にごはん食べたいですう」

「お昼か晩御飯の時な」

リインも羨ましそうな視線を送るので、はやてはリインの頭を撫でながら解決策を呟く。

はやてがふと、右京達のテーブルを見てみるとそこには楽しそうに談笑しながら食事をしているフォワード達の姿。

右京はスバルとエリオの皿の上のものがなくなるのを見計らって、また食べ物を盛り、手渡す。

その姿があまりにも自然に見えたため、はやてはクスリと笑ってしまった。

「むう……いいもん、晩御飯と一緒に食べるもん。ところではやてちゃん、右京さんの入る部隊とお部屋は決まったの？」

「右京さんはやっぱり、ライトニングに入ってもらっよ。部屋は……どないしょー……」

はやての答えに不満そうにするのはとは対照的に嬉しそうな表情のフェイト。

しかし、まだ部屋は決まっていないという感じの言葉を聞いたのはは、ニツコリと笑った。

「じゃあ右京さんは私達の部屋に……」

「ダメ」

「即答!？」

なのは意見は即座に却下された。

いくら好意を向けている男性とはいえ、年頃の男女が一緒に住むのはダメだと2人は首を振る。

それに、なのははフェイトと同じ部屋にいるのだから……と二回目になる説明を受けた。

因みに、エリオはまだ年齢が低い為、キャロと同じ部屋で過ごしている。

「うう……じゃあ、せめて近くの部屋に……」

「それも考えたけどな、新人が隊長陣の近くってのはどうかと思うんよ。と言っても、一人部屋にするっていうのも、他の隊員から不満が来るかもしれへんし……」

うーん、と唸りながら三人は思考する。

もともと機動六課は48名の偶数だったので、二人部屋で均等に分けることができていた。

そこに右京が入る為奇数となり、一人部屋になってしまう。

これが位の高い人物ならまだしも、右京は三等陸士という設定になる為、不満が出る可能性がある。

ならば三人部屋にするのはどうか？

しかし二人で丁度いい広さなのに、もう一人入れたら狭くなるのは……ベッドを二人で使えば大丈夫なのだが、大人二人では窮屈な思いをするだろう……大人二人……。

「『あ』」

三人は同時に右京とフォワード達のテーブルを見る。

正確には、エリオとキャロの二人を見た。

大人二人では厳しいなら、子供との相部屋ならどうか？

「ライトニングの二人は右京さんに懐いてるし、喜びそうやな」

「そうだね。それに、右京さんはフォワードに入る予定だし……」

「私と同じライトニングになるんだし、三人で親睦を深められるし……」

「「「よし、これでいこう」」」

こうして、右京、エリオ、キャロの三人の預かり知らぬところで部屋割りが決められた。

〔No side out〕

朝食を終えた俺達は再び訓練フィールドに来ていた。

今この場にいるのは俺、フォワード4人+1、なのはと……

「右京つつたな。あたしはヴィータだ」

「シグナムだ」

「喜喜 右京だ。よろしくな、ヴィータ、シグナム」

以上の8人+1だ。

フォワード達はこれから訓練を始めるらしく、俺は見学する。

念の為、もう一度言うが”見学”をする。

なのに……

「フタツキ……先ほど、お前とフォワード達の模擬戦の動画を見せてもらった」

「そうか…それで？」

「私と模擬戦をしないか？」

グツと拳を握り、どこことなく期待した眼差しを向けるシグナムがいた。

おかしいな……俺は訓練を見学すると言ったハズなんだが、なぜ模擬戦を進められているのだろうか。

「また始まったよ……バトルマニアめ」

ヴィータの呟きが聞こえた……シグナムはバトルマニアらしい。

つまり、俺と同じ人種か。

「それは魅力的な話だが……また今度な」

「む、なぜだ？」

「カートリッジが心許ないんだよ……予備を持ってないから、補充できてないんだ」

ファーストフォルムの装弾数は両手甲に六発ずつ……列車で一発ずつ、模擬戦で三発ずつ使ったので、残り二発ずつ。

セカンドフォルムは装弾数は六発であり、列車で二発、模擬戦で三発使ったので残り一発しかない。

「だから今は勘弁な。その代わり、近い内に必ず模擬戦することを

約束する。俺もお前と戦いたいからな」

「仕方ないか……わかった、また日を改めよう」

話がついたところで、俺は訓練をしているなのは達の方を見る。

訓練内容は……基礎的な体力や反射神経などを上げることがを主にしているようだ。

体力を上げればそれだけ活動出来る時間が延びるし、反射神経を上げれば相手の攻撃に反応出来るようになる。

そんな基礎的な訓練が終われば、次は魔法を使った訓練に入る。

なのはの放つ魔力弾を避け続けたり、なのはに一撃を当てようとしてたりと模擬戦じみた訓練をしている。

あ、スバルが直撃した……どうやら訓練で体力がなくなってきたて注意力が散漫になってきているようだ。

この出来事の三十分後、ティアナの魔力弾がなのはに何とか命中し、訓練は終了した。

訓練の感想だが……見ている分にも、恐ろしくハードだと感じた。

そして昼食の時間、俺はなぜかエリオ、キャロと一緒にはやて、フエイトと同じテーブルに座っていた。

「えつと……」

「あの……」

エリオとキャラは緊張しているのか、そわそわと落ち着きがない。

はやては部隊長で、フェイトは二人の上司だから仕方ないかもしれないな。

「で、話ってなんだ？」

「右京さんが隊員として入隊する時の話を少しな」

ふむ、確か最短で2日……つまり明後日には新人隊員として入隊することになる可能性がある。

しかし、それなら俺一人でいいはず……エリオとキャラを呼ぶ理由が分からないな。

「右京さんはフォワードとして入隊し、分隊はフェイトちゃんこのライトニングに入ってもらうことになる……因みに、コールサインはライトニング05になる」

「「ホントですか!？」」

なるほど、それで二人も呼んだのか。

二人も嬉しそうな声を上げているし、拒否される心配はなさそうだな。

「それともう一つ」

フェイトが右手の人差し指を立てて微笑を浮かべる。

まだ何かあるらしい。

「これは今日からお願いしたいんだけど……三人が良ければ、同じ部屋に住んでほしいんだ」

「僕はいいですよ」

「私も大丈夫です」

そして4人の視線が俺に集中する。

エリオとキャロなんか目をキラキラさせて、期待の眼差しを向けているし……まあ断るつもりはないんだがな。

「二人がいいなら断る理由はないよ」

「決まりやな」

こうして、俺は今日から二人と同じ部屋で暮らすことが決まった。

……医務室暮らしと思ってたから嬉しい誤算だったな。

午後の訓練は夕方の5時までみっちり続いた。

この訓練も俺は見学していたのだが、その間、シグナムからしつつく模擬戦に誘われていたのは想像に難しくないだろう。

つたく、カートリッジが補充出来ればいつでもやるつつってのに……。

訓練を終えたフォワード陣が次に行うのは、書類提出……事務的な作業だった。

フォワードに入るからには俺もやることになるのだろうか……。

「俺……事務仕事ってやったことないんだよね……」

「私が教えましょうか？」

「悪いなティアナ……頼むわ」

という流れでティアナに事務仕事を教えてもらうことになった。

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥だ。

しかし、問題が発生した。

ティアナの説明はとても分かりやすいのだが……俺はミッドチルダの言葉が全く分からないのだ。

「……ミッド語……頑張って覚えるか」

「あ、確認するのは私とヴィータ副隊長だから、日本語で大丈夫だよ右京さん」

なのはの言葉に安心しつつ、俺はしばらくの間、ティアナから事務仕事の説明を受けていた。

そして夕飯。

俺はなのは、フェイト、はやて（リイン）、ヴィータと同じテーブルで食事を取っていた。

因みに夕飯はビーフシチューとクロワッサン、オニオンサラダだ。

「昼もパンだったよな……ひょっとしてミッドチルダには米がないのか？」

「そんなことはないよ？ただ、はやてちゃんがたまに地球の料理を作ってくれるから、その時くらいしかご飯は出ないかな」

部隊長が直々に作ってんのかよ。

聞けば、はやては料理が得意であり、感覚を忘れない為に時々腕を振るっているんだとか。

しかもギガウマらしい……とはヴィータ談……ギガウマってなんだよ。

「ふむ……んじゃ、今度厨房借りてなんか作るかな」

「お兄さんは料理出来るですか？」

「食える程度には作れるさ」

俺の呟きに反応したリインの言葉に作れると返す。

藍蘭島ではよく作っていたからな……藍蘭島か……。

俺は……いつ、帰ることが出来るのだろうか。

「右京さん？どうかした？」

「……何でもないよ。このビーフシチューうめえな」

キョトンとしたなのはに何でもないとし返し、ビーフシチューに舌鼓を打つ。

……あれ？ビーフシチューも地球の料理じゃね？

時間は一気に飛んで現在22:17。

俺はエリオとキャロに手を引かれ、二人の部屋まで来ていた。

二段ベッドが一つに勉強机が2つ……トイレが一つ……充分一人暮らしが出来る広さだ。

「ベッドは二人で埋まるから、俺は床で……」

「お兄ちゃんは私と寝ましょう」

「「まてまてまてまて」」

エリオと二人して右手を前に出し、キャロにツッコミを入れる。

この娘は羞恥心はないのか？ いや、別に何かするつもりもないし、一緒に寝るのは構わないんだが。

「お兄さん、僕と寝ましょう」

「エリオ、お前もか」

いや、男同士だからキャロ以上に問題ないんだが。

因みに二人共、それぞれピンクとイエローのパジャマを着ている。

俺は変わらず私服だ……替えの服を買わないとダメだな。

「お兄ちゃん私と！」

「僕と！」

「ジャンケンしろジャンケン」

全く、いつの間にこんなに懐かれたのやら。

まあ、嫌われるよりはマシだが……そういえば、なのはも俺に好意があるようだったな。

……自分で考えるとイタク思えるな……自意識過剰な奴だな俺。

「勝ちました!!」

「負けた……」

どうやら考えている間に勝敗が決したようだ。

ジャンケンに勝利したのは……

「エヘヘ……」

キャラだった。

俺はキャラに腕枕をしており、キャラが使っていた枕を借りている。しかし、エリオの落ち込みようは見えていられなかったな……そんな

にも俺と寝たかったのだろうか。

そんなことを考えながら、キャロの頭を撫でてやる。

「お兄ちゃん……」

喜ばれた。

それにしても……落ち着くな。

この静かな空間で自分以外の体温を感じるといふのはこつも落ち着くのか。

いつの間にか、部屋には2人の寝息だけが小さく響いている。

「ホント……お子様は寝るのが早いことで」

ベッドに入ってからほんの数分で寝てしまった2人の寝息を聞きながら笑みを浮かべる。

そうだ、はやてに三人で寝られるような大きいベッドを頼んでみよう。

そうすれば、あんなに落ち込むエリオやキャロを見なくてすむだろう。

まあそれは後日の話だ。

今は……

「お休み……よい夢を」

この温もりの中で微睡^{まどろみ}むとしよう。

入隊する前の過ごし方〜一日目〜後編（後書き）

他の作者様がよく自キャラと喋っていたのでつい前書きでやってしまった。

前書きで右京に何かやらせたい

魔法を使ったら、後書きで魔法の説明をさせるのに……

前書きで右京にやらせたい、やってほしいことがあれば何なりと！
！

入隊する前の過ごし方〜二日目〜前編（前書き）

戦闘がないとテンションが上がらない……というわけで、右京と会話したいと思います。

右「断る」

いきなり断られた…まあいいや。

今回はとある人物と邂逅します。

右「誰かは見て確かめてくれ」

それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第十七話！

右「ちがあう！！流れ着いて！ミッドチルダ！第十話！どうぞ！」

因みに、プロフィールも1話に数えられています。

入隊する前の過ごし方〜二日目〜前編

AM 5:08……俺は暖かいものを腕に抱えながら起床した。

まあ、暖かいものとはキャロのことなのだが。

「ん……あふ……」

上半身を起こして屈伸をしながら欠伸を一つ。

日が登りきっていないらしく、部屋の中は薄暗い。

今更だが、この部屋の二段ベッドは上がキャロ、下がエリオとなっている。

なので、ベッドから下りようとしたのだが……

「ん……うゝ……」

キャロに右手をしっかりと握られており、下りることが出来ない。

見ている分には微笑ましいのだが、今は早く洗面所に行きたい。

「すぐ戻る……だから離してくれな」

小声で、左手でキャロの頭を撫でながら呟くと、キャロは右手から手を離してくれた。

実は起きているのでは？と考えたが、くしくしと目をこする辺り、

寝ているようだ。

そんなキャロを見て小さく笑いながらベッドから下りる。

そして歯磨きセットとタオルを持って洗面所へと向かった。

勿論、レイジングソウルを首にさげて。

くティアナsideく

数分前に起きた私は今、洗面所へと向かっている。

その間、私は昨日の模擬戦のことを考えていた。

昨日の模擬戦……私達対右京さんという形で行われた模擬戦は右京さんの勝利で終わった。

魔導師初心者で、レアスキル希少技能もなく、魔力が少ない上に一人だったのに私達は負けた。

確かに身体能力が高いことは認めるが、はっきり言ってしまえば、右京さんは”それだけ”だ。

実際、最初から後半まで私達が押していた。

それなのに、最後の最後で逆転されてしまった。

魔力弾を手（正確には手甲）で弾いたり、フリードの炎をかき消したりとデタラメな行動もあったけど、負けるなんて思わなかった。

「やっぱり、油断したからかな……」

油断したから……言い訳ね。

敗因としては、相手を見くびっていたことと……

「あの斬撃魔法……確か、”八花一閃”って言ってたっけ」

あの魔法を防ぎきれずに三人いっぺんに撃破されたことよね。

あの魔法がどういうものかは知っていたハズなのに……ブーストしてもらった私とエリオの防御魔法はあっさりと切り裂かれた。

1mmたりとも刃を通しちゃいけないなんてね……一撃必殺とはよく言ったものだわ。

でも、受けてみて分かったことがある。

あの魔法は見た目に反して威力がそれほど高くないのだ。

なのに、なぜ一撃で沈められたか……それは、接触時にバリアジャケットも切り裂かれ、体に直接受けたから。

よほど防御魔法に自信がない限り、あの魔法は防御してはいけない。

「それに射撃魔法は一度も使っていない……次、模擬戦をやる時は私達が勝つ」

「そりゃあ楽しみだ」

突然聞こえた声に、思考の海から現実に戻される。

その声の主は……当然ながら右京さんだった。

昨日と同じように、しゃこしゃこという音だけが、洗面所を支配する。

数分後、2人で口の中を洗い流し、顔を洗ってタオルで拭いた。

そこで、私はなんとなく聞いてみた。

「右京さん」

「ん？」

「また今度、私達と模擬戦やりませんか？」

「やだね、絶対お前らとはやらねえ。特にお前とは絶対やらねえ」

あっさりと断られてしまった。

右京さんはバトルマニアだと思っていたから、正直意外だ。

しかも私とは絶対にやらないって…。

「どうして私なんですか？スバルみたいな才能も、エリオやキャロみたいなレアスキルもない、凡人の私を……」

「才能？レアスキル？よくわからんが、んなもん関係ねえよ。お前には作戦を考えられる頭と、正確な射撃の腕がある……幻術だつてある。確かにスバルの一撃、エリオの速さ、キャロの強化は厄介だが、それを纏め上げ、正確な援護射撃が出来る奴が、俺は一番恐いね」

私が驚いたのは仕方ないことだと思う。

右京さんはたった一度の模擬戦で、私達のことをよく分かってくれていたのだから。

何よりも、私のことを誉めてくれているのだから。

「だからよ、自分を凡人なんて言うな。天才と呼ばれる奴らは、一見始めから何かが出来ると思われがちだが……その実、血のにじむような努力をした者達のことだと俺は思う。”天才”という言葉は、その努力を否定する”悪口”なのさ。いいじゃないか凡人で凡人には凡人の生き方や誇りがあるんだから」

それに、俺だって凡人だ……と言って右京さんは笑った。

右京さんの言葉は、私の内の悩みを吹き飛ばすようだった。

そうだ、凡人の私にだって誇りがあるんだ。

私の……ランスターの弾丸はどんなものだって撃ち抜ける。

それを証明する為に、私は頑張って努力しているのだから。

「ありがとうございます右京さん」

「なんでお礼を言われたんだか……どういたしまして、”先輩”」

そう言っただけと笑い、右京さんは私の頭をクシャクシャと撫でてから、洗面所から出て行った。

……そういえば、兄さんもあんな風に頭撫でてくれたっけ。

そんなことを考えながら、私はスバルのいる自分の部屋に向かった。

～ティアナ side out～

部屋に戻ってみると、2人ともまだ眠っていた。

「レイジングソウル、今何時だ？」

「現在、AM5:32です」

どうやら、思っていた以上にティアナと話し込んでしまったようだ。

確か早朝訓練は6：00からだったな。

「2人とも朝だぞー起きろー」

「はい……」

パンパンと両手を叩きながら少し大きめの声で言うと、2人とも起きてくれた。

全く同じタイミングで、同じ動作だったのはびっくりしたが。

「ほら、キャロ、おいで」

「ん……」

二段ベッドの上にいるキャロを呼ぶと、四つん這いでこちらに向かって来た。

そのキャロを抱き上げ、床に下ろす。

幼い身に早起きは辛いらしく、まだフラフラしているが、早く着替えてシャキツしてもらわないと訓練に遅刻してしまう。

「ほら、シャキツとしろ。訓練に遅刻するぞー」

「ん……」

起きるどころか、いつの間にか出てきたエリオとキャラは俺の足に抱きついてきた。

懷かれているのは嬉しいのだが……仕方ない。

「ふう……いい加減にしろ!!」

「いたっ!？」

「きゃうっ!!」

俺の怒号と共に、2人の小さな悲鳴と、ゴチンツという音が部屋の中に響いた。

「「おはようございます……」」

「おはようさん」

「おはよ……2人とも、どうしたの?そのタンゴ」

「眠気覚ましです……」

「遅刻しないための処置です……」

「「は?」」

キャロとエリオの2人の頭には、ギャグでしかみないようなタンコブが出来ていた。

それを見たスバルが疑問の声を上げ、2人が説明したのだが、訳が分からなかったのか、ティアナとスバルの2人は首を傾げている。

因みにフリードは俺の頭の上にいる……タンコブはついていない。

「みんなおはよ〜」

【おはようございます!!】

「おはようさん、なのは」

そうこうしている内になのはが来た。

手には紙袋を持っている……一体何が入っているのやら。

「なのは、その袋はなんだ？」

「これ？これは右京さんへのプレゼント」

実際に聞いてみるとなのはは満面の笑みを浮かべ、俺に紙袋を渡してきた。

その中身を確認すると……大量のカートリッジが入っていた。

「……ありがたいが、なぜカートリッジ？しかもこんなに……」

「昨日シグナムさんに右京さんのカートリッジが心許ないって聞かされてね、シャーリーに用意してもらったんだ」

いや、俺が言いたいのはまだ隊員じゃない俺にカートリッジを渡しても平気なのか？ということなんだが……。

「あ、はやてちゃんの許可はあるよ」

あんの狸……部隊長の自覚あるんだろうな。

まあいいか……信頼されていると思っておこう……カートリッジは嬉しいしな。

「それじゃあ今日の早朝訓練を始めようか。右京さんはどうする？」

「今日も見学させてもらうさ。頑張れよ、お前ら」

【はい！！】

うん、いい返事だ。

訓練が終わったのは8：45。

今は食堂で朝食をとっているのだが……。

「和食や……」

「和食だね……」

「和食だあ……」

上から、はやて、なのは、フェイト。

そう、今日の朝食は完全な和食。

白飯、何かよくわからない魚の焼き魚、玉ねぎと玉子の味噌汁、ニンジンと里芋と糸こんにゃくと鶏肉の煮物という献立だ。

因みに、俺はフォワード四名と一緒にテーブルに座っている。

「見たことない料理ですね……」

「でもおいしそう」

「スバルさん、よだれ……」

「うう……ニンジン……」

料理を不思議そうに見るティアナと、料理を見てよだれを垂らすスバル、スバルのよだれを注意するエリオに、ニンジンを嫌そうに見ているキャラ。

因みに、スバルとエリオの白飯は山盛り、魚も山盛り、味噌汁と煮物は鍋ごと持ってきているというフードファイター顔負けな食卓となっている。

「さてと、食べますか。いただきます」

【いただきますー!!】

みんな、箸を持って食べ始める。

うん、なかなか美味くできたな。

実はこの料理達を作ったのは俺だ。

白飯をどうしても食いたくなつた俺は、訓練の途中で食堂へと向かい、料理を作ろうとしていたおばちゃんに交渉して朝食だけ作らせてもらったのだ。

因みに、味見をしたおばちゃんからは及第点を貰っている。

「このスープ美味しい……」

「わ、この細いのなんだろう？パスタとかじゃないみたい」

「焼き魚も美味しいです」

「ニンジン……」

「いや、キャロ。お前どんだけニンジン嫌いなんだよ……食べてくれないと、作った身としては悲しいんだが」

【え!?!】

俺の言葉に反応したのはフォワード陣だけじゃなく、なのは達隊長達（いつの間にかヴィータもいた）や、ちらほらという他の隊員達だった。

他の隊員達からは「あの人が作ったんだ……」「ていうかあいつ誰？」
「例の早めに来た新人隊員だろ？」などという会話が聞こえる。

本当に伝えていたんだなはやて……。

「この料理、右京さんが作ったの!？」

「いつの間に来たんだなのは。俺が全部作ったよ……隊員分作るのは骨が折れた」

なのはは目算7mは離れたテーブルにいたのに、どうやって一瞬でここまできたのだろうか……。

因みに、俺が作ったとは言ったが、一人で作るにはあまりにも隊員の数が多いので、途中でおばちゃんに手伝ってもらった。

「右京さん、料理できたんだ」

「なんでそんなに嬉しそうなんだよ、なのは。元いた世界では日常的に作っていたからな……食べる程度には作れるつもりだ」

実際、俺の料理の腕はよく聞くプロ級なんて言うほどじゃない。

ただ、普通に食えるし、普通に美味しいというレベルだ。

勿論、料理の他の家事全般は出来る。

「だから、食べないってのは悲しいな」

「……………」

苦笑しながらキャラロの方をしてみる。

キャラロはニンジンと俺の顔を交互に見ており、困ったような表情をしている……なら、食べざるを得ない状況にしてやるか。

俺はキャラロの煮物からニンジンを箸でつまみ上げる。

それをキャラロの口元まで持っていく。

「ほれ、あーん」

【はい！？】

俺とフリード以外の全員（隊員は除くがレイジングソウルは含む）がビックリした。

いや、そんな驚くことか？あー、でも女性なあーんやら姫抱きやらに憧れを抱くとはよく聞くな。

でも実際の所、全体の何%が本当に憧れているんだろ…どうでもいいが。

「あの……お兄ちゃん…何を…」

「何って”あーん”だよ”あーん”。ほら、早く食べないと周りか

キャロの頭を撫でる俺、恥ずかしそうに俯くキャロ、黄色い声を上げるはやてとスバル、顔を真っ赤にしているフェイトとエリオ、羨望の眼差しをキャロに送るなのはティアナ、呪詛を呟くレイジングソウル……。

これは……あれだな、カオスって奴か？

つーかなのはは分かるが、なんでティアナまで羨ましそうにしてるんだか。

……俺、ここに来て三日目のハズだよな……な？

「なあ、右京」

「なんだ？ ヴィータ」

「また飯作ってくれ。はやてには負けるけど、お前の飯も美味いかな」

「そいつはどうも。最高の誉め言葉だ」

「はやて、外に出たい」

「いや、いきなり言われても……」

朝食を終えた後の休憩中に俺ははやくにそう切り出した。

ミッドチルダは俺にとって未知の世界だ。

そんな世界に興味を抱かないほど、俺は冒険心がないわけじゃない。

「はやくは監視付きなら、ミッドチルダを観光してもいいと言ったじゃないか」

「言っただけど…今は監視に付けられるような人はおらんし…」

ああ、それじゃあ観光は無理そうだな。

監視が付けられないなら、観光に行く条件を満たせないのだから。

「それじゃあ仕方ないか……諦め」

「別にいいんじゃないかな」

「「フェイト（ちゃん）？」」

諦めようと思ったところで会話に入ってきたのはフェイト。

突然の乱入に、俺もはやくもキョトンとしてしまう。

「右京さんなら大丈夫だと思うよ？子供じゃないんだし」

「いや、そういう問題やないんやけど……」

「？」

ああ、ダメだ……この娘天然だ。

しかも組織とかに絶対向いていないタイプだ。

「……はあ……まあええか」

「いいのかよ」

「いいと思うよ。私は今から外回りに行くから、途中まで一緒に行こうよ」

フェイトが俺の右手を両手で握り、ニツコリと笑う。

どうすればいい？という意味を込めて、はやてを見してみる。

はやては苦笑して肩をすくめるだけだった。

「それじゃ……途中まで頼むわ」

「うん」

こうして、俺はフェイトと一緒にミッドチルダの首都、クラナガンへと向かった。

フェイトが車を運転出来るのは意外だったな。

「これ、右京さんに渡してって、はやてから」

クラナガンへとつき、車から降りた俺はフェイトから数枚の紙幣をもらった。

なんでも、この紙幣はミッドチルダの通貨であり、この数枚の紙幣だと、日本円に換算すると、二万ほどらしい。

通貨の読み方は分からないが、フェイトのデバイスから通貨の読み方やクラナガンの地図をレイジングソウルに送ってもらったので、間違うことはないだろう、多分。

「私の外回りの仕事が終わるのが大体17:00くらいだから、その時間になったら、ここで待っててね」

「俺の保護者かお前は……まあ似たようなもんだな。了解しましたよフェイト隊長殿」

俺は冗談めかして言いながら敬礼をする。

フェイトは少し不満そうにしたがすぐにニッコリと笑い、車を走らせた。

さて…現在の時刻は10:12……待ち合わせまで約七時間か。

どうやって時間を潰そうか……幸い、科学力はともかく、地球の文化とさほど変わらないようだ。

地図を見る限り、デパートとかゲーセンとかあるし……因みに、地図はレイジングソウルから発せられている画面に映っており、場所や店の名前は日本語に訳してある。

資金は二万……さて、どうしようか。

「ねえねえそこのお兄さん」

「あん？」

急に声をかけられた俺は、声のした方……後ろを振り返る。

そこにいたのは、水色の髪をショートカットにした女の子だった。

「なんだ？」

「この辺でさ、赤い髪の女の子と銀髪の眼帯した小さい女の子見なかった？」

「いや、見てないが……」

「そつかー…どこいったんだか」

ガクツと肩を落とし、頭をポリポリかく女の子。

どうやら、その女の子達とはぐれてしまったようだな。

「良かったら、探すのを手伝うぞ？幸いにも、時間はあるからな」

「ホント？助かるよー」

さっきのガクツと肩を落とした時の暗い表情から一転、笑顔になる女の子。

よく表情が変わる奴だ。

「俺は喜喜 右京ってんだ。あんたは？」

この時の俺は、知らなかった。

「あたし？」

この出会った女の子が…

「あたしはね……」

後に敵として出会っなんて……全く、知らなかった。

「セイン”って言うんだ。よろしくね、右京さん」

入隊する前の過ごし方〜二日目〜前編（後書き）

というわけで、ナンバーズとの邂逅でした。

因みに、自分はセツテが大好きです。

セツテ可愛いよセツテ。

さてと、次回の前書きは、右京に何してもらおうk

右「ディバインフィストオ!!」

ぎゃーす!!

入隊する前の過ごし方〜二日目〜後編（前書き）

今回はかなりグダグダです……途中で方向を見失いました。

右京「ノリで書くからだ……今回はキャラ崩壊が含まれているかもな」

苦手な方は御用心。それでは流れ着いて！ミッドチルダ！第二話！

右京「違う！！流れ着いて！ミッドチルダ！第11話！どうぞ！」

入隊する前の過ごし方〜二日目〜後編

〔No side〕

ここはどこにあるのか分からない、研究所の一室。

その一室の中にある大量のモニターの前に、紫色の髪の白衣を着た男性が座っており、傍らには秘書のような格好をした女性がいた。

「ドクター。チンク、セイン、ノーヴェの三人が見当たらないのですが……」

「ああ、彼女達なら、ミッドチルダの首都へお出かけさ。たまには外の空気を吸いたいんだそうだよ」

ドクターと呼ばれた男性の言葉に、女性はなるほど小さく頷いて納得の意を示す。

ふと、女性は男性がモニターから全く目をそらさないことを不思議に思い、男性が見ているモニターに目を向ける。

そこには、ガジェットを”何の魔法も使わずに”破壊する男性と、同じ男性が”魔法を使って”ガジェットを破壊する場面が映っている。

「これは……三日前の映像ですか？」

「そうだよーノ。この青年……なぜか気になるのだよ」

女性……ウーノは男性の言葉に首を傾げる。

ウーノには、モニターに映る青年が、男性の興味を持つような存在には見えないのだ。

確かに、魔法を使わずにガジェットを破壊する力は凄まじいが、このように身体能力が高いだけでは男性の興味対象にはなり得ない。

検知された魔力も低いの一言であり、ますます興味対象になる理由がない。

「自分でも分からないのだがね、なぜか気になる……この青年……興味とは違う、この感覚……私はこの感覚を”よく”知っている」

男性にとってはよく知るハズの感覚なのに、それが男性には分からない。

習知している未知の感覚……それが、彼から普段の笑みを消していた。

「是非とも、彼と話してみたいものだよ。そうすれば、この感覚も分かるかもしれないね」

不意に、男性の視界に別のモニターが入る。

そこに映るのは自分の娘と言っても過言ではないセインと……今さつき話題に出た青年が映っていた。

（No side out）

「どの辺りではぐれたか分かるか？」

「えーと…わかんない」

セインはあはは…と笑って自分の頬をポリポリとかく。

ふむ…情報はゼロに近いな…大雑把な容姿しかわかっていない。

「なあ、その女の子達の名前は？」

「赤い髪の娘がノーヴェで銀髪の眼帯娘がチンクだよ」

「ノーヴェとチンクだな…よし、覚えた。それじゃあ、探すとうるか」

「二手に別れる？」

「いや、仮に俺が見つけてもチンクはともかく、ノーヴェは判別できないかもしれないし、警戒されるかもしれない。だから、一緒に探そう」

「あいよ」

というわけで二人を探すために歩き始めた。

ミッドチルダの首都と言うだけあって、人の数は非常に多い。

ノーヴェとチンクの二人を目で探しつつも、つついクラナガンの街も眺めてしまう。

ビルの造形や、店の内装、車やバイク……所々に地球以上の科学力を感じつつも、感想は”地球とあまり変わらない”だった。

そういえば、昼食を取ってないな……二人を見つけたら、適当な店に入って食べるとしようか。

「うーん、いないなあ……チンク姉はともかく、ノーヴェはすぐ見つかると思ったのに」

「あそこの歩道橋にでも行ってみるか？高いところなら見つかるかもよ」

「うし、それで行こう！」

見た目通りというか、なかなか活発な奴だな。

俺達は目に見える場所にあった歩道橋まで行き、その上から見える範囲の街を眺めて見たが……やはり人が多いので見つけれない。

「どうだ？」

「ダメ、見つからない……そっちは？」

「こっちもダメだ……もしかしたら、どこかの店内にいるのかもな」

まだ街を全部見た訳じゃないから何とも言えないが、可能性はある。

もしくは二人もセインを探しており、互いに奔走してすれ違っているかだ。

「そういえば、通信出来るような物を持ってないのか？携帯とか」

「通信機の類はラボ……じゃなくて家に置いて来ちゃって」

やはり、自分の足で探すしかないようだ。

さてと、どこを探したもんかね。

「セイン、三人で一緒に歩いた道を覚えているか？」

「え？うーん……ちょっとだけなら」

「充分だ。がむしゃらに歩くよりはいい。そこに行くぞ」

セインの案内の下、やってきた場所は、デパートの前だった。

まずはここでウィンドウショッピングをしたんだとか。

「デパートの中も見てみるか？」

「うん、見てみる」

というわけでデパートの中に入る俺達。

中は……うん、やっぱり地球とそれほど変わらないな。

一階は幼児向けの服や、ネイルサロンなんかがある。

デパートの階層の店舗が知りたかった俺は、エスカレーターのとこ
ろにあったデパートの見取り図を確認する。

このデパートは八階建てであり、二階は化粧品売り場、三階はスー
ツなどの正装を売っており、四階は若者向けの衣服が、五階はぬい
ぐるみや玩具といった子供向けの階になっている。

六階は本や文房具、画材などが売られており、七階には飲食店が並
び、八階はイベントブースのようだ。

「お、二階に迷子センターがあるな……行ってみるか？」

「そうだね」

ノーズ side

「まったくセインの奴……どこいったんだ？」

「デパートにいるかと思ったんだが……姉の予想が外れたな……」

ああ、チンク姉がしょんぼりしてる……可愛……じゃなくて。

セインの奴……見つけたらぶっ壊してやる。

『迷子のお知らせです』

「迷子？」

チンク姉が放送を聞いて顔を上げる。

そうか、セイン以外にも迷子になった奴が……

『……にお住まいのチンク様、ノーヴェ様。二階、迷子センターにて保護者のセイン様とウキヨウ・フタツキ様がお待ちです』

ブチっと頭の中のケーブルが切れた気がした。

ウキヨウとかは知らないが……セインが保護者だと？

「ノーヴェ……姉は今、とてつもなく大声を出したい」

「奇遇だなチンク姉……あたしもだ」

二人で大きく息を吸う。

そして、怒りと共に吐き出した。

「セエエエエイイイインー!!」

ノーヴェ side out

「妹が世話になった。セインとノーヴェの姉チンクだ」

「いやいや、気にしなさんな。喜喜 右京だ。右京と呼んでくれ」

「わかった。では右京も、私のことはチンクと呼んでほしい」

「了解だ、チンク」

あの放送の数秒後、チンクとノーヴェがやってきた。

チンク達も俺達のような思考に至り、デパートにいたそうだ。

因みにセインだが、たった今頭に巨大なタンコブをノーヴェに作られて昏倒した。

ノーヴェはセインの右手を持って、引きずりながらこちらに歩いてきた。

「あんたがウキョウだな？あたしはノーヴェってんだ」

「喜喜 右京だ。よろしくなノーヴェ」

「？ウキヨウ・フタツキじゃないのか？」

「ミッドチルダの読み方に合わせたただだよ。喜喜 右京が正しいんだ」

「面倒だな……右京でいいよな？」

「ああ」

チンクとノーヴェとも合流できたし、自己紹介もしたし。

時間は……13：23か……昼には少し、遅いかな。

「チンク、ノーヴェ。良かったら、一緒に昼飯でもどうだ？」

「昼食か？私は構わないが……」

「あたしら金持っていないぜ？」

「心配すんな、奢ってやるよ」

「おやおやあゝ、ひょっとして右京さんナンパしてる？」

いつの間にか復活したセインがニヤニヤしながらそんなことを言うてきた。

セインの言葉を聞いたノーヴェが少し顔を赤くしてセインの頭を叩いた……ノーヴェは純情らしい。

「そうだな、この綺麗どころ三人と飯が食えるなら、飯代くらい安

いもんだ」

と、半分冗談で言ってみたんだが……。

「む、私は綺麗なのか？」

「あはは、右京さん上手いねえ」

「バ、バカ言うな！あ、あた、あたしがキ……キレイだなんてそんな……」

三者三様の反応をしてくれた。

あゝ、なんかノーヴェを見てると和むわ……今更だが、ノーヴェってスバルに似てるな……まあ気にする必要もないか。

「で、お嬢さん方は、俺と昼食を共にしてくれるのかな？」

「うむ、姉は構わんぞ」

「あたしもいいよ」

「あ……あたしも……別に」

「ありがとよ。それじゃ、七階に行くか」

なぜかナンパした形になったが、俺達は飲食店が建ち並ぶ七階に向かった。

1人寂しく食うよりは、大人数の方がいいしな。

資金もあるし、四人分くらい問題ないだろう。

「ただしセイン。お前はダメだ」

「なんで!？」

やってきたのはファミレスのような場所。

デパートの中にある割には、店内はとても広く、ちらほらと家族連れを見かける。

メニューも、地球と遜色ない品揃えだ。

「ご注文はお決まりですか？」

「俺は、サンドイッチとコーヒー」

「私はハンバーグセットを」

「あたしオムライス!」

「あたしはカレーで」

それぞれの注文が終わり、確認した店員は奥へと引っ込んでいった。

料理も店員の対応も……なんだろうな、藍蘭島にいたからか、懐かしいと感じてしまった。

ファミレスなんて何ヶ月…ヘタすりゃ何年振りか。

「なあ右京…今更だが、本当に良かったのか？ 私達の方まで……」

「いって。気にすんなよチンク」

「そうだよチンク姉。右京さんがいって言ってるんだし、遠慮なく奢れようよ」

「お前は少し遠慮しろ！」

ノーヴェの右拳がセインの頭に突き刺さる。

この三人って姉妹なんだよなあ……途中で聞いた話だと、他にも何人か姉妹がいるらしいが。

その割には似てない……共通点と言えば、チンクとノーヴェの瞳の色が金色ということくらいか。

セインは青いが。

「お待たせしましたー」

そんなことを考えていると料理が来た……いや、早くないか？

「まあいいか……いただきます」

「？右京は何をしているんだ？」

「両手を合わせて、料理に頭下げてるね」

「なあ右京。何してるんだ？」

いつものように両手を合わせていただきますと言うと、三人からツッコミがきた。

どうやら、彼女達にはこのようなことをする概念がないようだ。

「これは、料理に対して、料理を作ってくれた人に対して感謝しているんだ。自らの糧となり、自らの力になってくれる食材、料理、作ってくれた人に”いただきます”という感謝を。食べ終わった後には”ごちそうさまでした”ともう一度感謝を。食べる側の礼儀だよ」

という説明をしたら、三人からへ〜という感心したような声が聞こえてきた。

そして、それぞれの目の前にある料理に向かって手を合わせ……

「いただきます」「」

と言って一礼し、食べ始めた。

その姿に満足しつつ、俺も目の前のサンドイッチに舌鼓を打つのだった。

お、タマゴサンドうめえな。

「「「「ごちそうさまでした」「」「」

しばらくして料理を食べ終えた俺達は同時に一礼した。

そしていざ会計。

「2、860円（日本語訳）になります」

ふむ、だいたいこんなもんだろうな。

店を出た俺達はデパート内を物色し始めた。

服も買ったかったし、色々と売ってる物も見なかったしな。

という訳でやってきたのは若者向けの服が売ってる店。

「右京さん服が欲しいの？」

「ああ、コレしか持っていないから……2、3着くらい買うつもりだ」

「じゃああたしが選んであげるよ」

俺の答えを聞くまでもなく、セインは店内に入ってしまった。

変なの選んだりしないだろうな……。

「昼食の礼だ、私も選んでやろう」

「あたしも選んでいいか？」

「そういうことなら……んじゃ頼むな」

結局三人が選んでくれることになった。

セインは少し心配だが、2人なら大丈夫だろう。

という訳で三人が選んでくれた服だが。

セインが選んだのは、オレンジのパーカーに黄緑のＴシャツ、青いジーパン。

チンクが選んだのは、フードの付いた白いノースリと黒いジーパン。

ノーヴェは青い長袖に上着黒い半袖のＴシャツと灰色のジーパン。

……なんで色違いとはいえみんなジーパン選んだよ……まあ全部買ったんだが。

全部で6、380円（日本語訳）也。

「ありがとうよ、三人とも」

礼を言うと、セインとチンクは満足そうに笑い、ノーヴェは照れくさそうにそっぽ向いた。

それを見たセインがノーヴェをからかい、拳で黙らされたことは想像に難くないだろう。

現在16：48……もうすぐフェイトとの待ち合わせ時間なので、早く行きたいのだが……。

「兄ちゃん、痛い目見なくなったら、彼女達置いて失せな」

「じゃないと……痛い目見るぜ？」

「痛い目見たくないなら、早く消えなよ？ククク……」

「……」

場所は思いつきり街道、人気がないどころか、360°からガン見されている。

ていうか何こいつら？三人とも世紀末に出てくる雑魚みたいな格好してるんだが。

しかもなんで一人一回”痛い目見”って言ってるんだ？マイブームかなんか？

ていうかもう見た目やらセリフやら雑魚臭やらなんかもう全体的に

……

「「古いな」」

【ぶふっ】

ノーヴェと俺の言葉が被り、チンピラ以外のその場にいた全員が吹き出した。

小説やらマンガやらドラマくらいにしか見ないと思っていたチンピラが目の前にいる。

むしろ小説とかでも見なさそうな濃い奴らがいて、全体的に古くて……ダメだ、混乱して何が言いたいやら。

「おまつ……ふざけてんのか！！」

「いや、こっちのセリフだわ」

「いいから女の子置いてどっか行けよ！！ぶっ殺すぞ！！」

「うわ、噛ませ犬の匂いが……」

「てめっ……殺す!!」

本音を言っているといきなり一人が殴りかかってきた。

遅いし、避けることも受けることも簡単だが、俺はそれを顔に受ける。

「っ……」

「「「右京^{さん}!?!」」」

「っはあ、調子に乗ってるからだ!!」

三人娘が俺を心配する声を上げ、殴った奴が嘲笑する。

その声が、イヤに堪に障る。

「てめえ!!右京に何しやがる!!」

「うるせえ!!女は黙ってろ!!」

「お前が黙ってろ」

「あばぶっ!!」

ノーヴェに手を上げようとした雑魚の頭にかかと落としを決め、地面が陥没するくらいの力で頭を踏みつける。

幸いにも、雑魚の頭は潰れなかったのでスプラッタなことにはなっていない。

「「なっ……」」

「「「えっ？」」」

雑魚2人が顔を地面に埋めた雑魚を見て啞然とし、三人娘はビックリしている。

周りの人間もシーンとして、一言も喋らない。

「さてと……先に手を出したのはそっちだが……当然、手を出される覚悟もあるよな？」

「ふ……ふざけんじゃねえ!!」

「ボコボコにしてやる!!」

殴りかかってくる雑魚2人……ザフィーラに比べても、エリオに比べても、スバルに比べても……遅い。

2人の攻撃を体を低くすることで避け、一人の腹に左ストレートを突き刺す。

「ぐぶっ!!」

そのまま地面に向かって打ち下ろすと、悲鳴を上げる間もなく沈黙した。

さて、後一人だと後ろを見てみると……丁度ノーヴェのハイキックが雑魚の首に決まり、雑魚が倒れるところだった。

「やるじゃねえかノーヴェ」

「右京兄！顔大丈夫か！？」

「ああ、こんくらい大丈夫……ん？右京兄？」

「あ、いや、その……」

俺の心配をするノーヴェの言葉に引がかかって繰り返してみると、ノーヴェの顔が赤くなった。

可愛い奴……と思った俺は正常だろう。

「時空管理局です！道をあけて下さい！」

「ヤッバ……チンク姉！ノーヴェ！」

どうやら誰かが通報したらしく、時空管理局が来たようだ。

しかし、セインの慌てっぷりはどうということだ？

「くっ……済まない右京。私達は……」

どうやら、チンク達は理由は言えないが、時空管理局に会うわけにはいかないようだ。

正直問いただしたいが……俺を見てこんなにすまなさそうな顔をされては……な。

仕方ない。

「行けよ。こっちは何とかしてやる」

「右京兄……」

「右京さんごめん！」

「済まない……」

三人は苦しそうな表情でこの場から走り去っていった。

その直後、人垣を掻き分けて現れたのは……薄紫の長髪の女性だった。

「108部隊所属、ギンガ・ナカジマです。事情聴取の為、ご同行願えますか？」

「ああ、構わないさ」

「それでは、こちらへ」

「右京さん!!」

「ようフェイト」

「お久しぶりですフェイトさん」

「え……？あれ？」

ギンガの所属している部隊に連行された一時間後。

事情聴取を終えた俺とギンガのいる部屋にフェイトが血相を変えて入ってきた。

そして、俺とギンガの姿を見るや否や、急にキョトンとした。

「えっと……右京さんが捕まったって、はやてから連絡があっただけだ……」

「は？ちよつと街で絡まれてそつから騒ぎになってギンガから事情聴取を受けたただだよ。はやてにもそう言ったハズだぞ？なあ？」

「はい、私も聞いてましたから、間違いないです」

「そつ……事情聴取は終わったんだよね？帰っても大丈夫かな？ギンガ」

「構いませんよ」

というわけで、案外あっさりと六課に帰れることとなった。

事情を全部話して、はやて達の知り合いだと言って確認が取れたら、すぐに解放とか……。

時空管理局……大丈夫なのか？

ここは帰る途中の車の中。

時刻は既に18:30を回っており、辺りをオレンジ色に染め上げている。

「ねえ、右京さん」

「うん？」

「どうして騒ぎなんか起こしたの？」

「そうだなあ……………」

不意に頭の中をよぎったのは、この世界にはいない弟分の言葉。

しばらく会えないかも知れない弟分の言葉を思い出し、少し嬉しくなる。

「男は女を守るもの」…それを実行しただけだよ」

「右京さんは誰かを守ったんだ？」

「そんな大層なもんじゃないがな」

「そっか」

フェイトは俺の言葉に満足がいったらしく、笑みを浮かべた。

そのまま静かに…互いに喋ることなく、暗くなりつつある道を進む。

帰ったら、なのは達に買ってきたものを渡さないとな。

そんなことを考えながら、俺は服の入った買い物袋とは別の買い物袋を見ていた。

…騒ぎの時に落として少しくしゃくしゃになっているが、大丈夫だよな？

＼No side＼

「ただいまドクター」

「おかえり……楽しんできたみたいだね」

セイン達が訪れたのは、ドクターと呼ばれる男性のいる一室。

それは、沢山のモニターがあるあの部屋だった。

「あの青年はどうだった？」

「青年？ああ、右京さんのこと？いい人だったよ……ガジェットを破壊した人とは思えないくらい」

男性の言葉に、セインはニヤリと笑って返す。

その言葉に満足そうにした男性は、再び、青年……右京がガジェットを破壊する場面を見る。

「少々アクシデント（迷子）はありましたが、任務は問題無く完了しました。最後に戦闘力も垣間見ることもできました」

「それは、大きい収穫だ」

チンクの言葉を聞いた男性は、笑みを作る。

少しずつ、少しずつこの感覚が分かってきた。

しかし、まだ足りない……感覚を確固たるものにする何かが。

「あのさ……ドクター」

「なんだい？」

感覚がその確固たるものになる瞬間。

「あたしさ……右京兄を……その……仲間になりたいんだ」

男性は椅子から勢いよく立ち上がった。

突然の行動に三人は驚くが、男性は気にすることなく、高らかに笑う。

「ふ…はは…ははははは！…ようやくこの感覚がなんなのかわかった！…そうだ！…私はこの感覚を知っていた！…なぜ気付かなかった！…この感覚は”私そのもの”だったハズなのに！…」

男性の言葉が理解出来ない三人は、なんだコイツ？という目を向ける。

そんな冷たい視線を受けながらも、男性の言葉は止まらない。

「喜喜 右京…私は君が欲しい！…」

「何言ってるんだアホドクター！…」

「ぐふあ！…」

男性の狂言は、ノーヴェの右足によってそれ以上紡がれることはなかった。

男性の言った欲しいとはどういう意味だったのか……それは今のところ、誰にもわからなかった。

その日の夜、機動六課では、隊長陣五名とフォワード陣四名、リインとシャマルの11人は、えらく上機嫌だった。

その首もとには、それぞれ違ったペンダントが輝いていたという。

入隊する前の過ごし方〜二日目〜後編（後書き）

どうしてこうなった

どうしてこうなった

大事じゃないけど二回言いました

ス力さんある意味爆弾発言

こんな調子で大丈夫か？

入隊！機動六課（前書き）

遅くなりました（スライディング土下座

右京「そのまま地面に足を擦らせてスネの皮がずる向けになっ
てしまえ」

最近、右京が自分に酷い……

右京「こんな作者だが、生暖かく見守ってやってくれ」

グスン……それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第14話！

右京「ちがぁあう！！流れ着いて！ミッドチルダ！第12話！ど
うぞ！」

入隊！機動六課

クラナガン観光の翌日の a m 4 : 5 7 …… 起きると枕元に一つの封筒が置いてあった。

更に、部屋の扉の下にはダンボールが一つ…。

一体、いつ部屋に入られたのだろうか…… まあいいか。

「ふあ……くく…… 起きるにはほんの少し早いな…… 起きるが」

まだ完全に目覚めていない頭を軽く叩き、少しでも目覚めさせる。

因みに、隣にはエリオが眠っている…… まだぐっすりとな。

とりあえず封筒を開けて中身を確認する。

中に入っているのは、俺の管理局員としての隊員証と、クロノ・ハラウンとかいう奴からの紹介文…… 推薦状みたいなものか。

そして、俺の筋書きだ。

「出身世界は第97管理外世界”地球”。まだ未熟だが、将来性は高く、また、機動六課隊長陣とも知り合い。高町教導官に指導してもらおう名目で配属される新人隊員”…… ねえ……」

色々と無理があるんじゃないか？この筋書き。

普通の新人隊員なら、正規の訓練を他の隊員と一緒に受けるもんじ

やないのか？

ていうか、なのはって教導官だったのか……知らなかった。

とまあ色々ツツコミたいところはあるが、軍隊も管理局も知らない俺が言っても仕方ないだろう。

ただな、隊員証の名前がな…

「なんで二月になってんだよ……喜喜だっつの……」

思いつきり”二月 右京”ってなってるんだよな……後ではやてに修正してもらうか。

ダンボールの中には、男性隊員が着ていた制服の上下と、ティアナ達が着ていた訓練着の上下が入っていた。

さて、確認もしたし……

「まずは顔を洗って、歯あ磨いて…さっぱりするか」

いつものように洗面所に行って、いつもいるティアナとたわいない雑談をしてから部屋に帰ってきた。

当然のように、子供2人はまだ寝ている。

今日はちょっと趣向を変えて、レイジングソウルに起こしてもらうことにしよう。

「レイジングソウル、2人を起こしてくれ」

「イエス、マイマスター……2人とも起きなさい。後五秒で起きなければ……バラバラにしてしまいますよ？大体マイマスターと共に寝るなんて羨ましい妬ましい、五秒と言わず今すぐバラバラにしたい気分です。いや、気分と言わずに実行しましょう。ああ、安心して下さい、殺傷設定にしておきますから……マイマスターに抱かれた余韻に浸ったまま逝けることを誇りなさい、それではさようなら」

「おはようございますっっ……！」

「チッ……」

なんという露骨な舌打ち……舌がないのにどうやって舌打ちをしたんだろうか。

というか、レイジングソウルに頼むのはやめておこう……ああ、エリオもキャロもあんなガクブル震えちゃって。

「起きたなら、早く顔洗って歯あ磨いてきなさい。もたもたしてる遅刻するぞ」

「は……はい」

逃げるように部屋から出て行く2人……そんなに怖かったか。

さてと……俺は今の内に訓練着に着替えるのでしょうか。

「嗚呼、流石はマイマスター……素晴らしい肉体美です……無駄な

く引き締まった筋肉が私の視線を花に集まる蝶のように止まらせ……
ああ！なぜ首から外して布団に埋めて枕で蓋をするのですか！？
これでは見えません！！マイマスター！？マイマスターアアア！？」

（No side）

現在AM6：05……いつもの集合場所に集まっていたフォワード
四名は、なのはの隣にいる人物を見て、目を見開いていた。

その人物とは……言わずもがな、訓練着を着た右京である。

右京は慣れない敬礼をして、フォワード達の方をしっかりと見た。

「本日より、この機動六課に配属されました、喜喜 右京三等陸士
であります」

「右京さんはみんなと同じフォワード……ライトニング分隊に所属
することになります」

右京の敬語に違和感を感じるのか、なのはとフォワード達は若干苦笑気味だ。

しかし、次のなのはの言葉でフォワード達は嬉しそうに顔を綻ばせ、
ライトニングの2人は2人でハイタッチをして喜んでいる。

少し前に知っていたことでも、実際に言われるとやはり嬉しいのだろう。

「今日の訓練は右京さんを入れた5人での初めての訓練：右京さん以外は前にやった、ガジェットガジェットの破壊訓練をしてもらいます。難易度も上がって、数も多くなってるから、気をつけてね？」

【はい！】

「了解だ」

元気よく返事をするフォワード達と、すっかり元の口調に戻った右京を見て、なのはは満足げに笑う。

そして六人＋フリードは、訓練場であるバーチャルフィールドへと向かうのだった。

（No side out）

今回の訓練のフィールドは、前回と同じく廃墟。

俺達5人はビルの屋上にて、目標の数と自分達の実力を計算し、どう動くかを考える。

「なのはの説明だと、俺達は20分以内に全40機のガジェットを

全て捕獲、もしくは破壊して全滅させなければならない」

「私達がやった時の五倍の数……しかも、能力は上がっているから以前に比べると難易度は段違い」

「目安としては一人につき八機、破壊が捕獲する計算だな」

情報は大体これくらい。

ガジェットの動きがどれくらい良いのかはまだ分からないが、すぐに分かることだ。

ティアナ達に聞けば、前回は数が少なかったがAMFという技術により、苦戦したとか。

「ふむ……ティアナ、どう動く？」

「右京さん、スバル、エリオは前に出てガジェットを翻弄しながら、私とキャロが要所要所で援護……ですかね」

まあ、そんなところだろうな。

射撃にも援護にも向かない俺を後方に下げる意味もないし。

「俺に異論はない」

「僕もです」

「あたしも」

「私ありません」

「という訳だ。ティアナの考えでいい」

【了解！】

なぜか仕切ってしまった。

…俺、階級的にはティアナとスバルよりも下なんだがな。

くティアナsideく

もうすぐ、右京さんを入れた初めての訓練が始まる。

やることは単純…20分以内にガジェットの全機破壊or捕獲。

しかし、その数は40と多い上に、ガジェットの能力も上がっている。

私達の…私の実力が上がっていても、右京さんが入ったとしても…ちゃんとこなすことが出来るだろうか。

「なに不安がつてんだ？」

「右京さん…」

右京さんは私の左隣に立ってクシャクシャと私の頭を撫でる。

どうやら、顔に出ていたらしい。

「まあ、俺という不安要素があるから、不安になるのは分かるが……」

別に、そういうわけじゃないのだけれど。

「安心しろって。俺達なら出来るさ。俺が暴れて、ティアナが援護……それだけでも勝てる」

「それは楽観的過ぎるんじゃない……」

「事実さ。お前は、お前が思っている以上に強い……俺が保証する」

右京さんはそう言って笑った。

私のことをそこまで評価してくれているなんて思いもしなかった。

だから、私は期待に応える。

「はい……援護は任せて下さい」

「頼むぜ？リーダー」

「はい！」

訓練が始まった。

負けるつもりなんて全くない。

むしろ、なのはさんが驚くぐらいの速さで全機破壊か捕獲する。

「私達なら出来る……行くわよ！クロスミラージュ！！」

「all right」

＼ティアナ side out＼

＼No side＼

「レイジングソウル！セカンドフォーム！」

「スラッシュスタイル」

右京の左右の手甲から二発の薬莢が排出され、手甲と棍が斧へと姿を変える。

そしてそのまま斧を左から横一閃に振るい、一気に3機のガジェットを破壊する。

「でやあああ！！」

右京の頭上をウイングロードを使って走っていたスバルがウイングロードから飛び降り、その勢いのままガジェットに向かって跳び蹴りをして1機破壊。

すぐに前進し、右手に装着されたりボルバーナックルでガジェットに殴りかかり、これも破壊した。

「ヴァリアブル……シュ ト!!」

ティアナはビルの屋上より、多重殻の誘導弾（魔力弾の上に魔力の膜を張る技術。難易度AA）で狙撃を行う。

誘導弾はガジェットのAMFを貫き、4機を一気に撃破した。

「サンダアア……レエエエイジ!!」

エリオはビルとビルを繋ぐ通路の上から飛び降り、魔力変換資質（雷）によって帯電させた槍……ストラダを地面に突き刺す。

すると、エリオの周りに雷が発生して地を走り、2機のガジェットを破壊。

「フリード！ブラストフレア！」

「きゅく〜!!」

キャロもティアナと同じ位置からフリードの放つ火球を強化し、フリードは火球を放つ。

フリードの火球は4機のガジェットに向かって放たれたが、1機を

破壊するも3機に逃げられてしまう。

「アルケミックチェーン!!」

しかし、逃げた先には魔法陣が存在し、そこから無数の鎖が出現、ガジェット3機を捕らえた。

ここまで僅か4分、ガジェットの数は25機にまで減っていた。

「数が多い……なあ!!」

右京が叫びながら斧を振るう。

その一閃はガジェットを1機切り裂き、2機目を破壊しようとするが、逃げられてしまう。

その逃げたガジェットは、エリオの刺突によって破壊された。

「やるじゃねえかエリオ!」

「はい!」

右京に褒められ、エリオは嬉しそうに笑顔を浮かべる。

ふと、右京が前方を向くと、スバルが3機のガジェットを追い掛けている。

ガジェットはゆらゆらと左右に動いているため、スバルはなかなか標的を定められないようだ。

「エリオ、スバルとガジェットを挟み打ちにしろ」

「わかりました！」

エリオは短時間自らの速度を上げる魔法、“ソニックムーブ”を使ってスバルの前方へと先回りする。

右京はそれを見届け、自分もスバル達に向かって走る。

「レイジングソウル！カートリッジロード！」

「ロードカートリッジ」

斧から薬莖が二発排出され、斧の刃が魔力刃で更に巨大化する。

スバル達を確認すれば、挟み打ちが成功し、ガジェットの動きが止まっていた。

「2人共どけえええ！！一撃……ひつさあつ！！」

右京の声を聞いたスバルとエリオはその場から飛び退く。

それと擦れ違うように右京がガジェット3機の至近距離まで……今から使う魔法の射程距離まで入った。

「八花……一閃！！」

横一閃。

魔力刃はAMFをものともせず……否、“AMFごと”ガジェット

を八分割した。

「レイジングソウル！カートリッジロード……！」

「ロードカートリッジ」

更に二発、斧から葉莢が排出される。

右京の前方には5機のガジェットが右京に向かってきていた。

それを見据えながら、右京は刃を空に向けながら斧を振りかぶる。

一度光を失った刃には再び、瑠璃色の魔力刃が輝いた。

「飛べ……！」

「クリティカルブレード」

右京が斧を全力で縦に一閃する。

すると、瑠璃色の魔力刃が斧から離れ、ガジェットに向かって飛んだ。
だ。

飛んだ魔力刃はガジェットを1機破壊するだけに止まったが……

「ティアナあ……！」

「クロスファイアシュート……！」

ビルから飛んできた4つの魔力弾が的確に残りのガジェットを貫き、

破壊した。

ここまで計六分、ガジェットは残り15機。

右京は念話を使っていない為、さっきのティアナを呼ぶ声は恐らく、聞こえてはいなかった。

それでもタイミング魔力弾が飛んできたのは、少ない日数の中で彼ら育んだ”絆”が生んだチームワーク故にだろう。

「まだまだ行くぞ！！エリオ！スバル！止まんなよ！！」

「「おう！！」」

地上では前線三人が休むことなく走り回ってガジェットを追いかけ、時には破壊する。

「キャロ、向こうのガジェットを捕まえられる？」

「はい！アルケミックチェーン！！」

ビルの屋上にいる後衛2人は、前線三人が翻弄し、孤立したガジェットを破壊、もしくは捕獲する。

「（右京さん、右方向にガジェット！）」

「（わかった！！）」

時にはティアナが右京達前線に指示を出し、前線がそれに従って行動する。

それぞれが休むことなく、魔力を使い、体力を使い、ガジェットを破壊していった。

「みんなお疲れ様ー」

あれから数分後、訓練が終わったフォワード達は、なのはから労いの言葉を受けていた。

訓練の結果は、クリアタイム12分49秒、35機を撃墜し、5機を捕獲した。

右京はともかく、フォワード達の成長速度は凄まじいということが分かった。

「みんなスゴいね。ビックリしちゃった」

【ありがとうございます!!】

「なかなか楽しかったな」

こうして、右京が正式に機動六課に入隊して初めての訓練が終わった。

〈No side out〉

時間は一気に飛んで夕方。

書類提出をティアナに教わりながら終わらせた俺は、はやてのいる部隊長室の前にいた。

「はやて、右京だ」

「入ってええよ」

部隊長のお許しが出たところで、部屋に入る。

今回はロックされている、なんてことはなかった。

「邪魔するぞ」

「邪魔するなら帰ってー」

「あいよー…ってなにやらせんた」

はやての言葉にUターンして部屋から出るところだった……危ない危ない。

「あはは、右京さんも結構ノリがええんやな。ほんで、どうしたん？ なんか用事？」

「ああ」

俺ははやての前行き、朝、枕元にあった封筒を差し出す。

因みに、今の俺の服装は普段着だ。

「中に入ってる隊員証を見てみる」

はやては不思議そうに首を傾げたが、すぐに封筒を開けて中身を出した。

中身は俺が見た時と変わらず、俺の隊員証、クロノとかいう奴からの紹介状、俺の隊員としての筋書きが入っていた。

「いや、これ置いたん私やし、中身は知ってるけど………あ」

ほう、部屋の中に入ったのははやてだったのか。

はやては隊員証を持って確認すると、小さく呟いてやってしまったという顔をした。

「……すぐに訂正させてもらっわ」

「なるべく早く頼むわ」

「任しといて」

さて、要件も済んだことだし、俺は部屋から出ることにしよう。

つとその前に……。

「はやて」

「ん？」

俺は入口の前で止まり、はやての方を向き、名を呼ぶ。

はやてがこちらを見たことを確認し、俺は敬礼をする。

「本日から機動六課に配属されることになりました、喜喜 右京三等陸士です。短い期間ではありますが、宜しくお願いします」

「……機動六課部隊長、八神はやて二等空佐です。歓迎しますよ、右京さん」

自分で引き入れたクセに歓迎するも何もないだろう……とは言わない。

これはあくまでも、形式なのだから。

こうして、俺の機動六課……ミッドチルダでの生活は本当の意味で幕を開けたのだった。

入隊！機動六課（後書き）

右京「今回俺が使った魔法の説明だ」

名称：クリティカルブレード

セカンドフォームの八花一閃に使用する魔力刃を飛ばす魔法。

縦、横、斜めの向きで飛ばすことが出来る……分かり易く言うなら、シャーマンキングの葉が使う真空仏つ陀切り。

誘導性は皆無であり、速度もさほど速くないが、魔力刃をそのまま飛ばしているので面積は広く、密集地や密室で真価を発揮する。

しかし、八花一閃のような力（八分割）はないので、突破力は見ただ目ほどなく、威力も見ただ目ほど高くない（これは現時点での右京の魔法全てに言える）。

尚、分類上は射撃魔法ではなく、八花一閃同様に斬撃魔法に該当。

右京「あんまり使えない魔法だな。まあ俺が使える数少ない遠距離魔法なんだが……カートリッジの消費と威力が割に合わないな。魔力が上がれば、見た目通りの威力が見込めるだろう」

行く先は故郷？（前書き）

短いです。

右京「なら長く書く努力をしるよ」

返す言葉もございません……今回は、ちょっと書いてて混乱しました……自分が

右京「あれ？と思うかも知れないが、暖かい目で見えてくれ」

それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第13話！

右京「違う！流れ着いて！ミッドチルダ！第13話！……って合ってる！？」

ふふん

右京「（イラッ）」

行く先は故郷？

「デイベインバスター！！」

「散開！」

【はい！】

なのはの砲撃魔法……デイベインバスターが放たれた瞬間、俺達フオワードは四方に散ることで避ける。

こんな始まり方で済まないが、今は早朝訓練の仕上げである”高町教導官”直々の回避訓練…シュートイベイションをやっている。

訓練を終えて満身創痍（俺以外）の状態でなのはの魔法を10分間避け続けるか、魔法をかくぐってなのはに一撃を当てるという訓練だ。

ティアナの話では、前は術者が操作する誘導弾のみで行ったらしいが……

「アクセルシューター……シュート！！」

誘導弾が俺に向かってきたので、左へ避ける。

「デイベインバスター！！」

「うおおおお！！？」

避けた先には桃色の光が飛んできていた。

俺は、以前したように棍で地面を突き、棒高跳びのように跳んで砲撃魔法を避ける。

そして、その勢いのまま、ビルの中へと入り込んだ。

……とまあこのように誘導弾以外も使っている訳だ。

ステージは廃墟……一番やりやすいんだろうな。

「（右京さん！無事ですか！？）」

「（大丈夫だ、ダメージは受けちゃいない。ティアナ、悪いが、各自の状況を教えてくれ）」

「（わかりました。ちょっと待って下さい）」

ティアナとの念話が一旦切れる。

説明していなかったが、このシュートイベーションという訓練だが、被弾すると初めからやり直しというリスクがある。

例え残り一秒耐えればクリアとなる状況であつても、その一秒の間に被弾すれば、また10分間避けなければならない。

まあ、避け続けるのは性に合わないんだがな。

「（確認しました。私とキャラは一緒に、右京の左斜め向かいのビルにいます。エリオ、スバルもビルの影からなのはさんの隙を窺っ

て……あ、今スバルが」

「（確認した。ティアナはスバルの援護をしてくれないか？）」

「（わかりました）」

再び、ティアナとの念話が切れた。

ビルの外を確認すれば、スバルがウイングロードを駆使してなのはと立ち回っている。

……ように見えたが、よく見てみれば、誘導弾に追い回されて逃げているだけだった。

なのはが誘導弾の操作に集中していると考えたのか、エリオがなのはに突撃するも、それはなのはのプロテクションに防がれてしまった。

「エリオ！？……よかった、被弾は免れたか」

プロテクションに防がれてそのまま誘導弾を受けるかと思ったが、ティアナの魔力弾がエリオに近寄る魔力弾を弾き、エリオはすぐになのはから離れた。

動く誘導弾に精密に当てるとはな……やるじゃねえかティアナ……と内心で誉める。

さて、俺はどう動こうか。

速さだけなら、俺は魔法なしでもエリオより速く動けるが、それは

一直線に限る。」

なのはが地面に立ってればいいのだが、生憎、空中にいる。

もしも攻撃が防がれてしまえば、俺はなすすべがない。

「……考えても仕方ないな。レイジングソウル、セカンドフォーム」

「スラッシュスタイル」

手甲から薬莢が排出され、手甲と棍が斧へと姿を変える。

ものは試した。

「（キャロ。ティアナ）」

「（はい）」

「（どうしました？右京さん）」

「（八花一閃を試す。突っ込むからティアナは援護を、キャロは突っ込んだ俺の攻撃が”成功しようがしまいが”鎖で捕まえて引っ張ってくれ）」

「（（わかりました））」

2人の念話による返事に頷き、俺はビルから飛び降りる。

すぐに誘導弾が飛んできたが、ティアナが魔力弾で弾いてくれたので、安全に着地できた。

そして上空のなのはを見据え、斧を居合いのよつに構える。

「レイジングソウル、カートリッジロード」

「ロードカートリッジ」

斧から二発の薬莖が排出され、斧の刃に魔力刃が発生し、刃を巨大化させる。

右足で地面を強く踏みしめ、力を溜める。

「八花……」

ドンツという音と共に、跳躍する為に右足で踏みつけた地面がはぜる。

なのはは一瞬、目を見開くが、すぐにプロテクションを張った。

すでになのはは俺の距離……目の前だった。

「一閃!!」

全力で斧を左から右へと横一閃に振るう。

しかし、振り切ることは出来ず……魔力刃はプロテクションにぶつかり、光の火花を散らしていた。

それはつまり……

「……どんだけかてえんだよ」

「それでも隊長だよ？右京さん」

俺の八花一閃の魔力刃が、1mmたりとも通っていないことを意味する。

軽く話しているが、俺は冷や汗をかき、なのははニコニコと笑顔を浮かべている。

空中にいるため、これ以上力を込めることができずに俺の体は落下を始めた。

そこになのは誘導弾が飛んでくるが……

「アルケミックチェーン……キャロだね」

「ご明察」

俺の後ろから伸びてきた鎖が俺に巻きつき、後方に引っ張った。

誘導弾は空を通り過ぎ、俺はビルの中へと引きずり込まれた。

そこにはキャロとティアナがいた。

「ナイス援護だ二人とも」

「えへへ……」

「ありがとうございます。でも……」

「ああ、八花一閃は利かなかった……キャラの強化をかければまだわからないが……二度も効かないだろうな」

今、こうして俺達が話し合うことが出来るのは、満身創痍の中でスバルとエリオの二人がなのはの注意を引き付けてくれているからだ。しかし、二人の限界は近いだろう……早くケリをつけなければ。

「……ティアナ、クロスファイアは最大何発同時に撃てる？」

「そうですね……六発ですね。それ以上は精度が落ちて誤射する可能性があります」

「そうか……充分だな」

「「え？」」

俺の言葉に疑問の声を上げるティアナとキャラ。

「レイジングソウル……サードフォルム」

「ガンズスタイル」

「スバルside」

右京さんがなのはさんに突っ込んで、前にティアナ達を倒した斬撃魔法を使った。

けれど、右京さんの魔法はなのはさんのプロテクションを斬り裂けなかった。

なのはさん凄い！と思いながらも右京さんの魔法が通じなかったことに愕然とする。

ブーストしたプロテクション二枚をあっさり切り裂いた魔法もなのはさんの前には通じない……前みたいにエリオが突っ込んでも多分通じない。

「（スバル。エリオ。聞こえるか？）」

「（お兄さん？）」

「（右京さん？聞こえるよ）」

そんなことを考えていると右京さんから念話が来た。

正直、今も私とエリオはなのはさんの誘導弾から逃げている最中なので手短にしてほしい。

「（今から、俺とティアナでなのはを攻撃する。だから、ビルかどっかに隠れる。当たっても知らないからな）」

「（（りょ…了解！））」

ティアナと二人で……一体何をするつもりなんだろう？

そう考えながらも私とエリオはそれぞれ別のビルの中に隠れた。

くスバルsideく

くなのはsideく

みんな隠れてしまった。

魔力反応だけで誘導弾を追わせることも出来ることは出来るけど、その場合は若干精度が落ちてしまう。

どうしようか……と考えた時、ビルの屋上に右京さん、ティアナ、キャロの三人を見つけた。

私はすぐに誘導弾を三人に向けて操作する。

そして、誘導弾が三人に当たる瞬間……三人の姿が消えた。

「やっぱり幻影……本体は……！」

下から一発の魔力弾が飛んできたけど、余裕を持って避ける。

幻影を囷に別方向から攻撃……良い手だけど、攻撃の手が足りない。

魔力弾が飛んできた方向…下を見ると、三人がいた。

「デイベイン…バスター!!」

すぐに三人に向かって砲撃魔法を放つ。

魔法は三人に直撃し、三人の姿を煙で隠した。

「被弾…それじゃあ、また初めから」

「十時の方向に魔力反応です」

「え？」

レイジングハートの言った方向を見ると、そこには既に魔力弾を展開しているティアナと右京さんの姿。

キヤロはその後ろで…恐らく二人を強化している。

三人がいる場所は…私がさっき誘導弾を飛ばした幻影のあった場所だった。

つまり……

「下にいた三人も幻影……」
シルエット

「クロスファイアシュート……」

右京さんとティアナの声が聞こえた瞬間、私はプロテクションを張

った。

言い方は悪いけれど、ティアナはともかく右京さんの放つクロスファイアシュートの威力はたかが知れている。

だから、充分耐えられる。

「バルカンシフト……」

瞬間、二人から魔力弾が……違う、ティアナから魔力弾が放たれた。何発も何十発も五個ある魔力球から放たれる。

やがて、魔力弾が止まったと思った瞬間、今度は瑠璃色の魔力弾が連続で飛んできた……右京さんのものだ。

多分、ティアナのクロスファイアシュートを見様見真似で使っているんだと思う。

魔力弾の構成は甘く、魔力球も2つしかない。

魔力弾の速度自体は速い……が、威力は全くと言っていいほどない。やがて、魔力弾が止まると間髪入れずにオレンジの魔力弾が飛んでくる。

「バルカンシフト……なるほどね」

動けない。

少しでもプロテクションを解いたら被弾してしまう。

このままでは、制限時間が来てしまう。

でも、こんな速度で撃ち続ければ先に魔力が尽きる。

その時を狙えば……

「スバル！！エリオ！！いけえ！！」

「「でやああああ！！」」

「っ！？」

右京さんの声と共に、左右からスバルとエリオの2人が突撃してきた。

スバルはウイングロードを使い、自分とエリオの足場も確保している。

このままでは被弾する……

「だけど……まだ！」

私は左右にもプロテクションを張り、二人の攻撃を受け止める。

……ちょっとムキになってるね、私。

よし、魔力弾が止まった。

左右にいた二人も、レイジングハートを振ってウイングロードから落とす。

「「うわっ!?!」」

「残念でした!?!デイベイイイイン……」

レイジングハートを右京さん達に向け、魔力をチャージ。

放つのは、私の十八番。

これで、また初めからだよ!!

「バス……いたっ!?!」

撃つ瞬間、私の頭に何かが当たった。

それは……私がついさつき避けた、ティアナの魔力弾だった。

「なのはside out」

「じゃあ、あの魔力弾は誘導弾だったんだ……」

結果から言えば、俺達はなのはに一撃当てることに成功した。

手順はまず、俺とティアナとキャロのいる場所の前にティアナの幻影を配置。

この時、同時に地面にも幻影を配置し、気付かれないようにビルの影に隠しながら誘導弾を飛ばす。

そしてなのはがビルの屋上の幻影を消したら、あたかも地面の幻影が撃ったように下から誘導弾をなのはに向かわせる。

避けられた誘導弾はそのまま上空で待機させ、俺とティアナがキャロにブーストで補助されたスピード重視のクロスファイアを交代で撃ち続けてなのはを足止め。

足止めをして少ししてからスバルとエリオに突撃させて更に動けなくする。

そして、さっきの誘導弾が完全に意識の外へ行つたのを見計らって誘導弾を落とす。

これが作戦の大体の内容だな。

かなり穴だらけで博打要素があつたが。

まず、先に地面の幻影が先に見つかったら？

ビル屋上の幻影を消し、そのままバルカンシフト。

誘導弾が消されたら？

バルカンシフトで時間を稼ぐしかないな。

バルカンシフトを避けられたら？

広範囲にバラまいて、プロテクションを誘発させるしかない。

誘発出来なかったら、作戦終了。

スバルとエリオの攻撃が迎撃されたら？

バルカンシフトを中断し、作戦を練り直すしかない。

まあ、三枚のプロテクション発動、タイムリミットから来る焦り、一撃足りとも受けてはいけない条件、とここまで揃っていれば、誘導弾による迎撃もないと考えたがドンピシャだったな。

誘導弾に気付かれて消されたら？

ごり押し、もしくは作戦を練り直す。

とまあこんな感じで穴だらけな作戦だった訳だ。

「という感じだな」

「あはは……でもちゃんと私に一撃与えたし、早朝訓練終了！みんなお疲れ様」

【お疲れ様でした！！】

因みに、あの訓練は十分内に起きた出来事だ。

思ったよりも時間が経っていないからびっくりしたな。

「あ、おったおった」

「はやてちゃん？」

そんなことを考えていると、なぜかはやてがやってきた。

一体何の用だろうか。

「出張任務が入ってな、みんなに報告に来たんよ」

「報告なら、通信やメールでいいだろうに」

「出張任務って言ったよね？どこに行くの？」

俺の言葉に苦笑しながらもなのははやてに続きを促す。

そして、紡がれたはやての言葉は、俺を動揺させるには充分だった。

「出張先は第97管理外世界”地球”……私となのはちゃんと……
右京さんの故郷や」

行く先は故郷？（後書き）

右京「今回使った魔法の説明だ」

名称：クロスファイアシュート

単純に、ティアナのクロスファイアシュートを大幅に劣化させたものの。

見様見真似でレイジングソウルが模倣してプログラムを構成。

威力はほとんどないものの、射速だけならばティアナのクロスファイアシュートに匹敵する。

名称：クロスファイアシュート”バルカンシフト”

ティアナと二人で行うシフト。

特に特殊な行動をする訳ではなく、ただ、二人でクロスファイアシュートを交互に放つというもの。

交互に放つという行動のおかげで連写速度は上がり、魔力の続く限り、途切れない弾幕を張ることが出来る。

アニメではなのもクロスファイアシュートを撃ってたから、なのとは二人でも可能……か？

右京「今回はこんなところだな……サードフォームの説明は、デバ
イスの形が出てないからまた今度だな。何か質問があれば、いつで
も俺が答えるぜ」

久しぶりの帰郷？（前書き）

更に修正しました。

短く、グダグダ、支離滅裂です。

今回ばかりは流石に低クオリティとしか言えません。

右京「YouTubeはPCの音声出力デバイスがどうにかなくて音声が出ないしな。ネットで調べてサウンドステージ探したり、とある作品を参考にさせて貰ったりしてるのにな」

自分なりには頑張っているんですが……それでは流れ着いて！ミッドチルダ！

右京「第14話、スタートだ」

久しぶりの帰郷？

ここは転送ポートとやらへ向かうヘリの中。

地球に向かうのは俺達フォワード陣となのは達隊長陣＋リイン＆シヤマルだ。

当然、部隊長であるはやても行くのだが……一番偉い奴が堂々と部隊を空けるってのはどういうことだ？

まあ本人が問題ないって言うてるから気にしないでおう。

因みにこの出張任務の内容だが……ロストログアの反応が地球の海鳴市という場所で発見されたから、その回収だそうだ。

しかもその海鳴市という場所のはとはやてが住んでいた場所らしい。

「で、リインはどうしてでっかくなってるんだ？」

「リインはこのくらいまで大きくなれるです！これがアウトフレーム・フルサイズです！」

リインはなぜかキャロとエリオくらいの大きさ……普通の少女のサイズになっている。

そして、なぜか俺の膝の上に座っている。

「それは分かったが、なぜ俺の膝の上に座る？」

「座り心地が良さそうで…実際に良くて……ダメですか？」

「いんや……転送ポートにつくまでな」

「はいです」

嬉しそうに返事をしたリインの頭を撫でる。

…娘とのんびりする父親というのはこういう感じだろうか。

へりの中じゃなく、縁側や、木陰の中で木にもたれかかりながらすれば、最高にのんびり出来るだろうな。

「……えい」

トスツという軽い衝撃が左肩に来る。

チラリと横目で確認すると……なのはが頭を俺の左肩に乗せていた。

「……何してる？」

「にやはは……ダメ？」

「…転送ポートまでな」

「うん」

なのはは笑顔で返事をする、そのまま体を預けてきた。

…家族というのはこういう感じなのだろうか。

そう考えながら、俺は小さく笑みを浮かべていた。

「うう……いいな……リイン曹長……」

「帰る時にしてもらいなよ」

「くっ……私はなぜ右京さんの隣に座らなかったのかしら……」

「ティ、ティア？なんか黒いよ？」

「…私も帰りにしてもらおかな……大体、リインやったら、なのはちゃんのポジションは私……」

「は、はやてちゃん？」

「……………」

「ヴィータ、なぜリインを見ている？」

「キャラがエリオが右京さんの膝の上なら、私がなのはの位置……いいかも」

「私にも身体があれば、一晚中……いや、年がら年中マイマスターと共に……」

どれが誰のセリフかは推して知るべし。

俺は知らん。

しばらくして転送ポートに着いた俺達ははやて、ヴィータ、シグナム、シャマル等と別れ、地球へと転送された。

視界が一瞬光に覆い尽くされ、次に目を開くとそこには、緑に囲まれた湖があつた。

「ここが…地球…」

「隊長達と右京さんの故郷…」

フォワード達はみんな、思い思いの感想を呟いて感動の声を上げている。

……もし、ここが…この世界が本当に俺の元いた世界なら、俺は六課から出て行く。

元々、そういう約束だからだ。

「でも……違うんだよなあ……」

違和感。

ただその一言に限る。

ここは地球だ……だがこの違和感は何だろうか。

馴染めない……なんというか、疎外感というか……孤独感というのか。

はつきりと分かることは、この地球は俺がいた地球ではない。

この違和感が、疎外感が、孤独感が……寂しさが、俺がいた地球^{セカイ}ではないのだと言っている。

「……来るんじゃないかったな」

誰にも聞こえないように、俺は呟く。

俺の世界は……一体どこにあるのだろうか。

暗い思考を振り払うと、話は現地協力者が来る……というところだった。

なのはが言うには、俺も知っている人物らしい。

一体誰だろうか……などと考えていると、俺達の前に一台の車が止まった。

車から出てきたのは、2人の女性……なんだが、この2人、なんか

見覚えが……。

「あーっ!!」

「あっ!!」

「ん？」

女性2人が俺を見た瞬間、金髪の女性が指を指して、紫色の髪の女性が自らの口を手で隠しながら驚愕の声を上げた。

一瞬聞いた声……見覚えのある顔と髪色、聞き覚えのある声……俺も知っている人物……あ。

「右京さんじゃない!!」

「ホントだ…右京さんだ…」

「ああ、すずかとアリスか」

「アリサよ!!アリサ・バニングス!!」

そうだ、二回目の夢の時に見たなのはの友達2人だ。

なのはが19ということは当然、2人も19ということだ。

というか……。

「よく覚えてたな」

「まあね」

「なのはちゃんが毎日のように右京さんに会いたいって言うてたから」

「すずかちゃん!!それ以上はダメえ!!」

「ハア…ハア…と、という訳で、現地協力者の」

「アリサ・バニングスです」

「月村すずかです」

【よろしくお願いします!】

「よろしくな」

一悶着あったが、ようやく互いの自己紹介を終えた俺達。

この場所…湖畔のコテージのような場所は、この2人が提供してくれたらしい。

因みに、別行動のはやて達には、すずかの家のメイドが迎えに行っただとか……。

俺達はアリサ達に荷物を預かってもらい、任務の調査をスターズ、ライトニングに分かれて開始することになった。

対象のロストログは誰かが所持しているのか、単独で動いているのかは不明だが、移動している為、探索範囲は海鳴市全域。

だから、さっきも言ったように二手に別れて探すことになったのだが……。

「ライトニングとスターズで別れてって言ったのに、なぜ、ライトニングの俺がスターズのお前らと探索してるんだ？」

「それはね、右京さんにサーチャーの設置の仕方を教える為だよ」

と、高町教導官殿が笑顔で言いやがった。

…確かに、俺はサーチャーとやらの設置の仕方は知らないし、そういうことならスターズにいた方が都合がいいのだが……。

「なぜくつつく？」

「この方が教えやすいかなって。サーチャーはね……」

なぜか俺の右手に腕を絡ませながらサーチャーとやらの設置の仕方を説明するのは。

そして、俺の左手を繋ぎながらサーチャーを設置するライン。

因みに、俺の魔力ではサーチャー一つ設置するのにもやたら時間がかかり、疲労もかなりのものだ。

「ティア！！アイス屋だよアイス屋！！買いに行こう？」

「今は任務中でしょうが！！だいたいこの世界のお金持っていないでしょ」

「そうだった……うう…アイス…」

後ろからこんな会話が聞こえてきたが、今はサーチャーの説明を聞いているため、気にしないでおこう。

2人とも、やることはやってるしな。

「右京さん聞いてる？」

「聞いているよ」

ま、頑張って設置していきますか。

時間帯はもう夕方。

俺達は粗方サーチャーを設置し終えたところだ。

途中ではやてから、聖王教会からの情報でロストログアは運搬中に紛失したもので事件性はないが、高価なもので無傷で回収

して欲しいという連絡がきたが。

ライトニング側にも念話を飛ばしたが、丁度サーチャーの設置を終えたところらしい。

「（ロングアーチ（拠点）に帰る前に、何か買って帰ろうか？）」「

「（ん）大丈夫やと思うよ。晩御飯は現地協力者の方々が用意してくれるらしいし」

「（そっか。でも手ぶらで帰るのも何かなあ…）」

なのはが念話でそう言った後、携帯を取り出してどこかへと連絡しだした。

ていつか携帯持ってたのか。

「あ、お母さん？」

どうやら連絡相手は母親だったようだ。

「なのはさんのお母さん！？」

「いたのね…」

「当たり前だろうが」

この2人、最近ポケ側になってきてないか？

しかしスバルよ、なんでそんなに驚愕しているんだ？

なのはに母親がいたらおかしいのか？

「うん…うん…じゃあ後でね。…さてと…じゃあ行こっか」

「どこにだ？」

「私の実家。喫茶店なんだ」

「「喫茶店！？」」

「「喫茶翠屋”です！”」

いや、名前だけ言われてもわからんて。

ていうか、なのはの実家って喫茶店だったのか。

「それじゃ、なのはのご両親に挨拶しに行くか」

「え！？そんな、挨拶だなんて……」

「なのはの部下ですってな」

「ガクッ……」

【あはは……】

やってきましたなのはの実家…喫茶翠屋。

そして、この店の前にいる男女の2人組が…。

「ようこそ、喫茶翠屋へ。僕がなのはの父親の高町 士郎だよ」

「なのはの母親の高町 桃子です」

（（父親！？母親！？えっ！？若っ！？）（）

え、これがご両親？

とんでもなく若いんだが……兄、姉でも充分通じる見た目だぞ。

不意に、父親と目が合った。

「…君、なのはとどういう関係かな？」

なぜだろうか…笑顔なのに凄まじいほどの怒気を感じる。

「部下と上司の関係ですが？」

「ならばなぜ、腕を組んでいるのかね？」

いや、なのはが勝手に抱きついていてだけで、俺の意志じゃないんだがな。

「本人に聞いて下さい」

「なのは？」

「え？好きな人と腕を組みたいと思うのは普通でしょ？」

ピシッと何かに罅が入る音がした気がした。

なのは父から溢れる怒気が増し、リインは涙目になり、ティアナとスバルは距離を取った。

「ふ…ふふ…そうか…君はなのはの彼氏なのか…」

どうしてそうなった。

なのはが言ったのは好きという言葉であり、彼氏彼女の話はしていない筈なんだが。

「いや、彼氏ではないです」

「見苦しいな…なのはがそう言ったじゃないか」

言ってねえよ。

しかも見苦しいって…言い訳してないんだが。

「だから……」

「まだ言い訳をするのか！宜しいならば戦闘だ！！なのはの彼氏だと言っのなら、この僕を倒してから宣言しろ！！」

この親めんどくせええええ!!

しかも言ってることメチャクチャじゃねえか!!

「士郎さん」

「止めるな桃子!僕は今からこの輩を」

「士郎さん」

「だから止め……るな……」

恐る恐るなのは父が背後を振り返ると、そこにはニコニコと笑顔を浮かべているのは母。

なのに、なのは父はガタガタと震えている。

「ちょっと向こうで……お話ししましょうか」

「いや、桃子!僕にはこの輩を……待て!いや、待って下さい!あ……っ……」

なのは父はなのは母に引きずられ、店の裏へと姿を消した。

俺達(なのはを除く)はその光景をただ立ち尽くして見ていることしか出来なかった。

「ということがあった」

「あはは……大変だったみたいだね」

今俺達がいるのはフェイトの運転している車の中だ。

そして今、丁度喫茶翠屋で起きた出来事を話し終えたところだ。

因みに、俺はフェイトの隣の助手席に座り、俺の膝の上にリインが座り、後部座席になのは、ティアナ、スバルの三人が座っている。

……警察に見つかったら、定員オーバーでアウトだな。

「右京さん……ごめんね。迷惑かけて……」

「別に迷惑じゃないが……あんまり、腕を組んだりするのは控えてくれ。あらぬ誤解を招くぞ」

「右京さんなら私はいいよ？」

「付き合ってる訳じゃないからダメだ。控えなさい」

はい……と元気なさそうに返事をするのはと苦笑する俺達。

ここまで想ってくれてるのは嬉しいんだが……一緒に居たいと言った奴がいるんだよね……俺には。

そう考えると、なぜか違和感が増した気がした。

違和感が大きくなったと同時に疎外感、孤独感も増し、妙な寂しさを感じる。

なぜこんなにも、俺は”独り”だと感じるのだろうか。

すぐ隣を見ればフェイトがいて。

俺の膝の上にはリインがいて温もりも感じて。

バックミラーにはちゃんと三人も映っていて、振り返れば姿があるのに。

「？なあに？右京さん」

「いや…なんでもない」

俺に笑顔を向けるなのはがいるというのに。

俺の中の違和感は。疎外感は。孤独感は。…寂しさは消えてくれない。

それらの感覚が妙に俺を不安にさせ、確信させた。

やはり、この地球は俺のいた地球^{セカイ}ではないのだと。

そんな不安を抱えたまま、俺はフェイト達と拠点に向かうのだった。

久しぶりの帰郷？（後書き）

というわけで、なのは達の世界は右京のいた世界ではありませんでした。

次回は食事に銭湯にロストログアに……書ききれるかな……

不安だらけですが、頑張ります（*。。（ノ

任務の終わり（前書き）

右京のCVって誰だろうね

右京「あー…誰だろうな」

たまにプロフィールにcv・とか書いてあるのを見て気になった疑問。

という訳で、読者の皆様の右京のイメージcvは誰か聞いてみようかと

右京「俺もそれは気になるな。因みに、お前は誰のつもりなんだ？」

……………それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第15話！

右京「考えてなかったのか……まあいいか。任務の終わり、スタートだ」

任務の終わり

あれから拠点に戻った俺達はライトニングとはやて達、現地協力者達と合流し、晩飯を食べようとしていた。

その前に……。

「どちら様？」

「君が右京さんだね。なのはの姉の高町 美由希です」

「クロノの妻のエイミー・ハラウンです」

「あたしはアルフ。フェイトの使い魔だよ」

「喜喜 右京だ。宜しくな」

しかし、なのはの姉か……あまり似ていない気がするな。

因みに、エイミーは二児の母で、アルフは普段はハラウン家で家事手伝いをしているらしい。

エリオとキャロも小さいときにアルフに遊んでもらったらしい……見た目はエリオ達よりも年下に見えるんだがな。

そして始まる晩飯……バーベキューだから、大勢で食うにはいいな。

「はい、右京さん。追加の皿や」

「悪いなはやて」

はやてから追加の材料が乗った皿を受け取り、焼いていく。

追加が早い気がするが……仕方ないんだ。

「スバル！あんたお肉食べ過ぎ！！」

「だって美味しいんだも……ああっ！私の育てたお肉が！！」

「甘いぜスバル……バーベキューは戦場だ！油断すると命取り（と書いて肉が食えなくと読む）なるぜ」

「ならば、貴様の肉……私が頂く！」

「あ！てめっ！シグナム！！」

「はいエリオ、キャロ。たくさん食べてね？」

「ありがとうございます！フェイトさん」

「ありがとうございます！はい、フリード」

「きゅく」

「肉」

いやはや、みんな元気なこった。

スターズは（１人ライトニングが混じっているが）バーベキュー戦

争をしている。

ライトニング・インアルフは一家団欒（フリードは荷物に混じっていた）をしている。

俺とはやてはあまりに食材の消費が早いので焼く専門になっている。

「で、右京さんとは進展したの？」

「お姉ちゃん！？」

「してないわね、この様子じゃ」

「私がアプローチしてみようかな……右京さん結構カッコいいし……
……なんだか落ち着くし」

「だ、ダメダメー!!」

なのは達はガールズトークと……丸聞こえだから、俺がいないところであってほしいな。

にしても、シャマルの姿が見えないな……一体どこに行ったんだか。

「はやて。焼くのは俺がするから、食っとけ」

「ええって。私も手伝うよ」

「お兄さんとはやてちゃんの分は、ラインが確保してるです」

「そうか、そいつは安心だな」

「ありがとうなリン」

「えへへ」

俺とはやてが交互にリンの頭を撫でると、リンは嬉しそうに顔を綻ばせた。

…こついうのも、家族の団欒というのだろうか…家族じゃないが。

「あ、右京さん」

「ん？」

そんな感じで和んでいると、シャルに声をかけられた。

シャルの手には……あー……うーむ……。

「シャル……何を持っている？」

「野菜炒めを作ってみたんです　一口いかがですか？」

【シャルの料理！？】

野菜炒めだったのか……その皿の上の形容しがたいものは。

ていうか、はやて達のその反応はなんなんだ？

「まあ、せっかくだしいただこうかな」

「はい」

「あかん！右京さんそれはあかん！！」

「？なにがダメなんだ？確かに見た目は悪いが、せっかくシャマルが作ったんだ。なら、食べないと勿体無いだろう？」

と言って俺はシャマルの作った野菜炒めへと、シャマルが渡してくれたスプーンを伸ばす。

……野菜炒めってスプーンを使う料理だったか？と思いながら、俺はそれを口へと運んだ。

「ふむ、見た目は流動食で食感はニチャニチャ、甘すぎて辛すぎて食材の味を全て殺し、何ともいえない嫌悪感が体中を巡りぐふっ…

…」

「キヤアアア！？お兄さん！？お兄さん！？」

「シャマル！！あんた右京さんに野菜炒めと偽って何食べさせたんや！？？」

「偽ってません！！右京さん大丈夫ですか！？……ああ！脈が弱くなってる！」

「ふざけてんのか？ふざけてんだろ？お？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

数分生死の境をさまよったがなんとか復活した俺はシャルを正座させ、一時間ほど説教していた。

なにがどうなったら野菜炒めがあんな……マズい、また気分が……。

「右京さん？また顔色が悪くなってきたよ？」

「だ…大丈夫だ…」

いや、大丈夫ではないんだが。

甘い料理や辛い料理、見た目が酷い料理は食ったことがあるが、あれはまさに、未知の物体Xだった。

「しかし、悪いな……片付けを手伝えなくて」

「ええてええて」

料理のダメージとシャルへの説教で動けなかった俺は、晩飯の片付けを手伝えなかった。

”片付けるまでが料理”が俺のポリシーなんだがな……。

晩飯を片付けた後は、昼間に設置したサーチャーを監視しながら、風呂に入ろうということになった。

しかし、残念ながらこのコテージには風呂がないとアリサから言われた。

「仕方ないな……近場の湖で水浴びするか」

「さ、流石に風邪引いちゃうよ？」

確かにフェイトの言うとおり、この肌寒い時期に水浴びは危険だ。となると、風呂無しかねえ…。

「そうすると……」

「やっぱり」

「あそこですかね？」

「あそこでしょう」

なにやらエイミィ達がお互いに納得しあっていた。

話が分からない俺達フォワード達はみんな、首を傾げて不思議そうにしていた。

「さて、機動六課一同は着替えを用意して銭湯準備！これより、市内のスーパー銭湯に向かいます！」

「スーパー……」

「セントウ……?」

というわけでやってきたのはスーパー銭湯こと、海鳴スパラクーア。
まるでスパリゾートのような広々とした銭湯らしい。

「いらっしやいませー、海鳴スパラクーアへようこそ！団体様ですか？」

「えっと……大人13人と子供4人です」

「エリオとキャロとリンとアルフだな。ヴィータは子供じゃないのか？」

「あたしは大人だ!!」

ふむ、ヴィータは大人だったのか……やはり人は見かけによらないもんだな。

「悪かったよ」

「分かればいい」

謝ったら機嫌を直してくれたようだ。

いざ入場というところで、エリオが男湯と女湯で分かれていたことになぜか安堵していた。

しかし、安心したエリオに向かってキャロが無垢な笑顔を浮かべて言い放った。

「広いお風呂だって。エリオ君、一緒に入ろう?」

「えっ!? ぼ、僕はその…一応男の子だし……」

「でも、あそこ見てみて?」

キャロの指差した先には入浴施設の利用規定があり、そこにはある一文が書かれていた。

”女湯への男児入浴は、11歳以下のお子様のみでお願いします”

……エリオは10歳だから、女湯へ入ることは出来る。

キャロは純粹にエリオと一緒に入りたいだけなんだろうな。

「せっかくだし、一緒に入ろうよ」

「フェイトさん!？」

フェイトは息子と一緒に入りたいだけ……と。

エリオは顔真っ赤だな……思春期真っ盛りだな。

エリオは他の女性陣がいるから……と言うも、その女性陣からOKが

出てしまった為、逃げ場がなくなってしまった。

さあ、どうする？エリオクン。

「あ、あの…お気持ちは非常に嬉しいんですが…ほ、ほら！僕が女湯に行くとお兄さんが1人になっちゃいますし！」

「ん？俺は別に構わんが」

「お兄さん…」

うーん、そろそろエリオが泣きそうだな。

仕方ないな、助け舟を出そうしよう。

「冗談だよ冗談。確かに1人は寂しいからな……フェイト、キャロ、悪いがエリオは借りて行くぞ」

「むっ…仕方ないね」

「はい…」

「ほっ…」

というわけでエリオは俺と共に男湯入ることとなった。

今は脱衣場にて、服を脱ぎ終えてタオルを腰に巻いたところだ。

因みに、レイジングソウルは俺が脱いでいると念話でハアハア言っていたので脱衣場のロッカーの中にぶち込んでおいた。

「お兄ちゃん！エリオ君！」

「お兄さん！エリオ！」

……おかしいな、今、ここにいるハズのない声が聞こえたんだが。

そう考えながら、エリオと2人で恐る恐る声のした方を向く。

「キャ、キャ、キャロ！？リ、リン曹長！？」

「こーら、こっちは男湯だぞ？」

そこにいたのはエリオの言った通り、体に長いタオルを巻いたキャロとリンがいた。

……今頃フェイト、泣いてるんじゃないだろうか。

「女の子も11歳以下はこっちに入っていていいんですって」

「だから一緒に入ります」

というわけでなぜか4人で入ることになった。

中はかなり広く、客の姿も多い。

俺達は目についた風呂に向かい、かけ湯をしてから入る。

「ふう……いい湯だ」

「です」

「お兄ちゃん、エリオ君、リイン曹長。後で洗いつこしましょう」

「え……その……」

エリオの顔はまだ赤いな……まあ思春期の少年の女子2人と風呂に入るのは、いささか刺激が強いだろうな。

しかし、洗いつこか……藍蘭島に流れ着いた日に、あいつらとしたなあ。

懐かしい思い出だ。

「んじゃ、洗いつこしますか」

「はい」

「はい……」

因みに、洗いつこの順番はリイン 俺 キャロ エリオ、という順番になった。

終始エリオの顔が赤かったのは、想像に難しくないだろう。

くなのはsideく

「で、あんた達は右京さんのことどう思ってるの？」

始まりはアリサちゃんの一言。

それを聞いた私は、機動六課の面々に視線を向ける。

すずかちゃん、お姉ちゃんやエイミィさん、アルフも興味津々なようだ。

「そうやな……かなり優良物件やと私は思うよ。家事出来るし、面倒見いいし、器量もよし。リインもかなり懐いてるし、人当たりもええしな。私個人としては……お兄ちゃんって感じやな」

む、はやてちゃん……もしかしてライバル？

でも、お兄ちゃんって言うてるし……油断しちゃダメ、恋は戦争なの。

「私は……まだよく分からないかな。でも、右京さんがエリオとキヤロと一緒にいるのを見ると安心するんだ……父親ってあんな感じかなって。そうなると私と右京さんは……えへっ……」

何を想像したのか、フェイトちゃんは両頬に手を当てて顔を赤くし

た。

フェイトちゃんはライバル認定なの。

「あたしはフォワード達を纏める年長者くらいにしか思っていないぞ」

「嘘はダメよヴィータちゃん。ヘリの時に右京さんの膝の上に座るリンちゃんにあんなに羨ましそうな熱い視線を送っていたくせに」

「お、送ってねえ!!」

ふふふ、私知ってるんだよ？ヴィータちゃん。

ヘリの時も、エリオとキャラが右京さんに頭を撫でてもらってる時にも羨ましそうな熱い視線を送っていることを。

「戦いたい相手だな」

腕を組んで凜つと言い放ったのはシグナムさん。

そういえば、シグナムさんは右京さんと戦いたいって前から言ってたね……帰ったら模擬戦組もう。

「右京さんいい人ですよねー」

うん、スバルは素直な子だよね本当に。

これは心配ないかな。

「右京さんは……そうですね……頼れる男性ですかね」

そういえば、最近のティアナは心なしか、余裕がある気がする。

突撃思考もなりを潜めて、援護に徹するようになったし………確実に決められるような時に素早く鋭い一撃を入れるようになった。

むう………これは、強敵かな。

「なのはは……言わなくてもいいわ、分かるから」

「アリサちゃん酷い！」

くなのは side outく

俺は今、露天風呂にいる。

エリオとキャラは子供用の露天風呂があつたので、絆を深めるべく、そこに二人で入れた。

リインはどこに行ったって？

まず言っておくと、この露天風呂は座れば肩が浸かるぐらいの浅さであり、俺はあぐらをかいて座っている。

なにが言いたいかと言うとだな…。

「いいお湯ですね」

「そうだな」

リインは俺のあぐらの上に座り、一緒に入っているということだ。

羞恥心はないのかねえ……羞恥心がない女の子の相手は馴れてるがな……藍蘭島で。

気分的には、娘と風呂に入る父親か、妹と入る兄だな。

「全くもう……アリサちゃんてば酷いんだから」

「あはは、なのはちゃんが右京さん好きなのは周知の事実やからな」

「そうだね」

……今、誰の声が聞こえた？

激しく聞き覚えのある声が聞こえたんだが……よし、露天風呂から出よう……しまった、リインがいるから動けん。

そうこうしていると湯気の向こうから三人分の人影が近づいてきて……。

【……………】

「なるほど、ここは混浴だったのか」

「そ、そうみたいだね」

「あ、あはは……」

「……………」

「はやてちゃん達、顔真つ赤です」

露天風呂に入ってきたのは、なのは、フェイト、はやての三人だった。

俺達は互いに背中を向けて、互いを見ないようにしている。

リインはなのは達の方に行った。

入ってきた直後は悲鳴を上げられそうになったが、なのはが二人の口を塞いだので、悲鳴を上げられずに済んだ。

で、今に至る……言っておくが、三人はちゃんとタオルを体に巻いていたから、裸は見えていない。

まあ、見たいとも思わないんだが。

「…………さて、上がるか」

「なあ右京さん？もうちょい反応してくれてもええんちゃう？」

「何をどう反応しろと？」

「こっ……私らを見て慌てるとか赤くなるとか……」

慌てはしたがな……流石に、こいつらまでキャロとリインみたいに男湯に来たのかと焦った。

恥ずかしくないのか？と言われれば、恥ずかしくないと言ってやろう。

こっ言っでは失礼だが……女性の裸は見慣れてるし、元々そう言った感情は薄いしな。

「悪いが、別にどうとも思わないな。恥ずかしくないのか？とは思うが……どうなんだ？」

「「恥ずかしいです……」」

「でも、どうとも思わないっていうのは……ちょっと悔しいな」

そう言ってなのは、後ろから俺に抱きついてきた。

背中には何やら柔らかな感触が……ってちょっとまで。

「なのは……お前まさか」

「タオル外してみました。どうか……これでも何とも思わない？」

「なのは……大胆過ぎるよ……」

「右京さん……背中おつきいなあ……」

「リインもお兄さんに抱きつくです!」

なのはに抱き付かれ、フェイトは惚け、はやては顔を赤くして、リインにも抱き付かれ……男としては、嬉しい状況なんだろうな。

俺はさほど嬉しくないが。

「わかったから離れてくれ……離れてくれないと……」

三人纏めて食っちまうぞ?

俺はなのはの手を握り、なのはの顔を横目で見ながら囁くようにそう呟いた。

その言葉を聞いたリインは意味が分からなかったのか不思議そうに首を傾げ、なのは達は真っ赤になって惚けていた。

「ははっ、のぼせる前に上がれよ?」

「あ!待って下さいお兄さん!」

俺とリインは惚けたなのは達をそのままに、露天風呂から上がった。

19になっても、まだまだ子供だな。

……ただ、その反応が藍蘭島の少女と被り、再び違和感や孤独感が増したのはなんでだろうか。

風呂を満喫した俺達は、脱衣場で着替え、外に出て体の熱を冷ましていた。

そんなとき、キャロのデバイス……ケリユケイオンとシャルルのデバイス……クラールヴィントに反応があった。

「魔力反応……リインちゃん！」

「はいです！エリアサーチ！」

シャルルの声に返事を返し、リインはエリアサーチという広域探知魔法を使い、魔力反応を探す。

「ロストログアの反応を確認しました！今回の目標ですよ！」

「お仕事だね。みんな、頑張ってきて！」

「フェイト、エリオ、キャロ、気をつけて行ってこいよ！」

【はいっ……！】

エイミィとアルフの言葉に元氣良く返事を返すフォワード陣（俺を

除く)。

その後、ティアナがはやて、リイン、シャルにオプティックハイ
ドという魔法をかけ、三人の姿を見えなくする。

「空に上がって結界に閉じ込めるから、その中で捕まえてね」

【はい！】

「了解だ」

「ほなら、スターズとライティング、出動や！」

【了解！！】

さてと……任務開始だな。

今回の任務は俺達フォワード陣がメインになり、隊長陣はサポート
に回るらしい。

俺、スバル、エリオの三人が先行し、ティアナとキャロの2人は後
ろを走っている……もちろん、セットアップ済みだ。

『第一戦闘空間、河川敷グラウンドに固定。スターズF、ライトニ
ングF、エンゲージ！！』

しばらく走っていると、ロストロギアの反応があったという河川敷グラウンドにたどり着いた。

そこには、ロストロギアと思わしき物が存在していた。

ただ…その存在が……

「スライムだな」

「スライムだね」

「スライムですね」

「スライムだ…」

「可愛い……」

上から俺、スバル、ティアナ、エリオ、キャロと呟いたが……キャロは違うか。

とにかく、スライムとしか呼称のしようがない物体が鬱陶しい程の数が蠢いていた。

まさか、これ全部捕獲しろ、なんて言わないだろうな。

「（どうなんだ？はやて）」

「（危険を感じると複数に分裂し、ダミーを増やすタイプみたいやな……せやけど本体は一つ。本体を封印すると全部消えるハズや）」

なるほどな……分裂して増殖するということは、限りなく増え続ける可能性がある。

そうなつては厄介だから、さっさと本体を見つけて封印しないとな……俺は封印出来ないが。

「放っておけば、増殖したダミーが街中に広がる恐れがある。私達空戦チームは、広がったダミーを回収する。そちらは、ラインのサポートでお前達がやってみせろ」

「素早く考えて素早く動く！練習通りにやれば、いけるハズだよ！」

【はいっ！！】

シグナムに言われ、なのはに信じられてフォワード陣の士気は申し分ない。

それじゃあ、サクッと終わらせるか。

「間違つてもオリジナルを壊すなよ？特にスバル」

「わ、分かってます！」

さてと……どないせえと？

あれからしばらく経ったが、スライムの数はあまり減っていない。

あのスライム、物理攻撃や魔力弾、フリースの火球が、全く効かないのだ。

冗談は見た目だけにしてほしいもんだな…。

方針としては、ダミー体は全て同じ行動をするみたいなので、シャルがその行動パターンを解析し、行動パターンに当てはまらない奴……つまりオリジナルを探して発見次第に封印するということになった。

「八花一閃!!」

「ディバイン……バスター!!」

ここまでやってようやく破壊出来るくらいだ……やべ、そろそろカートリッジが……。

そして、カートリッジが心許なくなってきた時にそれは起きた。

「ダミーが……消えていく?」

「（こちらティアナ。キャラがオリジナルを封印しました）」

「（了解だティアナ）」

こうして、ロストロギア回収任務は案外、あっさりと終わったのだった。

「そう…もう帰っちゃうんだ……」

「一晩くらい泊まっていけばいいのに……って訳にもいかないか」

「うん…ごめんね？今度は休暇の時に、遊びに来るから」

なのは、アリサ、すずかの三人が言葉を交わす。

その様子を見ていた俺は、どこか懐かしさを感じていた。

「右京さんも……せっかく久しぶりに会えたのに」

「本当ね」

「そうだな……まあ、またいつか会えるさ」

またいつか。

それはいつになるのだろうか。

そもそも、俺はいつまでミッドチルダにいるのだろうか。

藍蘭島の奴らは今頃、どうしているのだろうか。

そんな考えを胸の内に秘めながら、俺は、六課の奴らとミッドチルダへと帰還した。

任務の終わり（後書き）

サウンドステージはいかがでしたでしょうか？

楽しんでいただけたのなら、幸いです。

そろそろちよつとした番外編を書こうかと思っています。

何か希望がありましたら、どしどし意見を下さい。

ホテル・アグスタ（前書き）

今回のお話はホテル・アグスタ。

原作のような事件は起きるのか？

右京「展開はかなり急ぎ足だ……読むときに不快になったら済まない」

それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第16話！

右京「ホテル・アグスタ……スタートだ」

因みに、自分の右京のイメージＣＶは中村 悠一さんです。

「ラ カアアアア！！」とか、「この感情……まさしくAIDA！！」
の人ですね。

ホテル・アグスタ

地球から帰還した翌日、機動六課に新たな任務が届いた。

それは、オークション会場であるホテル・アグスタの警備任務。

このオークションはただ骨董品だけが取り引きされる訳ではない。

オークションの本命は、取引許可が出ているロストログア。

そのロストログアに反応して出てくる可能性のあるガジェットを警戒するのが、機動六課の任務である。

レリックとやらが関わっている可能性は低いらしいが、ガジェットが出てくる可能性は高い為、油断は出来ない。

「ほな改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや。これまで謎やったガジェットドローンの製作者、及び、レリックの収集者は、現状ではこの男」

そう言ったはやての前にモニターが現れ、そこに白衣を着た紫色の髪の男性の姿が映し出された。

どうやら、この人物がガジェットの製作者らしい。

「違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者……」 ジェイル・スカリエッティ」の線を中心に操作を進めてる」

「こっちの捜査は私が中心になって進めるけど、一応みんなも覚え

「ておいてね」

【はい！】

「了解だ」

ジェイル・スカリエッティ……名前と見た目は覚えておくか。

ホテル・アグスタには既に、シグナムとヴィータが昨夜からずっと警備しているらしい。

なのは、フェイト、はやての隊長三名はホテルの中で警備に回る為、俺達フォワード陣はシグナムとヴィータの副隊長達の指示に従いながら外側を警備する。

というのが少し前の話。

俺達は今、オークション会場の外側で別れて待機している。

すると、スバルとティアナから念話が来た……暇潰しかねえ。

「（でも今日は八神部隊長の守護騎士団、全員集合か）」

「（そうね。そういえば、あんたは結構詳しいわよね？八神部隊長とか、副隊長のこと）」

「（うーん、父さんやギン姉から聞いたことくらいだけどね）」

スバルの言う”守護騎士”というのは、シグナム、ヴィータ、シャル、ザフィーラのことだろう。

異名か何かだろうか……というかスバル、姉がいたんだな。

スバルが言うには、はやてが使用するデバイス”夜天の書”という本の形をしたデバイスらしい。

そして守護騎士の4人とリインははやてが所有する特別固有戦力であり、全員が揃えば無敵の部隊になるとか。

なにが所有する特別固有戦力だ……まるで物みたいな言い方しやがって。

スバルが悪いってわけじゃないが……情報の大元は時空管理局か……今のところ、嫌なイメージしかないな。

「（まあ、隊長達の詳しい出自とか、能力の詳細は特秘事項だから、私も詳しくは知らないけど）」

「（レアスキル持ちの人はみんなそうよね）」

「（何か言った？ティア）」

「（何でもないわよ）」

「（そう……じゃあ、また後でね）」

どうやら、念話は終わったようだ。

しかし、俺は一切喋らなかったし、話も振られていないのに、念話を繋ぐ意味はあったのだろうか。

「（右京さん）」

「（ティアナか。どうした？）」

念話が終わったかと思えば、また念話があった。

相手は今言った通り、ティアナだ。

「（右京さんは……機動六課の保有している戦力をどう思いますか？）」

どう思うと聞かれても、返答に困るんだがな。

俺はこの機動六課しか部隊を知らない。

だから他の部隊に比べて……という判断が出来ない。

「（そうだな……よく分からんが、なかなかの戦力なんじゃないか？）」

「（なかなか、なんて言葉じゃ収まりませんよ）」

普通では考えられないほどの戦力……隊長達は全員オーバーSランクであり、副隊長すら、ニアSランク。

他の隊員達も前線から管制官まで全員が、未来のエリート達。

フェイトの秘蔵っ子であり、10歳でBランクを取っているエリオと、レアな竜召喚士のキャロ。

危なっかしくはあるが、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。

「（つつい考えてしまっんです……やっぱり、部隊の中であたしだけが凡人かって）」

そう吐き出したティアナの声は……少し、弱々しい。

よほど悩んでいたのだろう。

「（なんであたしみたいなのが、この部隊に呼ばれたんだろうって思ってた）」

周りと自分を比較し、周りの凄い部分や経歴に目が行き、自分には何もないと悩んだ少女の不安はどれほどのものだろうか。

周りに言えず、溜めるしかない負の感情は一体どれだけ彼女を苦しめていたのだろうか。

「（あたしは…本当に、この部隊にいるような存在なんでしょうか）」

「（当然だ）」

「（え?）」

彼女は気付いているだろうか。

なのはと模擬戦のような訓練をする時、ティアナが作戦の基盤にな

ることを。

「（前に言ったよな？天才というのはその実、血のにじむような努力をした者達のことだと）」

「（…はい）」

彼女は気付いているだろうか。

ティアナの援護射撃があることで、俺達前線組みが安心して戦えることを。

「（ティアナは努力をしていないのか？）」

「（しています！！訓練の時間以外だって……それ以前だってたくさん！！）」

彼女は気付いているだろうか。

ティアナが抜けたその瞬間から、ほとんどの作戦が使えなくなることを。

「（だったら、凡人だとかエリートだとか、んな小さいことは気にすんな。胸を張れ。前を向け。自信を持て。俺が認めてやる。お前には確かな実力があるし、この部隊にいてもいいんだとな）」

「（……はい……はいっ……）」

少し涙声に聞こえるティアナの声が頭に響く。

それと同時に、シャーリーから通信が入った。

『来ましたっ！ガジェットドローン陸戦？型、機影30……35……
陸戦？型、機影2、3、4！』

『前線各員へ。状況は広域防御戦です。ロングアーチ1の総合管制
と合わせて…私、シャルマルが現場指揮を行います』

「（だ、そうだ……行けるな？リーダー）」

「（行けます……ありがとうございます、右京さん）」

「（気にすんな）」

さてと……お仕事スタートだ。

（ティアナside）

「（シャルマル先生！あたしも状況を見たいんです。前線のモニター、
貰えませんか？）」

「（了解。クロスミラージュに直結するわ）」

シャルマル先生に念話を飛ばし、前線のモニターが欲しいと言うと、
すぐにクロスミラージュにモニターが送られてきた。

そこに映るのは、副隊長の戦い。

ヴィータ副隊長が鉄球を飛ばしてガジェットを破壊し、シグナム副隊長がガジェットを切り裂き、ザフィーラが地面から突起を出現させてガジェットを串刺しにする。

リミッターを付けているのに、この戦闘力…すごい。

『ケリュケイオンに反応！！誰かが召喚魔法を使っています！』

『クラールヴィントにも反応。でも、この魔力反応は……』

『大きい…なにこれ！？』

キャロ、シャマル先生、シャーリーさんと矢継ぎ早に通信がはいる。

シャーリーさんの言うとおり、切り替わったモニターに示された魔力反応はAランクという大きさだ。

『スターズF、ライトニングFと合流して防衛ラインをお願い！』

「はい！」

シャマル先生から指示を受け、スバルと一緒にライトニングのいる正面玄関前に向かう。

合流して…しっかり任務をこなす為に。

くティアナside outく

「遠隔召喚…来ます！」

ティアナ達と合流してすぐに、キャロが真剣な表情でそう言った。

直後、前方に四つの魔法陣が地面に現れ、そこからカプセルのようなガジェットが10機、丸いデカイガジェットが1機現れた。

「あれって、召喚魔法陣！？」

「召喚って、こんなこともできるの！？」

「……優れた召喚士は、転送のエキスパートでもあるんです」

つまり、召喚士がいる限り、どこからでもガジェットが現れるということがあるのか。

だったら、召喚士を叩けばいいんだが……。

「キャロ、召喚士の位置は分かるか？」

「…ごめんなさい、そこまでは……」

「そうか…仕方ないな。じゃあ、防衛ラインを越えられないように

ガジェットを破壊するぞ！」

【了解！！】

いつものように俺、スバル、エリオが前線で戦い、ティアナとキャロは援護に徹する。

いざ戦ってみると……ガジェットの動きがやたらよくなっている。

「関係ないがな……！」

俺は丸いガジェットを相手にしている。

ロボットアームやビームなどで攻撃されるが、俺にしてみれば全然遅い。

余裕を持って避け、懐に潜り込む。

「レイジングソウル！！カートリッジロード……！」

「ロードカートリッジ」

棍を後ろへ投げ捨て、両手の手甲から二発ずつ、薬莢が排出される。

そして両手に魔力が集まり、右ストレートを放つ。

「デイベインフィストオ……！」

ガツンと鈍い音が鳴り、ガジェットはぐらりと傾く。

……砲撃が出なかった？

チラツと両手を確認してみるが、まだ魔力を放っていない左手に瑠璃色の光はない。

なぜだ？

「AMFです。このままこのガジェットの近くにいては、魔法の行使が出来ません」

AMF……ティアナ達が前に言ってた”アンチマギングフィールド”とか言う、魔法の発動を困難にする奴か。

そうになると……コイツのAMFの範囲にティアナ達を入れる訳にはいかないな。

「オラア!!」

傾いたガジェットに左ストレートを、先程右ストレートを打ち込んだ箇所には打ち込む。

再びガツンと鈍い音が鳴り、ガジェットの巨大が更に傾いた。

「更にい!!」

全く同じ箇所に右膝を叩き込む。

すると、ガジェットの装甲がかなりへこみ、ガジェットは地面に叩き付けられた。

「右京さん……凄い……」

「魔法を使わずに、？型を……」

「賞賛は嬉しいが、しっかり守れよ？」

【はい!!】

ティアナ達に声をかけながら、俺はデカイガジェットから一度離れ、投げ捨てた棍を回収する。

その際に周りを確認する……四人とも（+フリード）、ガジェットを破壊しているが、無理に破壊しには行っていない。

ちゃんと、防衛戦を行っているようだな。

むしろ、俺が突っ込んでいる。

「あのデカイのだけは、必ず破壊しないと……レイジングソウル、カートリッジロード」

「ロードカートリッジ」

両手の手甲から二発ずつ、薬莢が排出される。

すると、手に持った棍の片方の先端に魔力が集まり、槍の刃のような形をした魔力刃となった。

「キャロ!! エリオ!! 行くぞ!!」

「はい!!」

「はい!! ツインブースト……スラッシュアンドストライク!! 更に、アルケミックチェーン!!」

キャロのアルケミックチェーンがデカイガジェットをガッチリと捕らえ、エリオのストラダーと俺の棍にキャロの強化が施され、魔力刃が桃色に輝く。

それをデカイガジェットに向け、エリオとタイミングを合わせる。

「レイジングソウル!!」

「ストラダー!!」

「「フラッシュ（ソニック）ムーブ」」

「「衝刃^{はいひ}!! 十文字!!」」

2人で加速魔法で同時に加速し、×字を描くようにガジェットに魔力刃を突き刺し、そのまま突き抜ける。

突き抜けた俺達はガジェットの後ろの地面に着地し、ゆっくりと自分の獲物を前に向けた。

「「俺（僕／私）達に……貫けぬ物無し!!」」

俺が棍を左に、エリオがストラダーを右に振り、三人で決め台詞のように声を上げる。

すると、ガジェットは特撮のような大爆発を起こし、辺りを赤く染めた。

「スバル side」

「かつ……カッコいい……」

「右京さん……ホントムチャクチャね。キャロ、いつのまに練習したの？」

「じ……実は、動きの段取りを決めてただけで……練習も何もしてないんです」

「ということは……ぶつつけ本番ってことだね？」

「一発で決めちゃうなんて……三人とも凄いなあ。」

「ライトニングが？型を倒して、ガジェットは？型だけになり、数もだいぶ減った。」

「後は、私とティアのクロスシフトで頑張れば、充分かな？」

「ティア、私達も……」

「右京さん！一旦ここまで下がって下さい！バルカンシフトで一掃します！」

「了解した！エリオ、下がるぞ！」

「はい！」

……え？

私とティアのクロスシフトじゃないの？

「ティ…ティア？」

「スバル、前に出たらダメよ？」

「う…うん」

言われるままに、ティアと右京さんの後ろに下がる。

右京さんはもう、デバイスを変形させていて……ティアと一緒にデバイスを構えた。

「クロスファイアシュート・バルカンシフト！」

名前の通り、まるでバルカンのようにクロスファイアシュートがガジェットに向かって飛ぶ。

2人の魔力弾は1機につき数発当たり、次々にガジェットを撃ち抜いて破壊していった。

クロスシフトよりも早く……沢山破壊していった。

「……片付いたか？」

「増援が来るかもしれませんが、今のところは……」

「んじゃ、警戒は続けるぞ」

「」「はい！」「」

「……はい」

ティアの隣で右京さんが、私達に指示を出す。

…ティアの隣はいつも私だったのに、今は右京さんがいる。

最近は訓練でも、私とティアのコンビネーションを使う回数は少なくなかった。

昨日の訓練だつて……。

「スバル？どうしたのよ」

「え！？あ…えっと…なんでもないよティア」

「そう……なんかあったら、すぐ言いなさいよ」

「うん、ありがと」

ティアが心配してくれた……それだけで、ちょっと気分が楽になっ

た。

うん…もう大丈夫。

ちよつとだけ…ちよつとだけ寂しいと感じただけだから。

「ガジェットの増援だ……防衛ライン、越えられるなよ!!」

【了解!!】

頑張ろう。

ティアの隣に立てるように。

右京さんよりも、頼られるように。

くスバルside outく

「これでラストオオオ!!」

ファーストフォルム状態で最後の1機を殴りつけ、拳を貫通させて引き抜き、後方へ跳んで距離を取る。

その後、ガジェットが爆発し、全機の破壊を終えた。

その直後、シャマルから通信が入った。

『ガジェット的全機撃墜を確認！召喚士の正体は分からずじまいだけど、居ると分かった以上は対策も取れるわ。みんな、お疲れ様』
どうやら任務は終了したらしい。

トラブルも怪我もないし、任務は成功と言っていいだろう。

その後、しばらくして隊長三名がやってきた。

俺達は任務の報告を終え、スターズ、ライトニングに分かれて、現場調査の手伝いをする事になった。

「現場調査もお仕事の一つだし、勉強だよ。私は向こうにいるから、わからないことがあったら、遠慮なく聞いてね？」

とはフェイトの言葉だ。

そこから俺達は、調査現場に向かうのだった。

六課に戻ったのは、日がだいぶ傾いた時間帯だった。

「みんなお疲れ様。それじゃ、今日の午後の訓練はお休みね」

「明日に備えて、ご飯食べてお風呂でも入って、ゆっくりしてね」

【はい！】

「あいよ」

フォワード4人はなのはとフェイトに敬礼をし、その場で解散となった。

さてと、先に風呂が、それとも飯か……。

「ちよつとスバル、どこに行くのよ」

「え？あ…ちよつと自主トレを…」

自主トレか……任務の後まで訓練するとは真面目だな。

だが、体力も落ちているのに訓練するっていうのは感心しないな。

「今日は止めとけ。疲れてる時に訓練しても身に付かないぞ」

「大丈夫です！！私、体力だけは自信がありますから！！」

「俺より体力がないので却下。今日は訓練は止めとけ。なのはも言っただろう？午後の訓練は休みだって」

「うう……わかりました」

ガツクリとうなだれるスバル。

不思議そうにスバルを見るティアナ。

…なんか任務の時からスバルの様子が変だな。

なんというか…少し焦りというか、陰りのようなものが見える。

「…まあいいか。さてと、晩飯作りますか」

「お兄ちゃん、何を作るの？」

「今日はな……」

まあ…飯でも食って、風呂に入れば、明日には元のスバルに戻るだろう。

デザートはアイスに決まりだな。

ホテル・アゲスタ（後書き）

右京「今回の俺の…というか俺とエリオ、キャラの使用した魔法の紹介だ」

名称：フラッシュムーブ

フェイト、エリオのソニックムーブと同じ短距離加速魔法。

無印時代になのはが使ったものと同じ魔法だが、加速時間や速度は劣る。

尚、習得したのは出張任務の朝の訓練が終わった後で、なのはからレイジングソウルにプログラムを送って貰った。

理由は”私の魔法も使って欲しい”というもの。

名称：衝刃十文字

キャラがアルケミックチェーンで対象を捕らえると同時に、右京とエリオの二人にツインブーストをかける。

その後、右京とエリオの二人が魔力刃の発生した棍とストラーダを構えて対象にx字になるように同タイミングで加速魔法を用いて突撃するというもの。

提案はキャラとエリオの二人であり、理由は”ティアナと同じことをしたい”というもの。

決して、君と響きあうRPGのUAではない。

右京「今回はこんなもんだな。因みに、決め台詞はエリオと俺が考えたんだ。キャラがノリノリだったのには、ビックリしたな」

その心、叫びを上げて（前書き）

今回は、上手く書けたか心配です。

右京「いつも上手く書けてないだろう？」

自分は面白いと思って書いてるけど、楽しんでもらえるかは分からないからね。正直、駄文とか言いたくない

右京「まあ……自分で自分の作品を貶すのは誉められたものじゃないな」

今回の話は原作では、ティアナが暴走する部分になります。それでは流れ着いて！ミッドチルダ！第17話！

右京「その心、叫びを上げて……スタートだ」

その心、叫びを上げて

〈No side〉

ホテル・アグスタの任務を終えた日から数日間、フォワード陣はいつものようになのはの訓練を受けていた。

その数日間の間、スバルは誰にも内緒で自主的に訓練を行っていた。別になのはの訓練に不満がある訳ではない。

むしろ、憧れであるなのはの訓練を受けられていることは嬉しい。

しかし、今はどうしても力がいるのだ。

ティアナの隣に立ち続ける為に……ティアナに右京よりも頼りにされる為に。

そんな訓練を続いたスバルに一つのチャンスが巡ってきた。

それが、なのはとの模擬戦である。

しかし、この模擬戦にて、一つの事件が起きてしまうのだった。

〈No side out〉

ここは訓練場であるバーチャルフィールド。

ステージは廃墟にて固定されており、俺、エリオ、キャロ、ヴィー
タは廃墟の屋上にいる。

今から始まるのは、ティアナとスバル対なのはの模擬戦だ。

予定ではこの模擬戦の後に俺とエリオとキャロ対フェイトの模擬戦
がある。

……フェイトはまだいないがな。

「もう始まつてる!？」

「いや、今から始まるところだ」

と思いきや、たった今やってきた。

息が少し切れているところを見るに、急いで来たようだな。

「もう……スターズも私がやるつもりだったのに」

「だったら遅れんなよ」

「すみません……」

俺の言葉を聞いてフェイトはしょんぼりと肩を落とした。

しかし、フェイトの言うことも分かる。

最近のなのはは見ても聞いてもオーバーワーク気味だ。

朝早くから夜遅くまで仕事漬けの毎日。

早朝から夕方までフォワードの訓練を行い、夕方から夜まで事務仕事に追われる。

更に事務仕事の後はフォワード陣の訓練の様子を確認し、訓練のスケジュールを組む。

ちゃんと睡眠を取れているのか謎だ。

しかし、それも全てフォワード達の為。

それをフォワード達も分かっているからこそ、文句も言わずに訓練を受けているのだ。

「さあ……始まるぞ」

「頑張れー！スバルさん！」

「ティアナさん頑張ってください！」

スバルか……少し様子がおかしかったが…。

……嫌な予感がするな。

＼ No side ＼

場所は変わり、なのは達三人のいるフィールド。

三人は既にセツトアップを終えており、準備は万端である。

ティアナとスバルは緊張しているらしく、その表情は固い。

対照的になのはの表情はいつも通りであり、少しワクワクしているという顔をしていた。

「準備はいいね？」

「「はい！」」

「それじゃあ、レディ……ゴー!!」

なのはが右手を上げると、周りに幾つもの桃色の魔力弾が現れる。

そこから掛け声と共に右手を下げて二人に向けると、魔力弾が一斉に二人に襲い掛かる。

「行くわよスバル！」

「うん！」

それを見た二人は少ない言葉で意志疎通を終え、左右に分かれることで回避する。

その後すぐにスバルはウイングロードを展開し、なのはへと近付く。なのははすぐに魔力弾を新しく作り出し、スバルへと放った。

しかし、このスバルはティアナの作り出した幻影であり、なのはの魔力弾はスバルに当たらずにすり抜けた。

「やっぱり幻影……なら本体は……」

「でやああああ!!」

「後ろっ!!」

なのはが振り返った時には、スバルは既に右腕を振りかぶっていた。

なのはは魔力を込める時間はなかったがプロテクションを展開し、スバルの拳を受け止めた、

「やっぱり……堅い……っ!」

攻撃を決められなかったせいも、スバルの顔が歪む。

しかし、この短時間でなのはの背後に回り、プロテクションで受け止められたとは言え攻撃を加えたことを見れば、明らかにレベルアップしている。

なのははそれを嬉しく思い、少しだけ笑みを浮かべた。

「アクセルシューター……」

「っ!？」

なのは新しくアクセルシューター……誘導型の魔力弾を作り出す。それを見たスバルはすぐになのはを見たまま後退し、ウイングロードの上を疾走する。

「シュート!!」

誘導弾がスバル目掛けて動き出す。

スバルはウイングロードを引き伸ばし、なのはに背を向けて誘導弾から逃げる。

「後方から魔力反応多数」

その時、スバルとは反対側から数発のオレンジ色の魔力弾がなのはに向かって飛んできた。

なのはは誘導弾の操作を一旦止め、魔力弾が飛んできた方向に手を翳してプロテクションを展開し、魔力弾を受け止める。

飛んできた方向を見ると、遠くのビルの上に、クロスミラージュを構えるティアナの姿があった。

「いつのまにあんな遠くまで……違う、あれは多分……」

「デイベインバスター」

なのははレイジングハートをティアナに向け、自分の十八番の砲撃魔法を放つ。

桃色の砲撃はまっすぐティアナへと向かい、直撃した。

「…手応えがない…やっぱり幻影…」

しかし、どうやら幻影だったようで、砲撃は無駄撃ちに終わった。

ティアナ達の作戦は、幻影とスバルの機動力を生かしたヒット＆アウェイを繰り返し、なのはが疲弊したところで一撃を当てると言うもの。

この作戦は、スバルの体力とティアナの魔力量が鍵となる。

度重なる基礎訓練により、ティアナの魔力量は上がり、魔力運用も上手くなっている為、以前よりも低コストで幻影を使える。

スバルも元々あった体力が度重なる基礎訓練によって更に上がり、今のところは息一つ乱してはいない。

この作戦が取れるということは、二人がレベルアップしていることを如実に表している。

二人は確実に強くなった。

（行ける……まだまだ幻影は使える。右京さんの言った通り、私は強くなってる！）

ティアナはその事実をしつかりと感じ、喜びから笑みを浮かべる。

しかし、スバルは違った。

（逃げてるだけじゃダメだ……私がなのはさんの防御を貫いて一撃与えないと……右京さんならそうするハズだから！）

なのはの抜き打ちのような防御魔法を貫徹なかった事実には、自分は弱いと考えてしまうスバル。

そんな自分と、自分の仲間達に頼られている人物を重ねてしまう。

右京ならそうする……だから、自分もそうすればきっと……。

そう考えてしまったスバルは、動いてしまった。

「（ティアア！！私が突っ込む！！）」

「（はあ！？ちょっと、作戦は！？）」

「（大丈夫！！）」

「（大丈夫って、答えになってな……コラ、スバル！？）」

一方的にティアナに念話をして自分の意見を言ってから、また一方的に念話を切る。

スバルはウィングロードを上空に向かって垂直に伸ばし、そこを走る。

当然、そんな伸ばし方をすれば、なのは気付かないハズがない。

「スバル…？ いったいなにを……」

なのはには、スバルとティアナの意図が理解出来ないでいた。

自分を疲弊させる作戦なら、さっきの行動を繰り返せばいい。

しかし、ウイングロードを上空へ伸ばし、今もそこを走っているスバルの行動は理解出来ない。

やがてウイングロードはU字のようにカーブし、その行き着く先は…… なのはの頭上。

「ああ、もう！―」

苛立ったようなティアナの声が下から聞こえたかと思えば、オレンジ色の魔力弾が飛んできた。

その弾速は速い為、再びなのははプロテクションを張り、防ぐ。

しかし、魔力弾は止むことなく飛んできている。

威力はあまり感じず、弾速を重視した魔力弾。

なのはの頭によぎったのは、右京とティアナが使ったバルカンシフト。

「足止め……でも、なんで急に作戦の変更を……」

意味の分からない行動になのはは混乱する。

その時、スバルがなのはの頭上から落下してきた。

「一撃必倒！！ダイバイイイイン……」

「2人とも……何をやってるの？……私には、分からないよ……」

スバルの右拳の前に、青色の魔力が集まる。

それを感じながら、なのはは悲しみの声を出しながら俯き、スバルに向けて右手を翳した。

「バスッ……！？バインド！？」

「スバル！？」

「ねえ……」

スバルはダイバインバスターを放とうとした体勢でなのはのバインド……捕縛魔法に捕らえられ、空中に固定される。

ティアナが心配そうな声を上げるが、それを掻き消すように、なのはの感情のない声が訓練場に響いた。

「さっきまで良かったのに……どうしちゃったの？」

なのはの心からの疑問の言葉。

先ほどの2人の成長に対する喜びを上回る困惑の言葉に、2人はその体を固くした。

「あ……」

はつきり言ってしまうば、これはスバルの独断である。

ティアナの行動は、例え悪手であったとしても、よく合わせたと言わざるを得ない。

スバルの落下しながらの砲撃は、確かに威力は上がるだろう。

しかし、その間は全くの無防備になってしまう。

砲撃用の魔力まで溜めていては、咄嗟の防御や回避も出来ない……
事実、バインドで捕らえられてしまった。

早い話、スバルの行動は無謀過ぎるのだ。

「スバル……ダメじゃない、こんな危ない行動………実戦でこんなこととしてたら……ケガじゃすまないかもしれない」

「っ!？」

驚いたのはティアナ。

確かに、もしもこれが命を落とすかもしれない実戦ならば、スバルは……。

そう考えてしまったティアナは、愕然としてその場に座り込んでし

まう。

「危ないことしないでさ……ちゃんとやる？」

なのはの悲しみの目がスバルを射抜く。

スバルの目に映るのは、自分の行動のせいで愕然あいはうとしている親友と、悲しみの目を向ける自分の憧れの人。

それを見たスバルは自分の行動の浅はかさを悔い……小さな怒りが灯った。

「なんで……？」

「……？」

スバルの声に、なのはとティアナはそちらに視線を向ける。

「なんで意味がないって言うんですか？ 私だって、一生懸命考えて動いたのに……」

「それでこんなことになったら意味がないでしょ？」

なのはの言葉で小さかった怒りが、少し大きくなる。

「ティアと一緒にだから、上手くいくと思ったから……」

「いきなり言われてマトモに動けるワケないでしょ？」

ティアナの言葉で更に怒りが大きくなる。

「私だって！右京さんみたいに出来ると思ったから！！」

スバルが心の中を叫ぶ。

それは、以前から感じていた自分の居場所がなくなるかのような焦りと、自分の行動を否定される怒りから来る叫び。

「私が右京さんみたいに出来れば、またティアが頼ってくれると思っただから！！」

自分よりも右京と訓練や任務で一緒に動き、頼りにする親友の姿を見て考えてしまった。

「私がティアのパートナーなのに！！」

ひょっとして自分は親友ティアナにとって……

「私は！！」

もう、いないのではないか？

「私は……ティアの隣に居ただけなのに……」

「ティアナの意志は聞いたのか？」

「「「!?」」」

三人が同時に声のした方を見る。

そこには、なぜかセツトアップした状態の右京の姿があった。

〈No side out〉

スバルの叫びは、離れたビルにいた俺達の元にも聞こえていた。

俺という存在のせいで、スバルがそこまで悩んでいたことには結構ショックだったが……今はそんなことはどうでもいい。

「どういう……意味ですか」

敵意を隠すことなく、涙を流しながらスバルは俺を睨み付ける。

「なのは……スバルのバインドを外して、ティアナを連れて離れてくれ」

「う…うん…」

なのは一度領くとスバルのバインドを解除し、ティアナを連れて俺がいたビルの方に飛んだ。

俺とスバルは、ウイングロードの上で、互いを見合う。

「さて、どういう意味か…だったな。言った通りの意味だ」

「だからどういう意味なんですか!？」

「お前が言ったのは自分の心と想像だけだって言ってんだよ。一生懸命考えたあの、ティアナに頼って欲しいあの…ティアナの言葉がないんだ」

スバルが言ったのは、ティアナに頼りたいやティアナの隣に居たいというもの。

それはつまり、自分はティアナに頼られていない、隣に居ないということだ。

「一度でもティアナがそう言ったのか？頼りにならないや隣にいるなと」

「うるさい……」

「言っていないだろう……お前が勝手にそう思い込んでいただけだ」

「うるさい」

「ティアナの言葉も聞かないで、なにがパートナーだ」

「うるさい……」

「そんなんじゃ……本当に隣に居られなくなるぞ」

ブチッと何かが切れる音がした。

その途端に空気がピリピリとしだし、スバルから魔力が溢れる。

これは……殺気か。

「それ以上……言つなあああ……!!」

「プロテクション」

俺とスバルの間に瑠璃色の盾が現れ、突撃してきたスバルの右拳を受け止める。

それだけで、俺のプロテクションにいくつもの罅が入った。

「あああああああつ!!」

「がつ…!？」

スバルの前に青い魔法陣のようなものが展開される。

その直後、体に激痛が走り、プロテクションが爆発して俺とスバルの距離が離れた。

なんとか、態勢を整えることが出来たのでウイングロードに激突することは避けられたが。

「ぐ……何を……された？」

体に傷はない。

なのに「プロテクションの上から」何か「をされて」体の中に「ダメージを受けた。」

「……防御不可……反則だろ」

苦笑を浮かべ、腹をさする。

あんなもん何発も受けたらショック死しそつだな…激痛で。

「（右京さん！？大丈夫！？）」

「（大丈夫じゃないが……ま、何とかなるさ）」

なのはから念話がきたのでサクツと返す。

スバルのあの一撃は、完全に殺す為の一撃だった。

それほどまでに、スバルは俺が憎いのだろう。

「右京さんさえ……お前さえいなければあああ!!」

しかも怒りで完全に理性がとんでるな……キャラ崩壊してるぞ。

殴りかかってきたスバルの右拳をしゃがむことで避け、スバルの腹に右肘を入れる。

「うぐっ!？」

スバルは腹を押さえて吹っ飛ぶが、すぐに態勢を立て直し、俺を睨み付ける。

……変だな。

スバルの瞳の色は青かったハズなんだが……今は金色に輝いている。

まるで、チンクとノーヴェみたいな……。

「ま、今は関係ないな。……なあスバル……お前は本当にティアナがお前を頼りにしてないと思ってるのか？」

「うるさい!!」

スバルが再び右拳を振ってくるが、俺は後方に下がることで避け、

言葉を続ける。

「本当にお前の居場所がないって思ってるのか？」

「うるさい!!」

蹴り、右ストレート、左回し蹴り、右フックと攻撃してくるが、その全てを一步下がることで避ける。

「違うだろう？いつも一緒にいるじゃないか。お前が一番ティアナと長く一緒にいるじゃないか。さっきだって短い言葉で互いがどうしたいか分かったんだろう？俺には、そんな芸当は出来ない」

あれは相性がよく、互いを信頼しているからこそ出来ることだ。

まだ出会って半月程しか経っていない俺には出来ない。

「ティアナはお前を信頼している。ティアナはお前を頼りにしている。ティアナはいつだってお前の隣にいた」

スバルの動きが止まる。

顔を見て見れば、瞳の色は元の青に戻っていた。

「お前達はパートナーだろう？だったら……」

全力全開で信じろよ……自分達は最高の相棒だと。

「ごめんなさい……ごめんなさい、ごめんなさい……」

ぼろぼろと涙をこぼしながら、その場に座り込んだスバル。

その姿は、以前のなのは見ているようで……俺は自然とスバルを抱き締めていた。

「右京さんごめんなさい……酷いこと言ってごめんなさい……」

「気にすんな。俺は気にしない」

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

何度も何度も謝るスバル。

俺はスバルが泣き止むまで、その頭を撫でていた。

「ティア……なのはさん……ごめんなさい」

「もういいわよ……私の方こそ、気付けなくて……ごめん」

「私もごめんねスバル……スバルの気持ちも知らないで……」

という具合でスターズは互いに謝りあっている。

因みに模擬戦の結果は保留となり、ライティング戦の後にもう一度やるそうだ。

「さて、次は俺達か」

「はい！」

「頑張りましょう！」

子供2人はやる気満々だな。

思わず俺も笑みを浮かべてしまう。

「フフッ……負けなによ？」

「俺達が勝つ。な？」

「「はい！」」

フェイトと互いに笑い合い、闘志を燃やす。

フェイトと戦うのは初めてだな。

「それじゃあ、早く始め……」

つう……と、口の端から何かが伝う。

同時に、体から力が抜けていく。

「右京さ…!？」

「右…!？」

なんだ？何でフェイトとキャロはそんな心配そうな顔してるんだ？

「……………!！」

なのはは…なんて言ってるんだ？

俺は突然の出来事に困惑しながら、意識が遠のいていった。

体の中で、ピシリと何かがひび割れた音を聞きながら……。

その心、叫びを上げて（後書き）

なのは「ねえ……」

はい……

なのは「SLBとデイベインバスター……どっちを先に受ける？」

どっちがいいじゃなくて！？

なのは「タイムアップなの。デイベインバスターで気絶しない程度にダメージを与えてからSLBなの」

何という死刑宣告……さらば現世

なのは「デイベイイイイン！！バスタアアア！！の後にスタアアアライトオオオ！！ブレイカアアア！！」

ギアアアア！！

その心、安堵して（前書き）

いつの間にか10000ユニークにお気に入り件数が100件突破していました

ソル「沢山の方に見ていただき、本当に嬉しいですな」

これは、記念番外編を書かねばなるまい

ソル「私が擬人化してマイマスターとキャッキャムフフな展開を所望します」

いや、それはちょっと……

ソル「バラバラにしますよ？」

サーセンっしたあああ！！

ソル「それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第18話……」

右京「その心、安堵して……スタートだ」

ソル「ま……マイマスター！」

その心、安堵して

（No side）

模擬戦の同日の夕方。

隊長陣五名と右京を除くフォワード達、リイン、シャマル、ザフィ
ーラは会議室に集まっていた。

会議室の空気はとても重い……その理由は、シャマルが口にした言
葉が原因だった。

「吐血して倒れたのは体の中……内臓にダメージを受けたことが原
因……」

「更に、リンカーコアに異常が見られる……分かりやすく言うなら、
ひび割れた状態……」

「いつ目覚めるかも分からない……か」

シャマルの言葉をはやて、ヴィータ、シグナムが順に繰り返す。

それは右京の現状を示す言葉だった。

魔導師や騎士と呼ばれる存在は、リンカーコアと呼ばれる魔力の核
となるものが存在する。

このリンカーコアが魔力を生み出し、その魔力を使って魔法を使う
のだ。

そのリンカーコアに傷を負ったとなれば、魔法の行使はおろか、魔力を作ることすら出来なくなるかも知れない。

幸いというべきか、リンカーコアの傷自体は小さなものだった為に、魔力の生成や魔法の行使が出来なくなるということはないらしい。

「私の……私のせいだ……」

「スバル……」

右京やスターズと和解した直後だったスバルは、原因が自分の一撃であると分かっているため、泣き崩れていた。

今もうわごとのように自分のせいと呟き、涙をこぼしている。

そんなスバルを辛そうに見つめるティアナは、何も出来ないと自分を情けなく感じていた。

「……スバル。あの一撃は何？」

「……」

なのはは優しく、スバルに問い掛ける。

右京の状態は、模擬戦で右京にスバルが当てた一撃であることは全員が分かっている。

たった一撃で体の内部にダメージを与え、リンカーコアにも傷を負わせた一撃。

そんな危険な魔法は当然、なのは達は教えていない。

しかし、あれは魔法ではない。

あの一撃はスバル自身の存在を示すもの。

これが知られば、自分は機動六課に居られなくなる……。

そんな恐怖がスバルにはあった。

（それでも……言わなきゃダメだよな）

スバルは覚悟を決め……涙を拭いて立ち上がる。

恐怖はある。

後悔するかも知れない。

ティアナと一緒に居られなくなるかも知れない。

それでも……と、スバルは覚悟を決めた。

そして大好きな姉に通信を繋ぐのだった。

「ギン姉…今、いい？」

（No side out）

「右京さん、起きて下さい」

「ん……？」

妙に聞き慣れた声を聞き、目を開く。

そこは、夜明け前のような空が広がっていた。

「おはようございます、右京さん」

「ああ、おはよう……っ!？」

上半身を起こし、空を見上げていると左隣から声を掛けられた。

反射的に返事をしてしまったが、この世界に来てから一度も聞くことのなかった声に驚き、左を向く。

そこには、見慣れた笑みを浮かべる……。

「みちる……? いや、違う……お前は、誰だ？」

「……流石はマイマスター……」

藍蘭島にいるハズのみちるの姿をした誰か。

だが、みちるの髪は薄紫色だ。

こいつの髪色はこの夜空にも栄えるような鮮やかな”蒼”。

そして、マイマスターという言葉…。

「お前……レイジングソウルか？」

「はい。私はレイジングソウル……あなたのパートナーのデバイスです。ここは、マイマスターの精神世界……夜明け前のような優しさ、孤独感や寂しさが溢れる世界……」

やはり、この蒼い髪のみちるはレイジングソウルのようなのだ。

そして、この空間は俺の精神世界……よく見れば、ここは藍蘭島で唯一、桜が咲く岬だ。

「俺はどうなった？」

「マイマスターはプロテクション越しに受けた一撃で内臓にダメージを受け、血を吐いて倒れました。今は医務室で眠っています」

ああ、あのスバルの一撃か。

流石に内臓は鍛えられないから……血を吐いて倒れるのも仕方ないか。

「スバルは凄い奴だな。まさかあんな隠し玉があるなんてな」

「……………」

対人戦で使うには危険だが、あれはまさしく一撃必殺だ。

直撃すれば、体の中が血の海になるだろう。

「今頃はなのは達に説教でも食らってるか、説明を要求されてるだろうな」

「……………なぜですか……………」

くつくつと笑いながら、その様子を想像して喋っていると、レイジングソウルから疑問の声が上がった。

レイジングソウルの方を見てみると、そこには悲痛そうな顔をしたレイジングソウルがいた。

「なぜマイマスターは笑ってあの娘の名前を出せるんですか？マイマスターはあの娘の……………あいつのせいで死にかけました。…いえ、守りきれなかった私のせいでもあります……………なのになぜ……………」

あなたは笑って居られるのですか？

そう言ったレイジングソウルは泣きそうな表情をしている。

守りきれなかった、というのはプロテクションを張ったにも関わらず、俺が血を吐くほどのダメージを受けたからだろう。

はっきり言って、俺は自分で魔法を使っていない。

レイジングソウルに登録されている魔法は知っているが、それだけだ。

普段使っている魔法は、レイジングソウルが俺の声や行動で判断して魔法を構築し、それを俺が使っているに過ぎない。

「そうだな……まず、スバルだが、俺は別に怒ってはいないさ。俺は殺されかけるくらいにスバルの怨みを買っていた……それはもう済んだことだからどうでもいいんだ」

「死にかけたんですよ！？だいたい、あいつの怨みはただの逆恨みじゃないですかー！」

「スバルにとつてはそれだけのことだ。それは、俺達がとやかく言えることじゃない……スバルの言葉…行動が真実であり……追い込んだのは俺なんだからな」

優しい少女が怒りで殺意ある拳を振るわせてしまつほどに。

自分の居場所が無くなると焦るほどに。

俺という存在がそこまで追い込んでしまった。

だが、それはもう終わったことだ。

だからもう、どうでもいいことだ。

「そんなことは……」

「で、レイジングソウルだが……俺は一切怒っちゃいないぜ？むしろ感謝してる」

「…………え？」

俺は自分で魔法を使えない。

レイジングソウルのサポートがあつて初めて魔法を使える。

模擬戦でも、何度もレイジングソウルのプロテクションに助けられている。

「なんでお前を怒らなくちゃいけない？お前はいつだって俺をサポートし、助けられてきた。守りきれなかった？違う、お前は俺を守ってくれた。だから感謝こそすれ、怒りも怨みもしない」

「で、でも私は…………」

「ストップだ」

まだ何か言おうとするレイジングソウルの口を右手の人差し指で塞ぐ。

なぜこいつはこうも自分を責めるのだろうか…………俺も似たようなものだな。

「俺が言いたいのは感謝の言葉だけだ。…………ありがとうレイジングソウル。お前がいるから、俺は魔法を使える…………戦える。お前は最高のパートナーだよ」

「…………はい…マイマスター…………あなたも私の最高のマスターです」
人差し指を離すと、レイジングソウルはそう言ってきた。

……なぜ、頬が赤く染まっていて、瞳が潤んでいるのだろうか。

「ちょっと待てレイジングソウル……なぜ顔を寄せる？」

「……ソル……」

「は？」

「レイジングソウルは確かに私の名前ですが……長いし、あんまり可愛くないです。だから、ソルと呼んで下さい」

いや、あんまり可愛くないってお前な。

まあ確かに、みちるの姿をしている今は……というかレイジングソウルというのは長いな。

それに、本人たつての希望だ。

「わかった……ソル」

「はい……マイマスター……私のただ一人の主……私の……」

ただ一人の愛しい男性^{ひと}

そう言ってレイジングソウルは……ソルは俺に口付けた。

「って待てやコラァ!!」

「ひゃっ!?!」

「レイジングソウル!!お前いきなり何した!?!」

「エヘヘ……マイマスターと……エヘヘ……」

ダメだこいつ早く何とかしないと。

と呆れながらも、俺は自分の周りに視界を巡らせる。

見たことある部屋……医務室だな。

俺は病人服を着ており、場所はベッドの上……。

「う……右京さん?」

「ん?」

声のした方……右側を向くと、そこにはびっくりした表情をしているスバルと……以前俺に尋問した紫色の長髪の管理局員がいた。

ついでに窓の外を見てみれば、すっかり夜になっている。

「お、起きてても大丈夫なんですか？」

「ん？ああ……まだ少し痛むが、動けない程じゃないさ。そっちの人は……確か、ギンガだったか？」

「覚えててくれたんですね。改めまして、スバルの姉のギンガ・ナカジマです」

ああ、スバルの姉ってギンガだったのか。

確か、ギンガは別の部隊だった筈だが……。

「そういえば、あれからどれくらい時間が経った？」

「えっと……右京さんが倒れてから大体九時間くらいです。その間に、緊急任務が入って……なのはさん達は任務に行きました」

九時間か……大分寝ていたようだな。

更に緊急任務か……スバルがここにいるというのは、謹慎的な意味合いが強いだろうな。

「……右京さん。私、右京さんに話さないといけないことがあるんです」

「話さないといけないこと？」

「はい……模擬戦の時の一撃と……」

「私達姉妹のことです」

スバル達から話されたのは、自分達の身体のことだった。

スバル達は戦闘機人という存在であり、早い話がサイボーグのようなものだという。

実際はもっと細かく話してくれたのだが、生憎と俺の頭はそれほどよくない為、理解出来たのはそれくらいだ。

そして、スバルの一撃はIS……インヒューレントスキルと呼ばれるものであり、魔力を用いない能力らしい。

スバルのISは”振動破碎”という対象の内部に振動波を送り込み、中から破壊するというものだそうだ。

人間だけでなく機械にも致命的な一撃を与える反面、自分にも少ない被害があるという諸刃の剣だという。

それを聞いた俺の反応は……

「ふーん」

だった。

「ふーんって……私は……戦う為に造られた存在なんだよ？……怖く……ないの？」

「いや、別に」

「こ、殺しかけたんだよ！？そんな力を持つてるんだよ！？」

「んなもん誰だって持つてるわ」

「え？」

俺の知り合いには、人間にしか見えないからくり人形…ロボットがいる。

妖怪だって見たことあるし、そいつらとケンカしたりした。

「ぶっちゃけた話、戦闘機人とか人間じゃないとかどうでもいい」

「ど……」

「で、殺しかけた？そんな力を持つてる？俺だって持つてる。生きているなら神様だって殺してみせる……なんてな」

もしも、俺の主力魔法である八花一閃を殺傷設定で使ったらどうなる？

ガジェットを貫けるような拳を人間に向かって全力で振り抜いたらどうなる？

刃物を持ったら、鈍器を持ったら、銃器を持ったら、兵器を持った

ら。

「スバルは俺が”戦闘機人だから”、”殺せる力があるから”お前を嫌いになるとか思ってたのか？」

「……うん」

「なめんな。その程度で嫌いになんかならないさ。別にお前はお前だ、なんてことを言うつもりはない。俺にとっては、戦闘機人とかそうじゃないとかは小さなことだから、スバルとギンガの気持ちさえあればいい」

「私達……気持ち」

戦闘機人は嫌われなければならないのか？そんなことはないだろう。どのように生まれたとか、そんなことは些細な問題だ。

「俺は、お前らを嫌わない。見捨てない。裏切らない。だから教えてくれ……お前達はとうなんだ？」

「私は……みんなと一緒にいたい……」

「私だって……戦闘機人だからって嫌われたいなんて思いませんよ」

「んじゃそれでいい」

「「え？」」

これがこいつらの気持ちなら、俺はそれを受け入れるだけだ。

なのは達もきつと受け入れる……あいつらそういう奴だからな。

「俺はスバルのことは気に入ってるし、ギンガのことも嫌いじゃないしな。お前らが嫌わない限り、俺はお前らを嫌わない。いや、お前らが俺を嫌っても、俺はお前らを嫌わないだろうな」

「そんな！右京さんを嫌うなんて……」

「私もいきなり嫌うなんてしませんよ」

「ありがとうよ……ま、俺が言いたいのは、戦闘機人とか気にすんなってことだ。生きてることに変わりはないんだから」

泣いて、怒って、焦って、笑って……アイスが好物で、ティアナが大好きで、なのはに憧れる……極々普通な女の子。

それが、俺の中のスバルだ。

ギンガの方はよく知らないが、後々に知ればいい。

だから……。

「これからよろしく頼むぜ？ナカジマ姉妹」

「……はい！！」

「……はい。よろしく願いますね、右京さん」

完全に和解した後にスバルから聞いたが、俺の元にくる前になのは達にも戦闘機人やISがどうこうという話をしたらしい。

結果は予測通り、そんなこと気にせず、今まで通りだと言っていた。

俺の体の状態のこととも言われたが、精神世界でレイジングソウル……ソルに聞いていたからさほどビックリもなかった。

ただ、リンカーコアという魔力を生み出す核に多少の傷が付いたということだ。

よほどの無茶をしなければ傷は広がらずに自然と治る為、あんまり大きな魔法は使わないようにと言われた。

大きな魔法なんか使えないっつの。

今日は医務室に泊まることとなり、エリオとキャロに寂しそうな顔をされてしまったが……なぜか、なのはが隣で看病することとなった。

「スバルにもティアナにも負けない……」

と呟いていたが……まさかな。

因みに、なのはは隣のベッドで眠った。

「おやすみなさい……右京兄い」

「スバル？なんか言った？」

「何でもないよティア」

その心、安堵して（後書き）

原作より早いですが、ナカジマ姉妹が戦闘機人であることが露見しました。

賛否両論で激しく怖いですが……

右京「心配してくれたみんな、ありがとな。無事だったから安心してくれ」

近い内に番外編書きますね。

右京「それじゃ、またな」

開催！機動六課タッグマッチ！（前書き）

今回は短い上に、オリジナル展開です。

右京「番外編はもう少し待ってくれな」

それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第19話！

右京「開催！機動六課タッグマッチ！スタートだ」

開催！機動六課タッグマッチ！

「凄い回復力ね……もう治ってるなんて……」

俺が今いるのは医務室。

今はシャルマルに身体を診てもらっていたところだ。

「でも変ね……リンカーコアは治ってないなんて」

シャルマルの診断では、もう身体はすっかりと治っているらしい。

俺は骨折すら二、三日で治せるからな……実績もある。

だが、リンカーコアが治ってないのはなぜだ？

スバルの話では、リンカーコアの傷は内臓よりも小さかったハズ……。

「問題があるのか？」

「傷自体はごく小さいものだから、大丈夫だと思うわ。ただ、これ以上傷が広がったら、何らかの影響があるかも……」

「そうか……まあ、心配はないだろう。訓練には復帰していいのか？」

「ええ、復帰しても問題ないわ。でも、無茶はしないでね」

「了解だ。シャル先生」

互いに笑い合い、俺は医務室から出た。

訓練復帰まで5日間か……長かったな。

その間、なのはに看病されたり、ティアナに訓練の様子を見せて貰ったり、スバルとギンガが食べ物（アイスとチョコポットという菓子）を持ってきたり、エリオとキャロが医務室で寝泊まりしたりと暇になることはなかったが。

そんな5日間の思い出を思い出して笑みを浮かべながら、俺は食堂に向かった。

時刻は11:30……昼には早いが、訓練は終わった頃だろう。

「あ、右京さん」

「お兄さんです!」

「右京さん?体はもういいの?」

「はやてにフェイトにリインか。もう大丈夫だと、シャルの判断をもらったよ」

食堂に來ると、数人の隊員とはやて、フェイトとリインの姿があった。

俺はおばちゃんから今日の昼飯……クリームシチューと三つのクロワッサン、カフェオレをトレイに乗せてはやて達のテーブルに座った。

因みにクロワッサンの語源は三日月……クレセントから來ているらしい。

どうでもいいな。

「右京さん、隊には馴染んだ？」

「まあ、馴染んでは思うが……」

「右京さんならすぐに馴染んでるよね。ねえ、私と模擬戦しない？」

「また今度だな」

「お兄さん！それ一口ください！」

「分かった分かった。ほれ……っ？」

何気ない会話。

そんな会話だが……なんだ？

俺はこの会話を知っている？

「お兄さん？どうかしたですか？」

「……いや、何でもない。熱いから気を付けろよ？」

「はいです あーむ」

さっきのは単なるデジャヴ……デジャヴなんてよくあることぞ。

クリームシチューをスプーンで救い、リインの口へと運ぶ。

リインは美味しそうに、それを飲んだ。

俺はそれを見て、満足そうに笑みを浮かべる。

「右京さんとフェイトちゃんの模擬戦、見たいなあ……模擬戦……」

はやてが食事の手を止めて右手を顎に手を当てて、何やらブツブツと呟く。

そんなに俺とフェイトの模擬戦を見たいのか……？

順番的には、俺はまずシグナムと戦い合いたいんだがな。

「あ！右京さん！」

【右京（さん／兄い／お兄さん／お兄ちゃん）！！】

「どおおおおお！？」

食堂にやってきたのはとフォワード達は俺の姿を見つけるや否や、

いきなり猛ダッシュで俺に突撃してきた。

イスに座って油断していた俺がそれを避けきれぬ訳もなく…… 4人（ティアナは突撃しなかった）に抱きつかれて下敷きになった。

「お前らはまた俺にベッドの上で生活しろってんだな？ん？」

【ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい】

俺は今、俺に突撃してきたのは、スバル、エリオ、キャロを食堂の中心で正座させて説教中だ。

その様子を生暖かく見守る隊員達、フェイト、ティアナ、シグナム、ヴィータ、リン。

因みに、突撃から三十分ほどの時間が経っていた。

「喜喜……それくらいにしてやれ」

「そうだぞ、なのはもこいつらも、お前のことをずっと心配してたんだからな」

シグナムとヴィータからそう言われてしまった。

勿論、そんなことは承知している。

なのはなんか、オーバーワークの中に俺の看病までしたんだからな。

「……まあ、今回はこれくらいにしてやるさ」

【ほっ……】

そんなあからさまに安堵しなくてもいいと思うんだが。

そんなにきつかったのだろうか……たかだか30分程度で。

「右京さんにフォワード達で5人と一匹……隊長陣が5人にリインとザフィーラを入れて12人+1……」

はやてはまだブツブツ言っている。

ザフィーラか……またあんな熱いケンカをしたいもんだな。

ただ、六課の番犬扱いになっているのは見ていて辛いな……。

「これや……!」

と考えているとはやてがテーブルをバンツと叩いて勢いよく立ち上がった。

何やら両手を強く握り締め、目はやる気に満ちている。

「はやてちゃん?どうしたの?」

「なのはちゃん！午後の訓練予定変更や！！ちよつとこつち来て！
フェイトちゃんもシグナムもヴィータもや！」

「「ちょ……はやて！？」「」

「主！？」

「にゃあああゝゝ！？」

なのはははやてに右手を掴まれて連れ去られ、他の隊長陣三名は後を追っていった。

隊員達是我閑せずを貫き、残された俺とフォワード達とリインは……。

「……さて、飯食って午後の訓練に備えとけ。なんかやるっぽいから」

【はい】

さて、食事の続きをしますか。

流星はおばちゃん……冷めてもクリームシチューは美味かった。

午後の訓練の時間、俺達は訓練場であるバーチャルフィールドにい

た。

バーチャルフィールドはいつもの廃墟や森ではなく、闘技場……ロシアムだった。

そしてここには俺達フォワード達、隊長陣、リイン、ザフィーラの計12人+1がいる。

そしてはやてが言ったことを要約すると……。

「俺達全員で殺し合いをしろと」

「誰がバト　ロワイアルをしろ言っただけ？ トーナメントやトーナメント！ この12人で二人一組になってトーナメントする言っただけ……！」

ということらしい。

改めて説明すると、はやてが午後の訓練の代わりにしようとしたのは今言った通り、トーナメントだ。

12人で二人一組の計6チームを作り、優勝目指して戦うのだとか。

因みに、チームは既に決まっているらしい。

「という訳で、チームの発表や」

まず一回戦、第一試合を戦うチームの発表だ。

Aチームは……スバルとティアナ。

「頑張ろうね！ティア！」

「そうね、やるからには優勝を目指すわよ！」

対戦するBチームは……キャラ＋フリードとはやてだ。

「よ、宜しくお願いします！」

「ん、よろしゅうなキャラ」

はやては広域魔導師であり、キャラは完全な補助、援護型。

対するAチームのスバルはフロントアタッカー……フォワード随一の突破力と機動力を持ち、ティアナは視野が広がったし、援護も上手い、バランスの取れたチームとなった。

第二試合を戦うCチームは、リインと俺だ。

「お兄さんですね！リインも頑張るです！」

「ああ、頼りにしてるぞ」

対するDチームは、フェイトとエリオ。

「やった……右京さんと模擬戦が出来る　頑張ろうね、エリオ」

「はい！フェイトさん！」

Dチームはスピード型の親子チーム……スピードで翻弄されないよ

うにしないとな。

対するCチーム……俺達のチームは……。

「どうなんだ？リイン」

「大丈夫です！リインにお任せです！」

だ、そうだ。

一体、リインがどのように戦うのか分からないが、このトーナメントに選ばれるくらいだし、戦闘力は高いと見ていいだろうな。

第三試合を戦うEチームは、なのはとシグナム。

「右京さんと組みたかったなあ……でもシグナムさんとなら、優勝も充分狙えますね」

「無論だ。戦うからには勝つ！」

対するFチームは、ヴィータとザフィーラ。

「最初はなのはとシグナムか……油断できねえな」

「俺はもう一度右京と戦いたいのだな、誰であろうと負けるつもりはない」

Eチーム……なのはとシグナムは、先のAチームのようにバランスの取れたチームだ。

なのはの砲撃とシグナムの剣撃には要注意だろう。

対するFチームは、全チーム中でもっとも防御力の高いチームだ。

盾の守護獣（異名か？）たるザファイラと鉄槌の騎士（異名だろうか？）ヴィータ……優れた盾と矛を持つチームだな。

尚、三回戦の勝者は決勝まで直行できる。

「で、優勝したらなんかあるのか？」

「当然あるで」

そいつは楽しみだな。

しかし、このコロシアムの周りにいる観客……よく見たら六課の隊員じゃねえか。

仕事しろ仕事。

「優勝したチームには……このミッドチルダで一番人気の遊園地、”エデン・サンクチュアリ”のペアチケット贈呈や！」

【ペアチケット！？】

エデン・サンクチュアリってどこやねん。

因みに、ペアチケットに反応したのはなのは、スバル、ティアナ、キャロだ。

「更に、優勝したチームは明日の1日だけ、特別休暇も贈呈するで！」

大盤振る舞いだな。

優勝すれば、休暇を貰えて遊園地にも行ける。

負ければ、普段通り仕事か。

「ねえ、はやてちゃん。一緒に行きたい人が仕事だったら、ペアチケットの意味がないんじゃない？」

「なのはちゃんが言いたいことも、一緒に行きたい人も分かる。だから、一緒に行きたい人にも特別休暇を出すで」

【よし！！】

分かりやすいくらいやる気が上がったな。

しかも、なのはもスバルもティアナもキャロも俺を見ている。

ガン見だガン見。

隣のラインなんか震えてるぞ。

「それじゃ、ルール説明や」

一試合につき、制限時間は30分。

隊長陣はリミッターを付けたまま試合を行う。

隊長陣のリミットブレイク、フルドライブも当然使用不可。

ステージは一回戦が森、二回戦が廃墟、決勝戦はコロシアムとなる。
カートリッジの使用に制限はない。

チーム二名が戦闘不能、あるいは降参で決着。

タイムアップの場合は、互いの消耗やダメージの具合を見て判断する。

以上がルールだ。

つまり、飛ばうが召喚しようが後は何でもありってわけだな。

「質問は……なさそうやな。準備はええな？」

【おうー!!】

「それでは!!!機動六課タッグマッチ……開催や!!!」

狙うは当然優勝だ。

やるからには……勝つー!!

開催！機動六課タッグマッチ！（後書き）

このまま原作通りに進めると早くに終わってしまいそうなので……
姑息ながら時間稼ぎを

ソル「本当に姑息ですね……バラバラにしますよ」

すみません、8分割は勘弁して下さい

ソル「せっかく私が擬人化をしてマイマスターと……エヘ……」

ストーリーが浮かばなかったもので……やるなら藍蘭島のような短編をいくつか練り込んだものを

ソル「スラッシュスタイル」

ソルさん？なぜセカンドフォルムに……ちょっなぜ魔力刃が作られ……アッー！！

ソル「見せられないよ」 看板

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6350w/>

流れ着いて!ミッドチルダ!

2011年10月10日02時50分発行